

ウラムが其子を犠牲に供へたる事に於ては(創世記)子が犠牲に供へられたることの外に、尙或他の奥密なること、即ち十字架をも理解せざるべからず。又エギベトの小羊に於ては(ハリストスの)苦難の状態を見る。爰にも亦同様に理解せざるべからず。預言者はアラビヤ人及び近隣の人民に就きて言ふに「**万民**」を招けるなり。「**蓋至上の主は畏るべくして全地を治むる大王なり**」。彼は最初に斯く重大なる福音を聞くこと、一般に神を讚美すること、或神聖なる靈的祭典及び天より齎したる機密に聴衆を招ぎつゝ之を奮起す。故に預言者は「**手を拍てよ**」即ち「**樂み歡べよ**」とは言ふなり。福音書に「**樂めよ**」(ルカ福音)と言ふ時は、福音の教も亦勿論跳ねず躍らすして躍り跳ねるは無禮なり、乃ち行はるゝことの大に喜ぶべきことなるによりて、特に強き歡を言ひ顯しつゝ同一のことを訓誡するなり。たゞ福音の教は太陽が照らす所の何處にも弘布し、救贖は全世界に傳はり、以前に岐路に彷徨へる者もまたイウヂヤの奉事以上に睿智を顯せり。「**萬民よ、手を拍てよ**」。以前には不潔にして穢れたる手、日々不淨なる犠牲の血に汚れたる手、爾等が子女を殺し醜き事を爲し己の天性に悖りて行ひたる手、此等の手をもて今拍手すべし。「**歡の聲を以て神に呼べ**」。爾等が不淨物を味ひし所

の舌神を衰潰する言語を吐きし所の舌、此舌をもて凱歌を高唱すべし。然れば軍士は敵軍の敗北する時は頑固なる戦争を續けず、乃ち友誼的叫喚と呼聲とを以て、敵の既に驚かされたる心を震動せしむる慣習を有す、而して手を以てせず、乃ち手及び武器の代りに一の叫喚を以て戦争を終るに足れりとする時は、叫喚も亦赫々たる勝利及び至大なる凱旋の徴表となるなり。

二。此等のことはハリストスの行ひし事なりき。ハリストスは自ら殘酷なる戦争を鎮め「**強き者**」を縛りて其器を却せり(マテ福音)。然れども彼は人を愛する者なるによりて、毫も功勞なかりし者に勝利と戦利品とを許與して娛ましめ、又彼等自ら之を爲して勝利を得しが如く凱歌を謳ふことを命ず。然れば吾人は皆低聲を以てせず、乃ち高聲をもつて「**死よ、爾の刺は安にか在る、地獄よ、爾の勝は安にか在る**」(コリント前書)と呼び、又「**神は呼ぶ聲に伴はれて升れり**」と呼ばん。他の聖詠には「**爾は高きに登り、擄者を擄にし、人々の爲に献物を享けたり**」(聖詠六十九)とあり。嘗てイウヂヤ人もエギベトの軍勢を溺れしめたる時「**我主を歌ひ頌めん、彼は高らかに高く在すなり**」(出埃及記)てふ凱歌を歌へり、然れども吾人の歌は之よりも遙かに壯嚴なり、何となれば今亡びたるはエギベト人にあらずして惡魔なり、掠奪されしは



感覺的武器にあらすして罪は殺されたる也。紅海に於てせずして洗禮の洗盤に於てす、又吾人の行く所は約地にあらすして天に進み、味ふ所は「マンナ」にあらすして主の體を領け、飲む所は石より湧き出でし水にあらすして、ハリストスの脇より流れ出でし血なればなり。是に由りて預言者は呼びて「手を拍てよ」といへり。爾等は舊約の石及び木によりて救はれ、天及び諸天の天に昇りて王の寶座の前に立てり。然れば「神に呼べ」即ち神に感謝を献り、勝利を神に歸し、戦利品を神に歸せ。是れ人の戦争にあらす、感覺的格闘にあらす、苦行は世俗の或事の爲にあらすして、天の爲及び天の福樂の爲なり。彼は自ら此戦争を指揮して吾人に勝利を賜へり。「蓋至上の主は畏るべくして全地を治むる大王なり」。獨生子の光榮を輕蔑する所の名は今何處にかある。視よ、子は父の斯く名づけられしが如く、大王と名つけらるゝを。ハリストスは「天を指して誓ふ勿れ、是れ大王の城なればなり」(マテ五、三十四、三十五)といひ、又聖書の他の個所にも「大能の神」即ち王(イサイ六)といへり。然れば爾は爾の主が釘うたれ、十字架に舉げられ、葬られ、地獄に降りると聞くとも、擾亂憂悶する勿れ、何となれば彼は「至上者」にして、其天性至高き者なればなり、而して天性の高きものは高き所より落ちて卑くきものとはならず、乃ち

神の高は其謙卑の中にも存して外現するものなり。然ればハリストスの死するや、死に對して特に己の權力を顯せり。福音者曰く「光は暗に照り、暗は之を蔽はざりき」(イオアン一、五)と。斯くの如くハリストスの高きことは謙卑の中に顯れたり。視よ、如何に彼が地獄にありて高きにある凡てのものを震動せしめたるかを、其時太陽は光を隠くし、石は裂け、幔裂け、地震ひ、イウダ驚き、ピラトと其妻とは畏れ、裁判者は自ら己を義とせり。然ればハリストス縛られ、鞭うたれたりと聞くとも、心を亂すことなく、乃ちハリストスが如何に挫措の中に在ても己の能力を顯したるを視よ。彼が唯「爾等誰を尋ぬるか」と問ひし時、彼等地に仆れたり(イオアン一、四)。爾は彼が如何に「畏るべきか」即ち彼は一言一手號をもて如何なる事を行ふを見るか。爾は彼を死者として見る時は、轉ばし移されたる石、畏れて墓の側に立てる天使、破壊されたる地獄、蹂躙されたる死解放されたる囚人を想像せよ、然らば彼が如何に畏るべきかを悟らん。彼若し己の謙卑の時に於て、天の土地の上及び地獄に斯る能力を顯したらんには、其再臨の時に於ては如何なる能力を顯さんや。彼の謙卑の時に於て惡鬼等は泡沫を流し、挫措を毀ち、人の通行せざる場所を歩みつゝ、「神の子よ、我等爾と何ぞ與らん。時未だ至らざる先に爾我等を苦めん爲に此に來りし



か「（マタイの廿九）と云ふを聞け。彼等若し當時斯く言ひたらんには、ハリストスが再び来るの時、天軍等も震ひ、太陽も暗まり、月も其光を失ふ時は、彼等將に何をか云はん。預言者の『至上者は畏るべし』と言へるは之に由りてなり。換言すれば、ハリストスが全世界に天使を遣し、万物は震ひ、地は動き、死者を甦へし、天は布の如く纏絡し、畏るべき寶座は立てられ（ダニエルの七の九）火の河は流れ、書は開かれ、各人の暗に於て行へることは顯然になり、堪ふべからざる罰と苦痛畏るべき能力抜き放たれたる劍と、地獄に引導することのあらん時、凡ての勳功も、王も、將軍も、市長も、族長も、廢れ、多くの天使及び致命者、預言者、使徒、司祭、修道士、顯れ、人々の理解し得ざる得も云はれざる賞與報酬、榮冠、幸福の續く所、此日に就きて報じつゝ、誰か當然に凡てを言ひ顯し得んや。

三。誰か一言を以て之を顯し得んや。預言者もし「主よ、爾の工業は何ぞ大なる」（聖詠九十の六）と言ひて造物を畫きつゝ、疲勞して退き、又バザルもし神の照管の一種類を觀察しつゝ、「嗚呼、深い哉、神の富」（ロマの十一の三十三）と叫びたらんには、此創造の日を畫き始むる者は何をか云はん。預言者は此等のことを預視し、且つ世界の救贖を示しつゝ、「至上の主は畏るべくして、全地を治むる大王なり」と言へり。彼は

以前にも大王たりしも、識られざりき、即ち彼嘗て世に在り、而して世は彼を知らざりしなり（イオアンの十）然るに今や彼は之をも爲し、自己の有となせし所の吾人の爲にも大王となれり。質朴にして無學なる、貧しくして身分もなき者、生國を棄て、魚の如く無言なる者、身に一衣を着け、足には沓なく、殆ど跣足なる十一人を全世界に遣し、其命に従ひて萬民を漁りしたる者は、實に大ならざるか。彼は即ち迷途より全世界を潔め、短日月に於て真理を握め、惡魔の主權を絶滅したる大王なり、彼は臣下なきも、能力と權柄とを有する所の大王なり、而して其能力と權柄とを有するは、奴隸あるが爲に、ならず、外部の状態及び衣服によらず、乃ち己の天性によりてなり。ハリストス曰へり「我此が爲に生れたり」（イオアンの三十七）と。彼は外部又は何處より取るにあらざるも、名譽を有し、王たるが爲に、何ごとをも待たず、欲する所の凡てを爲す所の大王なり。彼は「往きて悉くの受造物に傳へよ」（マルコの十五）と言へり、而して言は實行となれり。「我望む、潔まれ」（イオアンの三）我爾に告ぐ「匿なる鬼よ、彼より出でよ」（マルコの九の廿四）「黙せ、靖まれ」（全七四の三十九）「惡魔の爲に備へられたる火に往け」（マタイの三十四の九）は到る處に彼の權威を見るか。彼の能力を見るか。彼は己に従ひし者が、その誠命を破らんよりは、寧ろ己の生命を擲たんと決心したる程に、彼等を自己に牽引た



り。現世の王は己の臣下より名譽を受くるも、ハリストスは自ら名譽を己の臣下に賜ふ。視よ、何によりて彼處には只一の名稱のみありて、爰には實行あるかを。ハリストスは世界中を天となし、野蠻人をして智を愛し、天使に則ることを教へし所の大王なり。『彼は諸民を吾等に從はせ、諸族を我等の足下に從はせたり』<sup>(四)</sup>。嗚呼奇蹟なる哉。彼を十字架に釘うちし者に、彼を叩拜することを得せしめ、ハリストスは己を凌辱めし者己を養濟したる者、石像を崇拜したる者に教ふるに、其聖旨に従ひて己の生命を棄つべきことを以てせり。此事の眞に行はれしは、使徒によりてにあらす、即ち彼等を指導し、彼等の靈を統治めたる者によりて行はれたるなり。若し主の説教にして凡ての障害を除かざりせば、漁者又は天幕製造者如何で斯る變化を世界に生じ得んや。使徒等は妖術者と暴君辯士と哲學者及び其他の反對者を塵埃の如く飛び散し、煙の如く吹き拂ひ、斯くして武器によらず、財貨によらず、乃ち平易なる言を以て眞理の光を弘めたり、換言すれば、彼等の言は普通の言にあらすして、凡ての行爲よりも強きものなりき。彼等が十字架に釘うたれし者の名を呼ぶや、死は遠ざかり、悪鬼は遁逃し、病は愈され、障害されし身體は治し、悪は亡ばされ、危険は消滅し、物質は變化せられたり。

是に由りて彼等も吾人に對ひて、ハリストスは何故に十字架の上に於て自ら己を救はざりしかと言は、吾人は之に答へて曰はん、これ一層驚くべきことなりと。實際十字架より下ることと十字架に釘うたれながら己の名をもて多くの死者を甦らしむることとは同一にあらす。而して彼が當時甘じて十字架の上に止まりしは、是れ後者を選びたることを證するなり。彼若し他人に及びし死より彼等を救ひたらんには、況て死の己に及ばざるに先だちて自ら己を救ひ得ざらんや、ハリストス若し人々に生命を賜ひたらんには、況て自己に生命を賜はざらんや、即ち彼は死後三日を経て大能を以て復活せり。此れ後者を選べることを證せしなり。ハリストスの名は、若し之を人の肉體の上に唱へたるによりて死を放逐したるが如き能力を顯したらんには、何人も彼が自己の肉體の上に大能を顯して死を征服することを疑ひ得ざるなり。『彼は諸民を我等に從はせ、諸族を我等の足下に從はせたり』。預言者の智なるを見よ、彼は如何に凡てのことを正確に言ひ表すや。使徒等が後に『何ぞ我等に目を注ぐこと、我等が己の能力或は敬虔を以て彼を歩ませし如くする』<sup>(三の十二)</sup>と言ひしことに就きては、預言者も既に前に言へり。『足下に』てふ言は征服されしこと、或は之を換言すれば、大なる服従を示



すなり。若し此服従の如何に大なるかを知らんと欲せば、聖書に聞け。曰く「凡そ地或は家を有てる者は之を售り、其售りたる價を携へて使徒の足下に置けり」(使徒十四の三)と。或者は財産と偕に己の靈をも與へたり。パウロ曰く「我が生命の爲に其頸を置けり」(六の四)と他の人々に就きては「若し能すべくば爾等己の目を扶りて我に與へしならん」(四の十五)と言ひ、コリント書には「蓋視よ爾等が神の爲に憂ひし事は如何なる屬を爾等の衷に生ぜしか、即白訴、即憤慍、即畏懼、即熱慕、即熱心、即罪を責むること是なり」(書七の十二)といへり。然れば彼等は使徒等を尊敬し又之を畏れたり。ルカは又「餘の者は敢て彼等に附かざりき、然れども民は彼等を崇めたり」(使徒行實の十三)といひ、パウロは「爾等何をか欲する、我杖を以て爾等に臨まんか抑愛と溫柔の神とを以てせんか」(書四の廿二)といへり。

四。爾は使徒等の功德と權威とを見るか。此等のことは、ハリストスが使徒等を遣して「我恒に爾等と偕に在り」(二十の二十)と宣べられし言をもて行はれたるなり。ハリストスは自ら使徒等に先だちて障害を滅し、自ら凡てのものを平等にし、又困難なることを容易なることとなせり。以前には凡ては戦争にて呼吸し、凡ては懸涯深淵にて行はれ、足を立つるの所もなく、止まるの所もなく、凡ての港は封鎖され、

凡ての家は閉され、諸人の耳は蔽はれたるも、使徒等の出で、傳道し始むるや、敵の障壁は悉く破壊されたり、故に聴衆は傳へられたることの爲に己の生命を惜まずして無数の危険に服せり。「彼は我等の爲に嗣業を選べり、即其愛する所のイアコフの榮なり」(節五)。視よ、預言の正確なるを。前に預言者は「彼は諸民諸族を我等に従はせたり」と言へり。而して實にイウデヤ人は、先づ初に三千人、次で五千人、積いて諸族異邦人は、彼等に向へり。然れば主自ら「我に他の羊あり、我は彼等をも引くべし、而して一の群一の牧者と爲らん」(イオアンの十の十六)と言へり。次に何人か「彼は我等の爲に嗣業を選べり」と言ふ言を聞き、疑ひ惑ひて、何故にイウデヤ人は今信せざるかと言はざるが爲に、預言者は言を増補ひて疑を解けり。神は自己の方より彼等をも選び、出來得る丈何人をも遣てざりき。爾若し原因をも知らんと欲せば、左のことを聞け、預言者附加へて曰く「即其愛する所のイアコフの榮なり」と。我はパウロが「此れ神の言の廢れたり」と云ふに非ず、蓋イズライリよりする者は、盡くイズライリたるには非ず、乃ち言へるあり、イサクに在りて爾の裔と稱へられんと、是れ即肉體の子は神の子たるに非ず、唯許約の子は裔とせらるゝなり」(ロマ書九)と言ひて、解明せしが如く、彼は爰に信者を理解



すと我は思ふなり。信者をば正しく民の『榮』と名づくべし、何となれば當時の信者より美麗しき者なければなり。

預言者が此民を神の『嗣業』と名づけたるは、神が嘗て他の民を遺てたるに由るにあらず、乃ち此民に對する神の強き愛と近接すること、特別なる照管とを言ひ表したるなり。而して爾に預言者の言の正確なるを知らしめん爲に、彼が如何に人々の購求する物品に就きて、普通に使用する所の表言を用ふるかを見よ。多くの人々は何ものをか購ひ求めて、他の品に勝るものを『榮』と名づく。然れば預言者は凡ての者必ずしも救はれざることを示さんと欲して、『イブコフの榮なり』と云へり。福音の中にも亦同じく多くの譬喩にて言ひ表さるゝなり。『神は呼ぶ聲に伴はれて昇り』(六)。預言者はハリストスが彼を導く所の或人の幫助によらず、乃ち自ら此途を歩めることを言ひ顯しつゝ、昇せられたりとは云はずして、『昇れり』と言へり。イリヤはハリストスの昇りしが如き途を昇らずして、他の力にて昇せられたり、何となれば人の天性は人に固有ならざる途を歩み得ざるも、獨生子は己の權力を以て『昇り』たればなり。故にルカも『其昇れる時、彼等天を仰ぎたり』(使徒行傳一)と云へり。彼は何時取られたり、或は擧げられたりと云はざり

き、何となれば此は彼自らの昇ることなりしに由る。ハリストスもし未だ十字架に釘うたれざる前に、物質的の體及び苦難に服されたる體を着けながら水面を歩みたらば、彼が不朽の體を受けて空中に昇ることは驚くべきことなるか。『呼ぶ聲』は何處にあるか。ハリストス昇りたらば、呼びしは何人なるか。當時其處にありしは沈黙と唯十一人の弟子等のみなりき。此等の表言は文字通の意味に受くべからず、乃ち此等の文字にて示されたることに達せざるべからず。我は聖詠の始に於て、彼は呼ぶ聲をもて他の或もの、即ち勝利と戦利品とを示せりと言へる如く、彼は愛にも『呼ぶ聲に伴はれて』と言ふ、即ちハリストスは死を蹂躪し、罪を破壊し、惡魔を放逐し、迷謬を亡ぼし、凡てを最も善きものと變じ、吾人の天性を以前の天性に、或は一層善き所の生國に導きて、勝利を以て昇りしことを言ひ顯すなり。而して彼が昇る時は罪の權威も、死の權力も、詛の力も、腐敗及び不虔の主權も、其他之に類する何ものも、彼に抵抗せず、乃ち蛛網の如く此等のものを破り、惡鬼の集會、惡魔の能力及び其他のものを破り、且つ嘉せし所のことを行ひて、昇れり。

五。視よ、何に由りて、バザルはハリストスの勝利を畫きつゝ、『首領權柄より力を奪ひて、彼は顯に之を辱しめ、十字架を以て彼等に勝てり』と云ひ、又我等に對する禮儀



の勞我等を攻むる者を抹し彼は之を中間より取りて十字架に釘せり」(コロサイ書二)と云へり。『主は角の聲に伴はれて昇れり』。預言者は之を以て同一のことと即ち赫々たる勝利を言ひ顯すなり。然れど爰には著しき事明かなる事壯嚴なる事等を理會するを得。縦し此事件に就きて何人の之を知らざりしとするも、此事件たる恰も角或は之にも増して鳴り渡りしが如く著しきものとなれり。此事件は當時靜かに生じたるも殆ど世界住民の何人にも隠れずして、其事實は恰も角或は之にも増して鳴り渡りしが如く其事件を發揚せり。實に角の聲も事實の聲が後に其事件に就きて凡ての雷よりも強く(ハリストスの昇天を報じて之を證せしが如くに衆人を此觀に招ぎ得ざりしならん。雷と雖も事實が明かに當時の人々及び將來の人々に宣言したるが如く全世界に轟き得ざりしならん。雷は唯其處に居る者の爲に聞ゆるのみなれども、此等の事實は角よりも明かに雷よりも強く事件を諸民族に報じたり。

然れど使徒等の口を角而も銅の角にあらず乃ち黄金よりも寶石よりも貴き角と名づくるとも過言には非ざる也。然るに預言者は何の爲に角に伴はれてと云はずして『角の聲に伴はれて』と言ひしか。パウロが故に我と彼等とを論せず、

我等是くの如く傳ふ』(コリント前書)と言ひ、又信じたる衆民は心を一にし靈を一にし」(使徒行實四)と言ふが如きは、彼等の同心一致を顯さん爲なり。使徒等が角の如く報じたるは、戦争に對して呼びしにあらず勝利を福音したるなり。彼等の行軍するや、旗を携へて先導し、また目にて見るのみならず、耳にも作動きつゝ全軍を鼓舞せんとて角をも軍隊に用ひしが如く、當時も亦斯くの如くなりき。使徒等の或市に入るや、恰も角を鳴したるが如く、衆人は彼等に聞かんとて群集せり。「我が神に歌ひ歌へよ、我が王に歌ひ歌へよ。蓋神は全地の王なり、皆智慧を以て歌へよ。神は諸民の王となれり」(七節至九節)。預言者は事件の偉大なることを述べ、大なる熱心を以て神を讃揚するに世界を招ぐが故に、幾回か「歌へよ」を重複す、而も唯單に歌はしめずして大に理解して歌はしむ。「智慧を以て歌へよ」とは何の意なるか。遭遇せし所のことを知り、事件の偉大なるを悟りて歌へよの意なり。思ふに、預言者は「智慧を以て」てふ言にて、尙或他のことを言ひ表すなるべし、即ち雷に聲を以て歌ふのみならず、行を以てし、雷に口を以てするのみならず、又生活を以て歌ふべきを云ふなり。「神は諸民の王となれり」とは如何なる國のことなるか。造られし國を云ふにあらず、吾人を神の有と



ならしむる國の王を云ふなり。神は以前にも造物者として衆人の王たりしが今や自由にして且つ感謝して神に服従せし人々の上に王となれり。實にイウデヤ人に罵詈せられたるハリストスが全世界に讃揚せらるゝが如き變化を人々に生ぜしめたることは大に讚美すべく且つ驚くに堪へたり。何時も預言書を讀まず、律法をも知らずして野獸の如く生活せし者は急激に變化し、凡ての迷謬を棄て、順服せり而して其數は或小數の民族にあらず乃ち全世界の住民なり。

「神は其聖なる寶座に坐せり」「寶座に坐せり」とは何の意なるか。王となることなり、統治することなり。預言者が「聖なる」と言へるや善し、何となれば彼は常に王たるのみならず、聖にして王たればなり。聖にして王たるとは何の意なるか。潔くしての意なり。人々の權威を得るや己の能力を不義に用ふるも、神の權威は凡ての不義を遠ざかりて潔く且つ聖なり。彼の裁判所は盛感或は之に似たるものを以てするも變せず毀はれず乃ち常に潔淨正義にして凡ての潔白よりも明かに光り言ふべからざる光榮にて輝くなり。「諸民の牧伯はアウラムの神の民に聚れり、盖地の盾は神にあり、彼は其上に高く擧げられたり」(十節)

六。爰に示さるゝことは、常に普通の人民に關はるのみならず、王冠を戴き王の寶座に坐する者に關はる福音の弘布することなり。次に預言者は舊新約の神の同一なるを言ひ表しつゝ、「アウラムの神」と言ふ之を言ひ換ふれば、神は同一なり。列祖の神及び律法を與へし所の神なりとなり。然ればイエレミヤも新しき契約を立つる日來らんこの契約は我が彼等の先祖の手を採りて、エギベトの地より之を導き出せし日に立てし所の如きにあらず(イエレミヤ書三十一、三十二)と言ひて、新舊約の律法者の同一なることを言ひ表せり。ワルフも亦律法を與へし者は藉身したる者、而して藉身したる者は律法を與へし者なることを言ひ表しつゝ、「此れ我等の神なり、他の何者も之と較ぶるを得ず。彼は凡そ容智の途を尋ね出して、之を己の僕イアコフと己の愛するイズライリとに賜へり。其後彼は地上に顯れて人々の間に向へり」(預言者ワルフ書三の三六至三十八)と言へり。此預言者も亦「アウラムの神の民に聚れり」と言ふに於て同じく言へり。抑も此事は如何様にして生じたるか。「盖地の盾は神にあり、彼は其上に高く擧げられたり」。此等の「神にあるの盾は」使徒等及び凡ての信する者ならずして誰ぞや。彼等の能力は斯くの如く輝きたるが故に預言者は彼等は衆人の上に擧げられたりと言へり。



預言者は彼等を盾と名づけたるや善し。實際に全世界と悪鬼と悪魔人民市邑異邦人暴君罰燒鍋の上暖爐の中の苦痛風習及び天然力に抵抗し、万有に打勝ちて其上に立ち、何物にも勝たれざりしは盾にはあらざるか。言語は金剛石よりも堅く如何なる時も彼等を毀傷はず、乃ち福音の誠命は到る處世界の四方に弘められ、日々益々成長するは盾にはあらざるか。吾人は此等のことの爲に、光榮權能の今も何時も世々に歸する所の仁慈なる神に感謝せん。アミン。

### 第四十七 聖詠講話

ユレイの諸子の詠

主は大にして、全地を喜悅もて善く植ゑ付けつゝ、我が神の城邑に、其聖山に讚揚せらる(正教會譯のには「主は大にして我が神の城邑に其聖山に讚揚せらる。シオン山は美し」)節。他の譯者は「全地の美しき萌芽なり慰藉なり」(アキ)となし、第三の譯者は「始まり預定されたる全地の光照なり」(シム)となす。

一。預言者は爰にも戦争の廢止すること及び闘争を免るゝとを畫けり。イウデ

ヤ人はワビロンの地より還り、永年の囚虜より免され、再び父祖の地を受け、且つ多くの戦争を避けて此等の諸福を感謝するが爲に、此等のことの原因者に對ひて「主は大にして讚揚せらる」と謳歌せり。預言者は「大にして」と言ひしも、其如何に大なるかを言はざりき、何となれば何人も之を知らざればなり、故に彼は附加へて「讚揚せらる」と言へり。彼の偉大なるや窮極なし。此等の言の意味は左の如し、曰く、彼獨りを讚美し、而も格段に讚美頌揚し、神の本性の無限にして且つ悟るべからざる程偉大なるが爲、又彼の吾人に對する無量の仁慈の爲にも感謝せざるべからずとなり。彼は欲する所を與ふるの能力をも有せり。「我が神の城邑に、其聖山に讚揚せらる」。爾は何を言ふか。爾は爰に此城邑及び此山に大にして讚揚せらるゝ彼の光榮を込むるか。預言者答へらく、否、我が言ふ所は其事ならず、乃ち吾人は他の者よりも先づ彼を識らんとなりと。或は彼は之を「我が神の城邑に」と言を以て言ひ表し、或は敵國に虜にせられ、散らされ、輕蔑せられ、抑留せられし者等をして、突然其己を宥逐する者に打勝たしめて以前の狀態に復し、往昔の狀態に生國を相續きたるが如くに讚美したるは、爰に在りし奇蹟を以て神の光榮と偉嚴との山に顯されしが如く、城邑に顯されしとを示さんと欲す



るなり。言ふ意は、縦ひ見ゆる造物も亦神の威嚴を報すれども古來多くの人は無智なるが故に神は數々奇異なる戦利品を擧げ事情を變じて善となし、凡ての期待希望の外に斯る奇蹟を行ひつゝ、敵を以て勝利を以て自己神の事を知らしむとなり。而して預言者が此城邑を神の城邑と名づけたるは、他の城邑が照管者を奉はれたるが如き意味にて云ふにあらず、乃ちイウデヤ人が神を知るに於て、他の人民に卓越せる所有りしを言ひ表すなり。故に他の城邑は唯神に造られたる關係に於てのみ神の城邑と名づけらるゝも、此は格段に神に近きにより、又諸奇蹟の爰に行はれたるによりても神の城邑と名づけられたるなり。然れば當時此城邑は神の城邑と名づけられ、而して今吾々衆人は神の者と名づけらる。使徒曰へり「凡そハリストスに屬する者は肉體を其情及び慾と共に十字架に釘せり」(五の廿四)と。爾は善行の力を見るか。山を神のものとなづけけたるは、山上に於て奉神事を行はれたるに由る。「全地を喜悅もて善く植ゑ付けつゝ」此等の言は甚だ不明瞭なれば注意せんとを要す。輕忽に此等の言を讀む者は大なる疑惑を生ずるも、注意して吟味する者は、確かに其順序と意義との關連するを見ん。「主は大にして善く植ゑ付けつゝ、我が神の城邑に、其聖山に讚揚せらる」

とは善く根付け、善く堅め、善く城邑及び全世界の喜の爲に固むるの意なり。他の譯者も「全地の預定されたる光照」と言ひて同じく表言せり、即ち城邑の教化及び全世界の安慰となせりとなり。敬虔の泉信仰の根と始原とは之より生ず。斯く主は此城邑を植ゑ付け、又全世界の裝飾と全地の喜と樂とに固めたり。イエルサリムは當時地の學校にして喜を受け、飾らんと欲し、照らされんと欲したる者は、此處に於て必要なことを學べり。視よ何によりて預言者は之を表言しつゝ、單に植ゑ付けつゝとは云はずして「善く植ゑ付けつゝ」と云へるを。然れど爾若し此等の言を寓意的の意味に受けんと欲せば、實際に此等の眞理を見ん。全世界の安慰は實にイエルサリムより生じ、喜と樂とは此處より生じ、智慧を愛するの泉は此處より生じ、ハリストスは此處に於て十字架に釘せられ、使徒等は此處より出でたり、然れば預言者は「律法はシオンより出で、主の言はイエルサリムより出づべければなり」(ミヘイ書)と云へり。此喜は亦不死の根原なり。「其北方に大王の城邑あり」。我に告げよ、何によりて預言者は今北方のことを述べて吾人に位置を示すかを。是れ野蠻人は北方より侵襲して數々イウデヤに戦争の起りたればなり、然れば諸預言者は數々戦争を北方の戦と名づけ、又其處よりして「沸騰た



る鏡(イェレミヤ)の來ることを叙べつゝ此事に就きて言へり。パルシヤ國はパレス  
 ナに對して北方に在りき。預言者が在りし所のことに驚きつゝ之を附加へた  
 るは爾はパレスナを其常に侵襲されし國より征服されぬものとなせりと云ひ  
 表さんと欲してなり。何人か身體に就きて爾は其薄弱なる部分を最も強壯なる  
 ものとなせりと云ふが如く預言者も亦之と同一の意味を表せり即ち號泣ぶこと  
 と涕淚のある所艱難の原因のある所其等の一部分は快樂と幸福とを滿せり威  
 嚇恐怖危険のある所喜と樂とは其處より生じ而して何人も既に世界の北國を  
 危懼せず疑惑せずして悦び樂まん何となれば爾神はパレスナを喜に植る付  
 けたればなりと。大王の城邑あり。神は其住所に於て防ぎ護る者  
 として知らる(四)。

二。預言者は「大王の城邑あり」てふ言をもて此城邑の價値と光榮と榮冠と  
 を報す。次に何故にイエルサリムが「大王の城邑」なるかを示しつゝ、イエルサ  
 リムの爲に大なる照管を顯し、イエルサリム全體を諸方より救ひ管に此城邑を結  
 合することを慮るのみならず、其各自の家をも照管する所の神は「其住所に於  
 て防ぎ護る者として知らる」と附加ふ。神は斯ることなきも吾人に著し

けれども斯くして諸敵に己の能力を示し給へり。然れば敵の群衆エゼキヤを攻  
 撃して恰も網の如く全市を包圍せし時彼等は却て多くの死者を遺棄して退却せ  
 り(第四十九章)。多くの者と他の敵とは之に近づきて不名譽を取りて退却せり。預言  
 者謂らく此等のとは神の照管によりて行はれたるものにして、此城邑が光榮なる  
 者となり且つ大なる者となれるは、其高名なるに由るにあらず、乃ち斯くして頌揚  
 せらるゝに由る。蓋視よ、諸王集りて借に過ぎ去れり(五)「彼等は見  
 て驚き、心擾れて遁れたり、彼處には恐懼と産婦の如き苦と彼等  
 を圍めり」(六節)。「爾東風を以てフルシスの舟を壞れり」。或譯者は  
 東風を「暴風の氣」となし、或譯者は「強き風」(シム)となし、或譯者は「燃ゆる風」  
 (アキ)となす。預言者は爰に諸方より起りし困難なる戦を畫き、又之によりて最も  
 名譽ある勝利を畫けるなり。預言者は主が此城邑を防ぎ護り、又此城邑に就きて  
 大なる照管を顯すと曰ひて、今や其如何に之を護り防ぐかを説明す。彼謂らく、無  
 数の人民預言者は彼等を多くの「王」と理解すが、此城邑を攻撃し、又單に攻撃せし  
 みならず、彼等が「集りて過ぎ去りし」時、彼等自ら奇蹟に驚きて退却せしが如  
 き事は生じたり。戦争は彼等自ら驚怖して散亂し、大敵者は小敵者を恐れ、集合者



は集合せざりし者を怖れ、大混雑を極めて後方に逃走したるが如き逆轉を受けて、  
 毫も産婦に劣らざる状態にありき。戦争は人爲によらず、乃ち戦争の管理者は神  
 にして、常に敵の思念を擾すのみならず、彼等の心を震動し、彼等を出産の苦に服し、  
 彼等に言ひ顯すべからざる恐懼を起さしめたるによりて見ゆるなり。又もし如  
 何に大艦隊を集むとも、而も暴風起りて全艦を破壊し、船舶を沈め俄かに大混雑を  
 來すが如きも亦同様なり。思ふに、預言者は此等の例を以て勝利の容易なる混  
 亂の非常なると言ひ表すなり。又艦隊を率ゐし者が、而も遠き外國より來りて、  
 恰も暴風の爲に亡びたるが如く、悉く神の怒によりて亡びたり。是故に預言者は  
 彼等が來りし所の場所をも示して「フルシス」と附加へぬ。之を或は斯くの如  
 く理會すべく、或は我が前に述べたること、即ち恰も暴風起りて數々フルシスの船  
 艦を破壊せしが如く、神は此等の群衆を散らしたるを理會すべし。「我等曾て  
 聞きし如く、今萬軍の主の城邑、我が神の城邑に見るを得たり」(九)  
 爾は彼が如何に前に述べたる「善く植ゑ付けつゝ」と云はすして「善く植ゑ付けつゝ」と云へり、即ち  
 常には照管し、常に慮り、常に護りつゝの意なり。預言者は當時にありしことを述べて、

古代の事件に向ひ、當時にありしことの古代にありしこと一致することを願す。彼  
 謂らく、吾人は言に於て聞ける所のことをば實行に於て見たり、即ち勝利戦利品神  
 の照管不可思議なる奇蹟を見たり。主は何時も言を實行することを止めざりき。  
 危険より救ひ、信仰に導くことも亦神に適當なり。預言者が久しき以前に在りし  
 ことに就きて述べたるも亦徒然ならず。最も愚なる聴衆は、現在より久しき以前  
 に在りしことをも信じて、二倍の利益を受けたり、斯くして彼等の耳の目に交換さ  
 れん様古き事件と新しき事實とを共に教ふることは必要なりき。「神は之を固  
 めて永遠に迄らん。神よ、我等爾の仁慈を爾の堂の中に念へり」  
 (十節十)。或譯者は「爾の堂の中に念へり」を「爾を民の間に認めたり」  
 (マフ)となす。「神よ、爾の名の如く、爾の讚美も地の極に至る」(十二)。  
 三。預言者は「聞きし如く見るを得たり」と言ひて次に彼は聞きしことと  
 見たることとを述ぶ。彼は何を聞き、又何を見たるか。神の恩寵が城邑を堅固に  
 して動かざるものとなせしを見たり、神の恩寵は此城邑の基礎なり、勢力なり、神の  
 恩寵が城邑を近づぐべからざるものとなすは、人の補助協力にあらず、武器の勢力  
 にあらず、高塔又は城壁にもあらず、然らばかくなし、は何なるか。神之を守護し



給ふなり。

四〇六

イウデヤ人には特に此ことを教ふるを要す故に預言者は屢々之をイウデヤ人に説き示し、なり。『神よ我等爾の仁慈を爾の民の間に念へり』。『念へり』とは何の意なるか。爾の仁慈を望み、之を認めたることなり。主は城邑を植て、之が基を置き、之を保護せりと云ひて、此配慮が之を受くる者の功徳に由るにあらず、興ふる者の恩寵に由ることを示さんと欲し、又偕に彼等の傲慢を謙遜ならしめんと欲しつゝ、彼は恰も左の如く云ふが如し、曰く是れ皆爾の仁慈爾の光榮爾の恩寵の作爲なりと。是故に彼は『神よ、爾の名の如く、爾の讚美も地の極に至る』と附加ふ。彼謂らく『爾の讚美は斯く大にして不可思議、斯く高尚にして光榮なる行爲を行ふと。爾が配慮を示すは仁慈を受くる者の力と功徳とに由るにあらず、乃ち爾の威嚴に由りてなり。』『讚美』即ち行爲に就きての善き報知は彼等を著しき者となせり。縦ひ此等のことはパレスチナに於て行はれしも、其威嚴と重大なるとに由りて世界の極に達し、遠方に住居せし者も悉く之を認めたり。然ればイエリホンの淫婦はエギベトにありし事に就きて、當時エギベトに在りし者よりも正確に之を知れり(イイヌス、ナ)。パルシヤ國に住居せし者はパレスチナにありしことを談話せり、地の極に住居せし者はパルシヤに起りしこ

とを知れり。之が爲に王はソウロンの洞に於てありしことを報する所の書を全世界に發したり(ダニイル書、三の九十八)。故に預言者は『爾の讚美も地の極に至る』と云ひて、爾の右の手は義を満てたり』と附加へたり。彼は通例人々に在る所のことを神の本性に適當なることに昇すが如く、此にも亦斯く爲せり、即ち神に於て何事か増減するを理會すべかりしことにあらず、斯く在らざるべし、乃ち言語及び人の舌は弱きが故に、言語と偕に適當なる意義を合せんことを要す。然れば預言者は爰に神の性に屬するに就きて言ひつゝ、實に神に適當なることを言ひ顯すなり。何をか神に適當なることと云ふ。曰く『爾の右の手は義を満てたり』と、是れ遭遇せんことは仁慈を受けし者の功徳に依るにあらず、神の本性の結果たりしことを顯すなり、何となれば神の本性は義を樂み、仁慈をもて慰となせばなり。是れ神の行爲なり、その慣習なり、故に彼等は斯る仁慈を受けたり。火は暖め、太陽は照らすべきものなるが如く、善を爲すことの神に自然なるは、到底火や太陽の比較すべくもあらず。故に預言者は神の本性に固有なる仁慈を言ひ顯しつゝ、『爾の右の手は義を満てたり』と云ふ。『主よ、爾の判に因りてシオン山は樂むべし、イウデヤの女は歡ぶべし』(十二)。『爾等シオ



の周圍を行きて之を環り其成樓を數へよ(節十三)。「其城垣に心を留め其宮室を觀よ之を後世に述べん爲なり(節十四)。「蓋此の神は我等の神にして世々に至り彼は我等を導きて死の時に至らん(節十五)」。吾人は預言者が何の爲に此等のこと——城邑の周圍を廻り成樓を數へ建築物に注意を向け其美麗を觀其牆壁を見定め家と宮殿とを測ることを命ずるかを説明するの要なしその言は自ら明瞭なればなり。預言者は斯く言ひて後直に其命じたる理由をも附加へたり。彼は如何なる理由を附加へたるか。「之を後世に述べん爲なり」。この言の意味は左の如し快樂に充ち喜び樂むべし乃ち單純ならず偶然ならず注意して城邑の堅固なるを研究すべしとなり。城邑は根底迄も破壊されて廢墟となり其位置さへ知れざる程に絶滅したるが故に吾人の祖先は既に其修繕の甲斐なきに失望して「我等の骨は枯れ我等の望は竭く我等絶え果つるなり(三十七の十一)」と言ひて之が快復を望まざるに際して彼等は復び之を受けたり而も遺棄せしが如きものならず乃ち建築によりても貿易によりても勢力によりても富の豊なるによりても遙に勝り最も美麗なる最も繁華なる最も大なる最も富める最も堅固なる最も廣き城邑を受けたり。預言者の「この殿の

後の榮光は從前の榮光より大ならん(二の九)といへるが如し。然れば預言者は人民を訓戒して左の如く云ふが如し曰く視よ希望なくして失望の状態にありし所の此城邑は廢墟となりしも如何に復び最も燦然たる状態に復したるか。爾等此等のこと即ち此城邑の建築其美麗にして燦然たるを見是に由りて神の權能即ち神が如何に此城邑を失望の状態より引き起せしかを認めて神の能力神の斷えざる照管彼が常に吾人の爲に慮り吾人を護り吾人を救ふことを爾等の子孫に告げ知らすべし。斯る傳説は子孫の爲にも大に智慧を啓發するの材料となり最も熱切なる信仰の日課となり善行の奨励ともなるなり。預言者が城邑の周圍を環ることを命じたるも彼等をして己が子孫の實驗ある教師たらしめん爲なり。

四。然れば吾人も亦常に此城邑を觀察して吾人のイエルサラム城を心の中に有し永遠の王の都たる此城邑即ち義人の靈列祖使徒及び諸聖人の住居する此城邑の美麗を斷えず想像せん爰に凡てのものは恒常不變なり爰に肉體的及び暫時的世計即ち貨財奢侈及び惡魔の亡滅的快樂を全く忘れし者のみ相續する所の朽ちざる無形の美麗あり。吾人は艱難を受くる者に對しては毎日兄弟の愛と友情及び隣に對する愛を顯し又吾人を辱しむる者に對しては力めて衷情より之を恕さ



ん是れ吾人は斯くして神に喜ばる、善き生活をなして、光榮權能の今も何時も世々に父と聖神と偕に歸する所の吾人の主ハリストスに於て天國の相續者となることを得ん爲なり。アミン。

### 第四十八 聖詠講話。

「コレイの諸子の詠。」

「萬民之を聽け。全地に居る者、貴賤貧富を論ぜず、皆之に耳を傾けよ」(三節至)。或譯者は「全地に居る者」を「人及び人の子」となせり。

一。今預言者は吾人に或大なることと奥密なることとを告げんと欲す。彼若し吾人に何事か大なる榮光ある及び大なる集會に適當なることを告ぐるを企てざりしならば、全地の住民を聽聞に招かざりしならん、世界の觀物を組織らざりしならん。彼既に預言を告ぐるは、管にパレスチナに居住するイウヂヤ人のみならず、使徒福音者の如き全人類に告ぐるなり。律法は世界の隅にありし人民を教へたるも(福音の傳道の言は全地に報告せられ、而して苟も太陽の照らす所の萬國に

延蔓せり。律法は或指導となり、準備となり、又審定と死とに勤めたるも、福音の言は恩寵なり、平安なり。然れば預言者若し全人類を聽聞に招く時は、吾人も亦近づきて人類一般の教訓者たる聖詠者が吾人に告げんと欲する所を聞かん。爾は野蠻人と智者とに論なく、又凡俗を問はず、如何にして何人にも聽聞に近づくことを命ずるか。彼曰く然りと。是に由りて彼は「萬民」てふ言を以て始め、尙全地に居る者」と附加へて全人類を理會せしむ。嗚呼是れ如何なる教なるか。此教は人々の爲に如何に有益にして且つ衆人に關はるか。是に由りて彼は單に聴くが爲に衆人を招ぐのみならず、報げられたるに大なる熱心を以て注意すべきを命ず。彼は唯「萬民之を聽け」と云はずして「耳を傾けよ」とも云へり。「耳を傾けよ」とは熱心を以て緊張めたる注意を以て聴けよとの意に外ならざるなり。せしめつゝ、何人か其耳に對して言ふ時に用ひらるゝなり。「全地に居る者は皆之に耳を傾けよ」。言ふ意は、若し未だ國民を成さずして離散遊牧する所の種族あらば、我は彼等をも招ぎて聽聞せしめんとす。然れば視よ、説教者の睿智なるを。彼は先づ第一に凡ての聽衆を偕に集めて、之に注意を喚起さしめ、其心



を高めたり、而して次に呼招ぎし時は彼等の傲慢を謙遜にせり、是れ彼等をして其多勢を待みて慢心を起さしめん爲なり。實に愛智の問題に就きて言はんと企つる者には痛悔して謙遜なる聴衆、傲慢と自負とを遠ざかれる聴衆を特に必要なりとす。預言者は如何にして彼等の靈を謙遜にしたるか。彼等にその天性を記憶せしめて之を謙遜にしたり。彼は「萬民」と言ひて「人地に屬する者の意」及び「人の子」と附加へたり、彼は吾人の存在の始原たる萬有を示し、吾々衆人の一般なる母に就きて記憶せり。彼は何の爲に「人の子」と附加へたるか。彼が「人地に屬する者」及び「人の子」と附加へたるは、異邦の小説家が人々を誇かれたる者の如く想像して小説を作りしが如く、人々をして人間は最初に地より生じたりと想はざらしめん爲なり。吾人の列祖は人々なり、然れど吾人及び彼等の存在の始原は地なり。「地と塵や何を誇る」(シラフ書)。己の母を想像して傲慢を鎮めて謙遜なれ「爾は地なり、又地に飯るべき」(創世記三)ことを記憶して凡ての高慢を棄てよ。我は斯る聴衆を要じ、我は我が報げし所を受くるに堪ふる者と爲さん爲に爾を謙遜にす。「貴賤貧富を論ぜず」。爾は教會の高徳を見るか。實際教會が聴衆の分限を擇ばず、悉く同一の教を授け、富める者にも貧しき者にも公なる

食卓を授くるは、是れ高德にあらずや。預言者は衆人を合一にすること、即ち凡ての人々に一般の天性を示して、凡ての人々は地に屬する者なり、凡ての人々は人の子たることを述べて、次に生活の關係に於て現出する所の差別不平等に向ひて一般に凡ての人々を招ぎつゝ、此差別を排斥す、何となれば吾人の天性は同一なればなり。彼謂らく、我は悉くの衆人を招ぐ、何となれば吾人共同の住所は世界なればなり。爾等は貧富により差別をなして不平等を引入れたり、然れども我は復び之を排斥す、即ち富者を尊ばじ、貧者を輕蔑せず、さりとして獨り貧者をも招かじ、富者をも逐はず、乃ち貧富の兩者を招ぐ、又單に此兩者を招ぐのみならず、其等を前にして此等を後にし、或は此等を前にして其等を後にせず、乃ち「皆」之を招ぐなり。一般の集會一般の説教、一般の聴聞あるべし。假令へ爾は富めるも同一の塵より出でし者なり、貧者も爾と同様なる天性を以て世に現れたり、蓋爾も人の子、彼も人の子なればなり。

二。若し爾等衆人に最も重要なことの同じくして等しからんには、何の爲に爾等は虚無なることの爲に其共同を破りつゝ、影又は幻象を以て誇るや。吾人には同一の天性同一の出生共同の所有物あり、何の爲に爾等は外部の附屬物を以て區別の



原由となすか。我は之に堪へざるが故に、爾を貧者と偕に「貴賤貧富を論ぜず」して招ぐなり。爾は他の個所、即ち裁判所に於ても、王宮に於ても、市場に於ても、宴會に於ても富める者と貧しき者との偕にせざるを見ん、彼處に於ては一は尊ばれ、他は輕蔑せらる、甲は勇み、乙は耻を懐く、「貧しき人の智慧は藐視せられ、其の言詞は聽かれざりき」(傳道書九の十六)、「富める者言へば、衆人は黙して雲に迄も其言を擧げ、貧しき者智言を言ふとも、彼等は之を聽かず」(シラフ十三の廿七、廿八)。然れど爰には然らず。我は教會に斯る特權と斯る無智の行なはるゝに堪へずして、衆人に一般の教を勸む。教師の睿智を視よ、即ち彼は未だ説教を始めざる前に、唯聽衆を招げるのみにて如何に至大なる日課を授くるかを。彼は衆人を偕に招ぎて、富者にも誇ることを許さじ、貧者にも輕蔑の中に遺さるゝことを許さず、富は善にあらざるが如く、貧も亦惡にあらす、乃ち其と此とは余分なるものにして、外物に關はることを示せり。彼謂らく、爾の富者たると貧者たるとは我が爲に些の區別なし、我は爾の富に於ても卓越を見ず、貧に於ても不足を見ざるなり。然れども恐らく何人か彼に云はん、爾若し斯る天性を有する所の人なる時は、爾は如何にして己を世界の教師たるに當る者及び堪ふる者となして地の極より衆人を招ぐか。爾は斯る集會に告ぐべき適

當なる事を有するが。彼曰く、然りと。彼は世界を招ぎ之をして己の言を信すべき者となして、「我が口は睿智を出し、我が心の思は智識を出さん」(節四)と言ふを聞け、或譯者は「思」を「教」となし、「智識」を出さん」を「囁く」となす。爾は彼が如何に速かに己の言を説明したるを見るか。彼謂らく、我が説話せんとするは、富のことにあらず、高位のことにあらず、體の勢力其他朽ち果つべき何物に就きてにもあらず、虚しからず、又偶然ならずして、我が得し所の睿智に就きて詳細に言はんと思ふなり。「我耳を傾けて比喩を聽き、琴を以て我が隠語を解かん」(節五)。此等の言は前に述べられたる言と如何なる接續あるか。我は今教師の代りに聽衆を見る。彼は或有益なることを聽かしむるに衆人を招げり、而して衆人の集りし時或智なることを話さんと約束しながら、尙ほ何事をも話さずして、教師の場所を遺て、聽衆の場所に移れり、曰く「我耳を傾けて比喩を聽く」と。何に由りて彼は斯く爲すか。これ甚だ智なることにして、前に述べたる言と一致す。彼が「睿智を出さん」と言ひしは、是れ或人々をして、彼は人事的に述ぶるなりと思はしめざるが爲、又「我が心の思」てふ言に於ては、彼自身の發明なるを疑はしめざるが爲なり、彼は爰に述べしことの神聖にして、毫も自己の



ことを傳ふるにあらず、乃ち開ける所のことなるを證明す。彼曰らく、我は我が耳を神に傾け、彼より聽きて上より我が靈に降りし所のことを告ぐと。イサイヤも亦同様に言へり、曰く「主は教を受けし者の舌を我に與へ言をもて疲れたる者を扶け支ふることを知り得しめ、我が耳を醒して聞くことを得しめ給ふ」(イサイヤ書五十四の四)と。パウロも亦「信は聞くに由り、聞く所は神の言に由る」(ローマ書十の十七)と言へり。爾は彼が前に聽衆たりしも、後には教師たりしを見るか。然れば他の譯者も「我が心は嘯く」と言へり。「嘯く」とは何の意なるか。或靈的歌を歌ひ献ぐることなり。彼若し此歌を「我が心の教」と名づくるとも驚く勿れ、彼は神より受けたることを常に教へたり、其教に就きては屢々自己の中に思考し、既に思考して後始めて他人に告げたるなり。「比喻」とは何の意なるか。此言は多くの意義を有す。此言は世評をも、先例をも、批難をも示すなり、例令は「爾我等を諸民の慈となし、異邦民は我等を見て首を搖かす」(聖詠四十三の十五)と云はるゝ時の如き是なり。比喻とは又隠語を云ふ多くの人々は此隠語が或ことを言ひ顯すも、その中には隠れたる意味を含みて、其言語の意味不明瞭なる時に、之が解決を要求する所の疑問と名づく、例之は「食ふ者より食物出で強き者より甘き者出でたり」(七師記十の十四)てふサムブソンの言の如き、又

「譬喩と隠語とを悟らん」(詩百二)てふソロモンの言の如き是なり。「譬」を設けて彼等に謂へり、天國は人の其田に美種を播きたるが如し(マタイの廿四)と言へるが如きも亦比喻と名づけらる。イエゼキイリが「人の子よ、爾に譬喩を語りて言ふべし、大なる翼ある大鷲あり云々」(イエゼキイリ書一七の一至三)てふ寓意的表言も亦比喻にして、大鷲とは王を言へるなり。パウロが「信に由りて、アウラムは試みられて、イサクを献げたり、許約を受けし者にして、其獨生子を献げたり、故に之を預象として受けたり」(エペソ書一)と言ひて示すが如く、預象および預め畫くことも亦比喻と名づけらるゝなり。

三。然れば彼何事を比喻と名づくるか。思ふに、彼は説話を斯く名づくるなり。彼が甚だ理會し難き隠語を用ふることを驚く勿れ、彼の之を爲すは、聽衆を奮起せしめん爲なり、理解し易き説話は多くの人を不注意に陥らしむるにより、預言者は比喻を以て述ぶるなり。然ればハリストスも亦多くのことを宣ぶるに、比喻を以てし、而して之を門徒等に説明せり。比喻は才能ある聽衆と才能なき聽衆とを區別す、才能ある聽衆は述べられたることの意味を知らんことを力め、而して才能なき聽衆は之を等閑にす。當時も亦斯くの如くありき。イツヂヤ人は理解し難き



説話を以ても興奮せられず、また疑問を發することを欲せざりき。即ち彼等は宜べられたることに注意するや斯くの如く淺かりき。總じて隠語は研究することに強く人を奮勵するものなり。然ればハリストスも斯く行ひ、譬喩にて語りしは、不注意にして假睡せるが如きイウデヤ人を興奮せしめ、能く注意して聴聞せしめん爲なり。然れども彼等は之にも拘らず注意せざりしも門徒等は努めて聴聞し、而して若し理解せざることをあれば之がために特に注意せり。ゆゑに主は彼等に對して比喩を解明せり。然れば預言者も「我耳を傾けて比喩を聽き、琴を以て我が隠語を解かん」と言ふ。「隠語」とは彼が他の個所に於ても「古よりの隠語を述べん」(聖詠七十)と言へる如く、隠れたる語なり、不分明の語なり。預言者は神聖なる啓示にて感動せられたるによりて、隠語を取て睿智とは名づけたり。「琴を以て」と言へるは、教の靈的意義及び彼に對して上よりありし所の感應を示さん爲なり、謳歌の状態に於て、教誨を述べたるは、己の説話を快きものとなさん爲なり。爾は彼が如何なる序言を組織したるを見るか。彼は世界を招集し、現生の不平等を排斥し、天性のことに就きて述べ、傲慢を謙遜にし、或は大にして且つ高尚なることを告ぐるを約し、毫も己の思想を言はずして、唯神より聞ける所のことを言

はんと言ひ、吾人を最も注意なる者となさん爲に、彼の語の甚だ不明瞭なることを認め、彼が常に思想せし所の靈的智慧に吾人を教ふるを約したり。吾人は注意深き者となりて、何事をも逸せざらん。彼の言若し睿智たり、比喩及び隠語ならば、撻まざるの注意を要す。此は如何なる「教」、如何なる「隠語」、如何なる「比喩」、彼が上より聞きし所の如何なる「睿智」なるか。曰く「我が艱難の日、我を迫害する者の悪我を環る時、我何ぞ懼れん」(六)。或譯者は「我を迫害する者の悪」を「我が踵の不法」となす。爾は彼の言の如何に隠語の如く比喩の如く隠れて甚だ不明瞭なるを見るか。然れども吾人若し欲せば、前以て彼が如何なる「艱難の日」に就きて言ふかを認めん。聖書は通例如何なる日を艱難の日と名づくるか。災害、懲罰、悲哀の日なり。然れば彼は他の個所に於て「貧しき者乏しき者を顧みる人は福なり、患難の日に主は彼を救はん」(聖詠四)と言ふ。未來の審判の日は罪人の爲に斯くの如く驚くべく畏るべし。爾は畏るべきこと、輕蔑すべきこと、を爾に教ふる所の最も高尚なる愛智の第一課程を見るか。此卓越れたる差別を爲さざる者は、恰も深き暗黒の中にあるが如く、混亂の中にあるが如く、且つ爲すべきことを知らざるなり。



吾人若し畏るべきとと輕蔑すべきとを區別せざれば吾人の生活は多くの迷誤と多くの危険とをもつて充たされん。實際に畏るべからざるを懼れ、畏るべきを嘲笑するは極めて無智なり。成人と小兒との異なるは、後者は其智慧成熟せずして、假面及び毛皮を被れる人々を畏れ、父母を辱むることを何とも思はず、火に入り燭火に投じて、而して毫も畏るべからざる或騷擾を畏るゝも、成人は毫も斯ることを畏れざるなり。然れども多くの成人は小兒よりも無智なるが故に、預言者は畏るべきことを述べたり、即ち多くの人々の爲に畏るべしと思はるゝ所のもの、雷に畏るべきのみならず、剩へ驚くべきもの、堪ふべからざるものと思はるゝ所の、難難貧賤疾病にあらず、彼は毫も斯くの如きものを述べず、乃ち只罪のみ畏るべきものなることを言ひて、斯る差別をなせり。「我を迫害する者の惡我を環る時、我何ぞ懼れん」と云は之を示し、なり。然れば視よ、新しき非常の數なる比喩の言を。實に世の如何なる難難も畏るゝに足らずと言ふは、多くの人々の爲に新しく且つ非常のこと、思はるゝなり。「患難の日、我何ぞ懼れん」。彼謂らく、我が畏るゝは只一つ、即ち我が途に於て及び我が生活に於て不法の我を圍まんことなり。聖書は奸計を「睡」と名づく。預言者曰らく「我が餅を食ひし者も亦

我に向ひて其踵を擧げたり」(四)と。イサウもイアコフに就きて「彼が我を排除くる事此にて二次なり」(創世記廿七)と言へり。罪は左の如きものなり、即ち罪は奸智ある者なり、盛感す能ある者なり。預言者曰らく、我は我を盛感し、我を環る所の罪を之れ畏ると。

四。然ればパウロも罪を以て「我等を阻むもの」(エペソ一)と名づけて、其數々容易に且つ能く吾人を横領することを表せり。人々は此世の裁判所に於て富權柄、謙言、欺騙等多くのことを畏るゝも、彼處には毫も斯くの如きものなし、唯畏るべきは、罪の中に溺るゝ者を諸方より環り、敵の軍隊よりも猛烈に攻撃する所の罪のみ。是に由りて罪より圍まれざる様種々に力むべし、而して罪若し吾人を攻撃せんとするを見れば、機敏なる軍士が戦に於て爲すが如く、罪の網より避くべく、若し亦罪に捕はるゝ時は、猶豫せずして、ダウドのなし、が如く、痛悔を以て罪の勢力を破りて、其挫措を毀たざるべからず。ダウドは罪の虜となりしも、速かに之より救はれたり。罪を畏るゝ者は何時も他物を畏れずして、現生の幸福を嘲笑し、難難を蔑視せん、何となれば、唯獨り罪の畏は彼の靈を震撼かせばなり。此畏を懐く者の爲には、眞に何物も畏ろしからず、何ごとよりも畏るべき死をも畏れずして、彼は只罪を畏るゝ



のみ。何故に然るか。罪は人を、ゲエンナに渡して永遠の苦痛に服せしむればなり。一方より言へば、斯る畏は人を凡ての善行に導くなり。想起せ、世の幸福をもて誇らし、艱難に於て小膽ならじ、現世の事物に執着せず、未來のことを慮り、此畏を以て生活しつゝ、最後の日を待つは如何に重大なるかを。斯くの如き人は只一の罪をのみ畏れて天使となり、他の何ものをも畏れざるなり、彼若し此一つを畏るべきが如く畏れれば、他の何物をも畏れざらん、之に反して之を畏れざる者は、多くの畏るべきことに遭はん。『己の力を恃み、其財の多きに誇る者よ』(七節)。

『人敢て其兄弟を贖ふ能はず、彼の爲に神に償をなす能はず。其靈を贖ふ價は貴し』(八節)。

人或は問ふ者あらん、爰に如何なる語の接續あるかを。大なる接續極めて近き接續あり。彼は審判と未來の畏るべき答と、收賄なき判決に就きて言ひ、而して此世の裁判所に於ては、多くの人は正義を轉倒し、裁判官を買収して罰を免るゝが故に、預言者は其審判の賄賂なきことを告げ、又前に述べし所の畏を強め、彼の言ひしが如く、只一の罪をのみ畏れて、他の何ものをも畏れざることの眞に善きことなるを解明しつゝ、之をも附加へしなり。彼處に於ては、金錢を以て正義を變じ、或は贈物を以て、ゲエンナより己を救ひ、他人の辯護、勇辯等を以て罪人を救ふこと能はざるなり。爾は如何に富み、如何なる權柄を有し、何人と知己たりとも、此等のことは空しくして且つ益なし、彼處に於ては各人は己の如何によりて罰せられ、又榮冠を蒙らせらるゝなり。然ればラザリと同時代の一人は甚だ富める者なりしが、富は之に何等の益をも與へざりき(ルカ福音書十六章)又或童女等は他の童女と知己たりしも、此親は毫も彼等に助けざりき(マタイ福音書廿五章)何となれば、彼處にありて要求するものは只一なればなり。預言者曰らく、是故に爾等富を希望し、權柄を着たる者よ、空しく且つ徒に高慢せよ、豊なる富も、權勢も、友誼、親屬、其他何ものも爾等と偕に審判に行かず、爾等を救はざらん。彼處に於ては救はるゝが爲に金錢即ち贖罪金若くは己が靈の價を與ふる能はずと、聖書は如何にして「不義の財を以て己の爲に友を求めよ、彼等が爾等を永遠の宅に接けん爲なり」(ルカ福音書九章)と言ふか。此等の言は何を意味するか。此等の言は前に述べたる言と何等の反對何等の不同意をも其中に含まずして、能く此等の言と一致す。爰には現世に於ては富を用ひ、及び需むる者の爲に財産を消費しつゝ、友を得るの必要なるを云ひ、且つ仁心より出でざる施濟を誡む。爾若し毫も斯くの如きことを爲さずして、彼處に辭し去らば、何人も爾の爲に中保せざらん。吾人の爲に中保するは人々の友



誼にあらすして財をもて友を得られしことなり故に主は又「財を以て友を以てふ言  
 を附加ふ是れ爾をして爾の此等の行為即ち慈憐仁愛貧者に對する施濟の爾を守  
 ることを知らしめん爲なり。而して親屬友誼も行なくんば何等の益を來たさ  
 ることに就きては預言者が其處にイオフノエ、ダニールの三人あるも、その子女を  
 救ふことを得ず」(イエレミヤ四の十四、十八)と言へるを聞け。然れども現世の友誼にして毫も  
 保護せざりせば來世の生活に就きて我將た何をか曰はん。然ればサムイルは如  
 何に涕泣慟哭したるも、而もサウルを救はざりき(第一列王紀十、五の三十五)。イエレミヤは如何  
 に禱りしも、而も何事に於てもイウデヤ人を助くることを得ずして、祈禱すること  
 をさへ禁せられたり(イエレミヤ四の七、十一)。然れば聖書に云はるゝが如く、當時モイセイ  
 りしも、不虔に陥りて何の善をも自ら顯さざりし當時のイウデヤ人を救ひ得ざ  
 りしとすれば、イエレミヤが毫も彼等に助けざりしは驚くべきことにあらざるな  
 り(イエレミヤ一、十五)。  
 五。「兄弟よ、我が心に願ふ所と神に禱る所とは其救を得るに在り」(ロマ書一、十)と言ひし  
 所のパウルは、イウデヤ人の爲に如何に憂ひ悲みたるか、然れども其祈禱は彼等に助  
 けしや。毫も助けざりしなり。然れども彼がイウデヤ人の爲にハリストスより

断たるゝことをすら希望したる時は、我將た祈禱に就きて何事をか云はん(ロマ書一、十)。  
 然らば聖人等の祈禱は益なきにあらずや。否、爾若し聖人等と偕に作動かば彼等  
 の祈禱は却て大なる力を有せん。然ればペートルは管に其祈禱によりてのみな  
 らず、乃ちタウチが施濟を行へるによりて之を復活せしめたり(使徒行傳九、の三十六)。又聖人  
 等は祈禱して他の人々にも助けたり。然れども勞働苦行の續く所の現世に於て  
 は尙斯くあらんも、來世に於ては毫も斯くの如きことなし、乃ち救贖は唯行為に關  
 す。故に預言者は富める者と傲慢なる者とを甚く嘲笑せり。彼は富を有する者、  
 或は力を得し者と云はずして「己の力を恃み、其財の多きに誇る者よ」と  
 言ひて、彼等が影を恃み煙をもて誇ることを笑ひ、彼等を譴責せり。又彼が「其靈  
 を贖ふ價は貴し」と云へるや善し何となれば、主が「人若し全世界を獲とも己の  
 靈を損は、い何の益かあらん」(マテウイ福音、十六の二十六)と言へる如く、靈の價値は全世界よりも貴  
 ければなり。而してパウルが爾をして靈の價値の全世界よりも貴きことを納得  
 せしめんが爲に、他の聖人等に就きて、彼等は「綿羊と山羊との皮を衣て窮乏患難辛  
 苦を忍び、世界の置くに堪へざる者……」(エペソイ書六、十)と言ふを聞け。實に世界は靈の  
 爲に存す。父は子の代りに家を取らざるが如く、神も亦靈の代りに世界を取らざ



りしならん、然れど實行と苦行とは靈より要求せらるゝなり。爾は吾人の靈の價値の如何に大なるを知らんと欲するか。神の獨生子は吾人の靈を贖はんと欲して犠牲に献じたるは世界にあらず、人にあらず、地にあらず、海にあらずして己が尊貴き血なり。然ればハヅルも爾等は價を以て買はれたり、人の奴僕と爲る勿れ」(コリント前)と言へり。爾は價の大なることを見るか。故に爾斯る價にて買はれたる己の靈を滅さば如何にして復び之を贖ふを得んや。「ハリストスは死より復活して復死せず」(六の九) 爾は靈の價の如何に大にして其位置の如何に高きを見るか。靈を輕蔑し、又靈を捕虜となす勿れ。「人常に存して墓を見ざるること世々之なからん」(十) 預言者は富める者強き者に就きて述べ、又富と強きことより彼等に何の益なきを示して、今や善を行ひて勞苦患難の中に生活する者に就きて述べ、以て智徳を愛する苦行者を奮勵す。彼續けて曰らく、我に告ぐる勿れ、爰に勞働及び悲痛ありと、唯結果を想像し、人の不死なること、勞苦悲痛の後には終なき永生の續くことを記憶すべし。是故に爰に僅かに勞苦して永遠の安息を受くるは、僅かに娛みて無限に苦むより遙に勝らざるか。次に預言者は彼處に於て靈に報賞及び榮冠あるのみならず、尙報酬の爰に始まることを示さんと欲して「人

墓を見ざるること世々之なからん。人皆見る、智者も死す」(十一)と續けたり。爾は我を唯未來の事を言ふと攻撃する勿れ、否我は爰にも爾に(來世の榮冠の定銀或は之を言換ふれば、彼等の抵當及び報賞其物と與ふるなり。如何に及び如何なる状態を以てするか。來世の希望をもて導かるゝ智者は、死をも死と思はず、己の眼前に横る死者を見て榮冠報賞目未だ見す、耳未だ聞かざる所の「(コリント前) 得も言はれざる幸福來世の生命、天使と偕に喜悅ぶことを想像しつゝ、他の人々の如く悲哀に渡されざるなり。農夫は蒔ける穀粒の腐敗するを見て元氣を遣喪し、又失望せず、否却て此腐敗は永生の始たり、豊作の原因たることを知りて、特更に樂み喜ぶが如く、善行にて飾られたる義人及び日々天國を待望む所の者は己の眼前に死を見つゝ、他の多くの人々の如く憂悶亂心し、又た痛傷せざるなり、彼は正義を以て生活する者の爲に、死は善に遷るとたり、最も幸福なる状態に移ることたり、榮冠を受くるの途たることを知ればなり。爰に預言者は何人を「智者」と名づくるか。眞の智者にあらずして、己を智者なりと思ふ所の者を云へるなり。我は預言者が爰に異邦の智者を嘲笑して彼等を指せるなりと思ふなり、何となれば異邦の智者等は毫も復活のことを思はずして「自ら智者と稱へて愚者と爲る」(ローマ書一)



に由る。  
 義人は此等の智者の死し、涕泣し、涙を注ぎ、慟哭するを見るも、自ら慟も斯くの如きことを感せずして、此等の困苦に超然たりき、何となれば、彼等は幸福なる希望にて、願まされ、又此死は實體の亡滅にあらずして、死すべきものを亡し、腐朽を滅することなるを知りつゝ、斯る困苦の上にて超然たりしなり。此死は體を滅さずして、腐朽を亡し、實體は大なる光榮に於て復活するが爲に永遠に存す、然れど悉くの者然るにあらず、何となれば、縦ひ復活は衆人の爲に一般のものたるも、光榮の復活は唯義しき生活をなす者の爲に行はるればなり。「愚者も無智者も滅びて、其財を他人に遺す、彼等思へらく、其家は永く存し、其住所は世々に存せん、彼等己の名を以て、其地に名づく」(十二)。  
 六。爾は預言者が如何に未來の事情のみならず、富に對する慾情を滅し、現世の幸福に執着する人々を無智者と名づけ、其行爲を以て之を證しつゝ、惡念及び貪慾を避けしめて、善行に導くを見るか。我に告げよ、何人か實に己が勞働の結果を以て他人を娛ましむるが爲に、勞働し、思を焦して財を集むる人より、無智なる者あるかを。勞力を用ひ、疲勞に服したる者は、現世の生活を終り、而して其より受くべき幸

福および快樂を以て他人而も親戚にあらず、知己にあらずして、數々あるが如く、敵及び反對者の前に顯す時は、何ものか此空しき勞働より、惡しきものあらんや。然れば、預言者は其財を他人に見ず、知らずの人を指すに遺すと云へり。「愚者も智者も滅ぶ」とは何の意なるか。即ち前に述べられたる人々の共に亡ぶることなり。思ふに預言者は爰に現世の幸福に執着して、毫も未來のことを思はざる人々を名づけて、無智者と言へるなり。爾若し現世の生活の後に、何ものもあらざるべしと思は、何の爲に四方より無數の財を集め、己を勞苦に服し、其結果を樂ますし、て痛苦不安なるか。「彼等思へらく、其家は永く存す」。預言者は彼等の思考に應じて之を言ふなり。「其住所は世々に存せん、彼等己の名を以て、其地に名づく」。何ものか墳墓を永遠の住所と思ひ、之をもて誇るが如き無智より、惡しきものあらんや。  
 然るに多くの人々は、數々家よりも宏莊に墳墓を建立す。彼等は無益に財産を浪費しつゝ、或は敵の爲に、或は蟲と塵との爲に、勞働掛念するなり。毫も未來のことを望まざる人々の思想の狀態や、斯くの如し。然れども、我は之によりて、他の多くの人々の爲に、哀哭せざるべからず、彼等は未來のことを望みながらも、未來に如何



なる望をも有たずして墓碑を建て、美麗なる記念碑を起し、黄金を地中に藏し、己の財産を他人の爲に費す者に習ひ、而も尙ほ其等の一人々の爲す所に勝らざるなり。現世の後に何ものをも期望まざる者は素より無智なるも、彼等は來世の幸福を期望まざるによりて、兎に角此世の幸福を慮るなり、然れど爾來世の生命、來世の言ふべからざる幸福を知り、福音に言ふが如く「義人等は日の如く輝く」(マタイ福音 十三の四十三)ことを知りながら、尙此世の幸福を慮らば、如何にして救免され、如何にして義とせられんや。爾が爰に塵埃の爲記念碑の爲、反對者の爲、敵の爲に凡てを蕩盡さば、或正義の罰に服せざるか。「己の名を以て其地に名づく」。視よ、無智の他の種類を、即ち彼等は建築物、田地、浴室に己の名を附して、之を己が爲に最大なる安慰となし、眞理の代りに影を追ふことを。爾人よ、若し自己に永遠の記憶を得んと欲せば、建築物に己の名を附せずして、現世に於ても爾の名を保守り、來世に於ても爾に永遠の安息を得しむる所の善行の凱旋碑を建てよ。爾若し己の記念を遺さんと欲して、切に之を願はば、我は疑なく之に至る眞の途を示さん、即ち善行者たるを力むること是なり。何ものも善行の如く人の名を不死ならしめざるなり。致命者等は之を證し、使徒等の遺物は之を證し、善行を行ひて生活せし人々の記憶は之を證

す。城邑を起し、港灣を築き、之に己の名を附したる諸王や幾何ぞ、而も彼等は死後、何の益をも受けずして、遂には忘却せられ、之を語る者なきにあらずや。然るにも斯くの如きものを造らざりしも、善行に一身を委ねたる漁者ペートルは王城を占め、死後尙ほ太陽よりも輝くなり。然るに爾が行ふ所のとは笑ふべく亦耻づべし。此等の記念物は、實に爾を光榮ある者と爲さざるのみならず、爾の口をすらしに對して開きつゝ、笑ふ者と爲さん。爾の貪慾は時の經ると共に忘れらるゝも、此等の建築物は爾の貪慾を證する所の柱及び凱旋碑として到處に峙立す。「惟人は貴きに止るを得ず、彼は亡ぶる獸の如くならん」(十三節)。我は思ふ、爰に預言者は地上の主權を托せられたる智なる人が、空しく勞し、己の救贖に反對なることを行ひ、浮誇を娛み、貪慾に耽り、無益なる事物の爲に配慮しつゝ、無言の動物に迄下りしことを惜めるなり。人の尊貴さは、善行をなし、來世のことを慮り、來世の生命の爲に凡てを爲して現世のことを輕んずるにあり。不言なる動物の生命は現世の存在をもて限らるゝも、吾人の生命は最も善にして且つ終なき他の生命に向けるゝなり。視よ、毫も來世のことを知らざる人々は、不言の動物よりも、惡しきを而して實に彼等のみならず、奸計によりて蛇となり、蠍となり、狼となり、愚



なるによりて牛となり、破廉耻によりて狗となりつゝ、放蕩なる生活を爲す所の者も亦然りとす。

七。我に告げよ、實際墓碑又は記念碑を建つるを以て能事となし、墓碑または記念碑に他人の名の銘刻されしを見て之を羨む人々より無智なる者あり得るか。吾人に關する記念は一の善行の外邸宅も彫像も子女も其他之に類する何ものも存せざるなり。家は建築者の事業像は技術者の事業子女は天然の作爲なり、而して此等のものは毫も爾の光榮に關せず。視よ、預言者は何によりて斯る人を無智者と名づくるを是れ斯る人が自己に無智の軛を置きて、不言の動物にも劣れる者となるに由る。動物は耕作にたりとも有益にして且つ之に堪ふるも、人は無智に陥りたるによりて、動物にも劣れるものとなれり。預言者は前に斯る人々の見解の野鄙にして地に屬し、如何に其卑下しきかを述べ、財貨を集むる彼等の勞働の如何に無益なるかを述べ、又最も強く彼等の過失を言ひ表さんと欲しつゝ、通常預言者等が他の個所に於てもなし、が如く、神の仁慈に就きても述べたり。然ればイサイヤはイウデヤ人を譴責せんと欲しつゝ、先づ神が彼等を責べること述べ「我子を養ひ育てしに、彼等は我にそむけり」(イサイヤ)と言ふ。然れば預言者は爰に

も神が人類に顯されたる仁慈を一言にて言ひ表しつゝ、「人は貴きに止るを得ず」と言ふ。彼は如何なる尊貴に就きて言ふか。彼が聖詠の他の個所に於て言ふ所を開け、曰く「爾彼を天使等より少しく遜らしめ、彼に光榮と尊貴とを冠らせ」と又此尊貴を説明しつゝ、續けて曰く「萬物を其足下に服せしめたり、即、悉の羊牛又野の獸、天の鳥海、魚一切海に遊ぶ者なり」(聖詠八)と。實に見ゆる萬物の上に於ける主權を、人而も未だ何の善をも爲さざりし人に委任するは最大なる尊貴なり。神の未だ人を造らざる時「我等の像と肖とによりて人を造り」と言ひ、次に「肖」と云ふ言を説明せんと欲しつゝ、「之に海の魚と天空の鳥とを治めしめん」(創世記一)と言ふ。此大ならざる者、其大さ三三「ローコチ」(ローコチは尺の名にして我)にして、不言の動物と比較するも、其体力の甚だ小なる者を、神は之に最大なる尊貴の徴表となる所の智なる靈を賦與して、智慧の才能をもて凡ての動物の前に最も秀づる者となせり。人は此才能の助によりて市邑を建設し、海を航し、地を耕し、無數の技術を發明し、猛惡なる動物の主宰者となり、又何事よりも重大にして且つ首要なることは、己が造者たる神を識り、善行に近づき、善きことと善からざることとを認めたり。見ゆる造物の中に、人は獨り神に祈り、獨り啓示を受くるに堪へ、多くの寶を識り、天のことを



學べり、地は彼の爲、天は彼の爲、太陽と星とは彼の爲、月の運行、四季の變換、氣候の多様なるは彼の爲、果實および植物の發生、動物の種類の斯くの如く、多きは彼の爲、晝夜は彼の爲、使徒等及び預言者等の遣されたるは彼の爲、天使等の數々遣されたるは彼の爲なり。然れど多くのことを數ふるは必要ならず、凡てのことを數ふるは能はざることなり。彼の爲に神の獨生子は人となり、十字架に釘うたれ、葬られ、復活の後にありし畏るべき多くの休徵は彼の爲なり、律法は彼の爲、天堂は彼の爲、洪水は彼の爲なり。仁慈と徵罰とをもて矯正を受くることも、亦是れ彼の爲には、尊貴の最大なるものなり。以前に行はれたる無數なる照管の行爲は、悉く彼の爲にして未來の審判も彼の尊貴の爲に行はるゝなり。視よ、聖詠者が他の個所に於て「人は何物たる、爾之を憶ふか」(聖詠八)と言へる如く、イオフは何故に、人は何物たる、爾彼をひきて審判し給ふやと云ふか(イオフ三)。神の獨生子は彼の爲に無數の幸福を携へて再び來るなり、何となれば彼は既に洗禮及び他の機密と機密を識るに導くことゝを以て、或幸福を傳へ、又種々なる奇蹟を地に充して之を吾人に賜ひ、而して他の幸福例へば天國即ち永世を賜ふことを約せり、是れ吾人をして獨生子の相續者となり、彼と偕に王とならしめん爲なり。是に依りてパウロは「若し忍ば、彼と

偕に王たらん」(テモニの十二)と言へり。預言者は此等のことを想像しつゝ、正しく己が尊貴なる族たることよりも、惡癖を尊びて自ら己を動物の情慾に渡したる人々を、不言の動物と比較せるなり。他の預言者等も斯くの如き比較を以て、破廉耻なる聽衆に羞耻を起さしめんと欲して同じく行へり。然れば彼等の中の或者は「彼等は肥たる牡馬の如くに行きめぐり」(イエレミヤ)と言ひ、又他の預言者は「ダウドよりも一層強く表ひ表しつゝ、牛は其主を知り、驢馬は其主の廐を知る」(イサイヤ)と言ひ、ダウドは「彼は亡ぶる獸の如くならん」と言へり、是れ家畜は「その主を知る、然れどイズライリは識らざるに」(イサイヤ)由りて、獸よりも無智なる者となれりとの意なり。

八。他の智者は怠惰不注意及び遊蕩に耽ける人の、蟻にも劣れることを示し、又之に勤勉を學ばしめんとて、蟻の處に遣して曰へり「惰者よ、蟻にゆき、其爲すところを觀て、智慧を得よ、蟻は首領なく、有司なく、君王なけれども、夏のうちに食をそなへ、收穫のときに糧を飲む」(箴言六)と。第二者は曰く「彼の審判者は黃昏の狼の如し」(ソラニ)と。他の預言者は曰へり「汝は曠野にをるアラビヤ人の爲すが如く、路に坐して人をまてり」(イエレミヤ)と。ザハリヤの子は「蚊の類よ、誰か爾等に將來の怒を避くる



とを示したる「音三の七」といひ、イサイヤは「彼等は蚊の卵をかへし、蜘蛛をおる」(イサイヤ九の五)と言ひ、預言者ダウドは他の個所に於て「蚊の毒は其口にあり」(聖詠百三)と言ひ、又「彼等の毒は蛇の毒の如し」(聖詠五十一)と言へり。惡癖は斯くの如き者なり、即ち惡癖は斯く大なる、斯く光榮ある、及び斯く徳にて飾られたる人を無言の動物の低きに迄至らしむ。然れば預言者は此聖詠に於て二種類の惡癖を示し、その他のことは聽衆の想像に任して、以て惡癖に耽る者を叱責す。實に何者か己の身の爲に害を懷き、徒らに世界を周遊し、己のためならず、即ち彼の知らざる他人のため、剩へ數々敵及び嫉惡者の爲に無數の財貨を集むる人より無智ならんや。彼が「其財を他人に遺す」と言へるや宜し。何者か財貨を集むるに際して、勞と罪とを受け、而して之を他人に與へて樂ましむる者より無智ならんや。次に預言者は貪慾と借に虚名を眼前に顯しつゝ、此惡癖をも甚く譴責して「彼等己の名を以て其地に名づく」といへり。何者か又己が紀念及び榮譽を無生物たる木石に托する者より無智ならんや。彼等は蛆蟲の爲に大なる住所を建て、蠶魚又は腐敗の爲に巨大なる牆壁を築がんとて、多くの人々の財産を奪ひ、棲婦を掠め、孤兒を凌ぐ、彼等は之を以て其記念は不死たるべしと思ふも、此等のものは一瞬間たりとも死より體を

預防し得ざるなり。「彼等の道は愚蒙なり」(十四)。「我に告げよ、彼等の道」とは如何なるものなるか。力めて此等のものを穿鑿すること、財貨に對する虚しき勞作、および大なる熱愛、榮譽に對する飽かざる渴望なり。彼謂らく、誘引と蹟とは未來の罰を受くるに先だちて現世に於ても、彼等にあらんと。實に此道は善行に進むが爲に小なる誘惑にあらす、小なる蹟にあらす、小なる障害にあらざるなり。是故に預言者は「彼等の道は愚蒙なり」と言ふ。彼は此道を以て彼等の爲に愚蒙なりと言へるや善し。彼等は自ら己を縛し、自ら己の上に桎梏を置く。然れども其後の人は尙其意を是とす。爰に述べられたることは、最も重き惡にして他の惡の原因なり。斯る罪と不法と無智とを行ふ人々が自ら己を尊敬讚美し、己を以て則るに足る者と名づけ、又己の行爲を嘉する時は、惡癖を行ふ人々に頌揚せらるゝ、惡望は如何に大なる力を受くるかを想像すべし。實際に、彼若し審定せられ、譏られ、叱責せられ、警醒する人々の良心を鞭撻懲罰、嫉惡に服せしめながら、恬として耻づることなく、日々榮えて勢力を得る時は、譴責も、良心の威嚇も、遭遇せることに就きての悲哀も、爲したることに就きての悔改も、痛傷も、愁歎も、涕涙も、亦彼の爲に障害たらざるのみならず、全く其に反對なることあらん、即ち之を行



ふ所の人々が己自らを嘉し己を讚美稱揚し、此事の爲に己を以て他人に勝れりとなし行ひし後にも其爲し、ことを讚美する時は「然れども其後の人は尙其意を是とす」てふ言の之を示すが如く、彼等の悪や其底止する所を知らざるなり。實に斯く放肆なる人々、惡望を行ひし後その犯罪を見て耻づべかりしを、然せずして却て之を喜び、其爲し、ことを娛む程深く罪に陥りし人々あり。罪は人が之を行ふ前にその醜態を隠し、癡醉的の快樂を以てその汚穢を飾るも、罪の行はれたる時肉の快樂の漸次通過し、一時彼より失せたりし判断を罰する良心の威嚇の近づく時は、其凡ての亡滅は顯るゝなり。而して此等の人々は其罪を行ひたる後にも、其集められたる財貨、建造されたる墓碑、落成されたる虚しき建物を見る時は、痛傷愁歎する代りに、罪を行ひし後、惡望を遂げし後にも益々疾病(靈)に耽るなり。彼等にして斯くの如く振舞ふ時は、神は之を處罰するに近づくかん。

九。己が罪の爲に自ら己を審定する者は、パズルの「蓋若し我等己を辨へしならば、審を受けざりしならん」(コリント前書十一の三十一)と言へる如く、自ら預戒して神の審判を己より遠ざけん、之に反して療すべからざる病に苦む者、罪を犯す者、己の罪を悔いざる者は、自ら神の畏るべき罰を牽引けるなり。或は人の所有を奪ひ、或は貧者の爲に用ふ

べかりし所有を空しく墓碑の爲、蛆の爲、蠶魚の爲に浪費して己の所爲を悔いず己の疾病を愈されずば、後に何事の彼等と偕にあるべきかを聞け。何事のあるべきか。然り彼等は神の罰を受けん。然れば預言者は「彼等は羊の如く地獄に閉され、死は彼等を牧せん」(十五)と附加へぬ。彼は爰に羊の名稱を以て、溫柔を言ひ顯すにはあらず、蓋何物か裸なる者および饑餓の爲に疲労せる貧者を見るも冷淡にして腐敗と蛆と蠶魚との爲に住居を飾る所の人々より猛烈なる者あらんや、乃ち彼等の亡滅の容易なると、彼等を威嚇する危険の迅速なると、敵の爲に彼等の捕ひ易きことを言ひ表すなり。實に何ものも悪しき生活をなす人より弱きはなし。此等の人々にも亦同じからん即ち彼等は刺し殺されたる羊の如くに攻撃され速かに亡び、猶豫せずして容易に迅速に地獄に行かん。此は死なり、或は死よりも遙かに悪し、彼等は斯る終焉の後に永遠の死に服せらるればなり、彼等の行く所はアウラムの懐にあらず、又他の所にもあらずして、地獄即ち審定と懲罰及び永遠き亡滅のある所なり。彼等の現世の終焉も亦耻づべくして、樂なく來世の生命もまた苦をもて充たさるゝなり。然れば吾人も速かに亡ぶる人々に就きて羊の如く亡ぶと言ふを得。彼等は無言の動物に似たる生活をなし、が如く、



未來に於ける善き希望を有たずして無言の動物の如くに亡びん、而して管に然るのみならず、一層大なる艱難に遭遇ん。『死は彼等を牧せん』

思ふに、預言者が他の個所に於て生存の輕んずべきことにはあらず、即ち罰を言ひ顯しつゝ、『罪を犯せる靈魂は死ぬべし』(イェレミヤ)と言ひしが如く、來世の亡滅及び苦痛を死と名づくるなり。彼は寓意的の說話を續く。彼は羊のことを述べて彼等の牧者をも顯せり。此牧者は何人なるか。是れ有毒の蟲、永遠の暗黒解くべからざる挫措と切齒となり。爾は彼等が凡てのことに於て如何に罰を受くるを見ん、即ち生時に於ては善を行ふに障害を受け、惡癖の奴隸又は捕虜となり、死に於ては速かに、而も榮譽なくして終り、死後に於ては永遠き亡滅に渡さるゝなり。『平旦に義者は彼等を主らん』。甚く愚蒙なる者となりて無感覺の石の如くなりし多くの人々は、將來に於ける判然たる光明の希望を有たずして、現在のこと及び見ゆることに心を奪はるゝが故に、預言者は此寓意的の說話を以て彼等を恐れしむるなり。然れど後に未來のことに就きて簡短に述ぶるや、彼等が縦し、無數の富を領したらんも、顯位要職にあらんも、善き行をなして生活する者の僕たり、奴たるを以て、其如何に弱く、卑く、輕蔑せらるゝかを示しつゝ、再び彼等の虚しきことと、現

世に於ける罰とに就きて言ふなり。是によりて彼は之が爲に時をも勞働をも要せず、又待つことをも要せざるが故に、『平旦に』速かに常に『義者は彼等を主らん』とは言ふなり。善行と惡癖との性質は斯くの如きものなり、即ち縦し、惡人は無數の潤飾と多くの卓越とを以て飾られ、而して善人は毫も裝飾なく、又自然の儘なるも、惡人は善人に勤め、之を畏れ、之を危ぶむなり。爾は言はん、吾人は之と反對に、惡人が善人を主ることを見ると、然れども吾人は多くの人々の誤想を觀察せざらん。斯る判断は偽なる見解より生ずればなり。唯吾人は事物を正確に判断せん、然らば爾も亦我が前に陳べたる言の正しきに服せん。主人にして惡しき者あるべく、僕にして善良なる者あるべし、爾若し欲せば吾人は他の高尚なる例を引かん。王にして惡なる者あるべく、個人にして善良なる者あるべし、而して吾人は彼等の中何人か主人たる、孰れか權威ある、何人か命令し、何人か服従するやを觀察せん。吾人は如何に之を認むべきか。王は一個人に對して或惡事又は不度なる行爲を行すことを命するあらば、善良なる臣下は如何に行ふか。彼は管に之に同意服従せざるのみならず、縦し、之が爲に殺さるゝとも、其命令者をも念慮の中より遠ざげんことを力めん。彼等の中何人か自由の者たる。斯る場合に於て己が意



の儘に振舞ひて王を畏れざる者なるか將た又臣下に輕蔑さるゝ者なるか、然れど吾人は斯る例に止らず、實例をとりて述べん、エギベトの婦人ベンテフリイの妻は皇后にてはあらざりしか。彼はエギベト全國を主宰せざりしか。彼の婦は王の妻にあらざりしか。大權を帯びざりしか。而してイオシフは奴隸たり、捕虜たり、購はれたる僕たらざりしか。彼の婦は其全力を盡して少年に對抗し、戰爭を他人に倚托せず、自ら武装して彼と戦はざりしか。然れど當時奴隸たりしは何人にして、自由なる者たりしは誰なりしか。勸説め、懇請し、人の虜となれるにあらず、最悪なる情慾の虜となりし彼の婦なるか、或は彼の婦の冠冕、帝笏、白班、紅石と其他、凡ての外部の美麗とを輕蔑して、其計略を看破せし彼イオシフなるか。彼の婦の希望の聽容れられざるや、彼の婦は次に尙他の情慾、即ち無智の憤怒及び復讐の奴隸となりて去らざりしか。然るにイオシフは其首に無數の榮冠を飾られて出でざりしか、又其奴隸たる身分に於て一層光明に己の自由を顯さざりしか。

十。何ものも善行の如く爾く自由なるはなく、何ものも惡癖の如く爾く卑屈なるはなし。故に或者は他の個所に於て「かしこき僕は耻を來らする子ををさむ」(箴三二)と言へり。捕虜は縦ひ無數の財貨を有すとも、却て之あるに由りて衆人に攻撃

さるゝが如く、情慾に耽ける者は蛛網よりも弱し。例之ば吾人が戰の勝利者として見るは善行者にあらずや。また縦ひ何人の彼等に同意せざらんも、彼等の思は行と言とに強き者として顯はれざるか。然らば來世の生命に於ては如何。乞食者の如く願ひ、而も一滴の水をも受けざりしは富者にあらずや。然るに節制と善行とを行ひし貧者はアウラムと同一の運命を受けて至て大なる幸福をもて樂まざりしか。又使徒等は鎖に繋かれ、鞭撻と無數の苦難を受けつゝ、彼等を此苦難に服せしめたる人々に勝たざりしか。彼等は「此の人々に何を爲すべきか」(使徒行實四の十六)と言ひし己の窘逐者等に如何なる疑惑を惹き起さしめたるかを記憶すべし。彼等は縛ばられて裁判所に牽かれたり、然れども其等が裁判者、首長の位置を占め、而して此等が使徒等被告の位置に立てる時には、後者は前者に勝てり。然り若し注意して觀察する時は、善行者の常に不虔者の上に勝利を得るを見る、其勝利や眞の勝利にして、通例多くの者にあるが如きものにあらず、又偽なるもの、虚しきもの、容易に顛覆すべきものにあらずして、鞏固不動の勝利なり。「彼等の力は竭きん」即ち無力なるものとならん。言ふ意は、彼等は爰に捕はれ易くして、彼等の爲に扞禦ぐ者なく、之を幫助くる者なく、衆人の攻撃するに任すのみならず、尙之よりも惡



しきことは——彼處に在りて彼等を受難の中に慰むる所の如何なる中保者扞禦者及び幫助者をも有せざることなり。然れば智なる童女は無智なる童女を助くることを得じ、アウラアムも富者に、ノイイオフ及びダニエルも子女を助くることを得ざりしなり。『竭きてふ言は弱りて滅ぶるを云ふ。』舊びて衰ふる者は亡に近し』(エウレイ書)。「墓は彼等の住所とならん」。

彼等は特に欲することのために凡てをなし且つ勞せり即ち富を以て、建築を以て、墓碑を以て、墓碑に刻まれたる己の名を以て、死後にも大なる名譽を得んが爲なり——預言者言らく、彼等は之をも奪はる、彼等もし存して之を知りたらんには、此事は彼等に最も大なる悲哀を蒙らしめたるならん。斯る記念物は死者を訴ふることとなるなり。彼等の體は地下に隠るゝも、石は聲を發ちて毎日彼等の殘忍と破廉耻とを審定し、彼等を衆人の公敵と顯し、斷えず通行者をして彼等に詛と訴と駭とをなさしむ。自己の死後に黙せざる所の訴人、而も其一状態を以て衆人の口を開かしめ、凡そ之を見る者及び通行者をして其建立者に最も強き譴責を爲さしむる所の訴人を遣すは、是れ何たる光榮ぞや。何ものか彼等自ら其によりて罰を受け、其によりて慚愧と審定とに服し、其によりて死後にも多くの人々に憐れまされ、其

によりて詛はれ、駭られ、彼等に辱かしめられたる者にも辱かしめられざる者にも、無数の譴責を受くる所の物を建つるが如き無智と較ぶるを得んや。『惟神は我を納れんとする時、我が靈を地獄の權より脱れしめん』(十六)。「預言者は惡人の罰罪の應報のと言ふと、偕に亦善人に對する報賞に就きて言ふなり。ダウド及び他の預言者等が通例斯くの如く行ふは、兩方面より即ち罪の爲に受くべき罰と善行のために受くべき賞とを以て聽衆を矯正せん爲なり。彼曰らく、前者の運命は、不虔無益なる勞働無智嘲笑、恥辱亡滅、死苦痛永久の罰痛、傷生時及び死後に於ける名譽と安全との剝奪、誹謗定罪、艱難の中に於て凡ての慰なきことなり、然れど之に反して吾人の運命は罰を免るゝこと、靈の自由、安全及び光榮と尊貴となり。彼は爰に罰耐ふべからざる來世の苦を地獄と名づけつゝ、『惟神は我を納れんとする時、我が靈を地獄の權より免れしめん』てふ言をもて此等のことを言ひ顯せり。當に此言のみならず、彼が附加へし言の中にも幾何の尊貴あるを思へ。曰く、『我を納れんとする時』は、我は今よりも一層明かに神を見んと。『蓋今は我等信をもて歩み而して目を以てせず、其時は而を合せて觀ん』(コリント前書)。「而して靈の救はるゝ時は體も亦福に與かるなり。』人富を致し、其



家倍榮ゆる時、爾懼る、母れ(十七)。言ふ意は、若し斯くの如くんば何故に爾は現世の事を懼るゝか。貧賤は何故に爾を煩すか。何故に爾は富者を懼るゝか。爾は復活に就きて善人の報賞及び悪人の罰に關する教を聞けり、何の爲に爾は影を畏るゝかとなり。來世の幸福は堅固にして不易なり、然れど現世の幸福は萎るゝ花に彷彿たり。然れば預言者は他の凡てのものを遺て、諸惡の城砦なる富の慾情を攻撃したり、何となれば富の慾情にして打破せらるゝ時は、其他の情慾は悉く破壊せらるればなり。

十一。爾は言はん、斯く強き人々を我は如何にして恐れざらんやと。彼等の權力は暫時なり、彼等の力は一時なり、彼等の幸福は堅牢ならず、財貨奢侈貴は、由來影の如く幻像の如し。然れば預言者は又暫時のことを畏るべからざる理由を示しつゝ、「蓋彼死して一切を携へず、其榮は彼に伴はざらん(十八)」といへり。言ふ意は、死至り根絶たるれば悉くの美は葉と偕に滅び、その家も亦人々の奪掠する所とならんとなり。綿羊と山羊とは伐倒されたる木を攻撃するが如く、多くの敵多くの友と多くの恩恵を被れる者とは、死せる富者の財産を奪はんが爲に之に近づき、斯る財貨を所領し、斯る多くの酒人、雇人、金銀の盃、斯く多くの土地家

屋奴僕馬騾駝および奴隸を有せし者も、其死するや只一人去るなり、即ち何人も彼に伴はずして、彼は己の衣服をも此に遺して去り行くなり。實に彼は最も美麗に着飾る程最も裕なる食物を蟲に與へ、益々墓賊の貪慾を起さしめ、又益々彼の不幸なる體を食ましむるなり。眞に彼が多く飾る程自己に對ひて墓破の手を武装せしめ、又之を招ぎつゝ、最も強く自己に凌辱を招ぐなり。然れども爾は言はん、其事に於て何かあらん。彼は其の代りに、爰に己の死する前に喜び樂むと。然れど甚だ多くの者は死する前に樂むことは、兎に角否却て諸敵の彼等を攻撃する時は、財産を奪はれ、不名譽を受け、獄裡に閉ざられて定罪されたる犯罪人よりも多く苦めり。然れば昨日車上に坐せし者は、今日は挫指に繋がれ、昨日阿諛者に侍かれし者は、今日は劊手に圍繞まれ、芳香を呼吸せし者は、血に塗れ、柔軟なる臥床に横はりし者は、慘憺たる床の上に投せられ、衆人に譏稱せられたる者は、衆人に輕蔑せらる。爾は言はん、然れど彼は死後にも最も壯麗華麗なる葬儀を營まると。然れども何事をも感ぜざる彼等の爲には、此等の事何かあらん。唯惡臭汚辱、嫉惡の一層大なるのみ、此壯麗は逝者の諸子の間に斷えざる仇を構ふるの發端となる。而して見よ、預言者の表言は如何に正確に、其智は如何に大なるかを。彼は富者の死後財貨



を擧げ行かざることを以て富者を攻撃するのみならず爰にも亦縦ひ人富を所有すとも富は彼の所有にあらざることを示しつゝ、富者の凡ての誘惑を脱れしむ。彼は「其倍榮ゆる時」と言はずして「其家倍榮ゆる時」と言へり。言ふ意は我が數へし所の此等のもの即ち噴水廓廓浴室金銀馬驟敷物衣服等は家の榮にして家に住居する人の榮にあらずとなり。

人の榮は善行にして、其善行は之を得たる者と偕に去るものなり。然れど此榮は家の榮として止り或は尙之を正確に言へば止まらずして家と偕に破壊され而して之に往居する者に何等の益をも來たさざるなり、その彼の榮にあらざればなり。

「彼存命の時、其靈を樂ませ」(十九)。預言者は富と榮とのことを述べて今や尊敬に就きて言ふなり。富者は此事に就きて市場に於ける追従人民を悦ばせ、夜會の稱讃を得んことを多く慮り劇場宴會裁判所に於て拍手喝采を以て衆人に稱揚せられ模範とすべき者なりと稱せらるゝを大なることの如く思惟するが故に、預言者は其時の短き方面よりも如何に其益なきを示すかを見よ。彼曰らく「彼存命の時」と即ち此等の満足、此等の讚美は現世の生命の終る迄なり而して生命の終りて後は、他の暫時的及び具體的事物と等しく偕に消滅し彼の死後即ち畏を

惹起せし假面の落る時は稱讃者の口も亦反對のことを述ぶるなり。「且人爾が自ら満足するを見て爾を讚むれども」。視よ如何に預言者が斯る人の善行をも讚するかを。爾は彼に阿諛し、彼を悦ばせ、虚偽詐善をなして或暫時的の勤勞を示し、而して彼は縦し爾に感謝すとも、是れ爾が彼に悦ばるゝことを爲したるに由る、又彼は斯くの如くして全く爾に歡心を與ふる時は爾に感謝せん。視よ「且人が自ら満足するを見て爾を讚むれども」て言はるは何の意なるかを。彼は人に有益なることをなし、慈惠を顯す時と言はずして、彼に悦ばるゝことをなし、彼の希望及び其意思によりて勤勞を顯す時と言ひ、斯くして相方より害を示せり、即ち偽善を嘉することより生ずる害、惡意ある追従よりする害を示せり。

「彼は永く光を觀ざる其列祖の處に往かん。人の貴くして無智なるは亡ぶる獸の如し」(廿節)。「往かん」とは即ち彼は己が父の貪慾に倣はん、又惡人より生れて彼等の惡を相續すとなり、或は換言すれば、若し毫も善事を爲さざる時は、富より何等の益をも受けずして、彼に先だちて逝りし者と審判せらるゝ迄塵の中に止まり、而して自然の法則によりて光を見ることを得ざらんとなり。次に預言者は前に述べられたることを復しつゝ、「人の貴くして無智



なるは亡ぶる獸の如し』といへり。言ふ意は斯くの如くにして死せし人は、己の富を適當なることに用ひずして、毫も無言の動物に異ならず、彼は神より彼に與へられたる尊貴を識らずして現世の生命を終りて消滅する家畜の如しとなり願くは吾人此の事に救へらるゝ者も救ふる者も皆僭に光榮權能の世々に歸する所の吾人の主イエスマスハリストスに於て救はれん。アミン。

### 第四十九 聖詠講話

諸神の神主は言を出して地を召す、日の出づる所より日の入る處に至る(節一)。

一。預言者は同じく他の個所に於て「神は諸神の會に立ち」といひ、また「我曰へり爾等神なり」(聖詠八十二)といひ、同じくバツルは「蓋所謂諸神多くの主の如き者ありと雖も(コリント前)といひ、モイセイは「爾神を罵るべからず」(出埃及記廿)といひ、他の個所に於て「神の子等人の女子を見たり」(創世記)といひ、又彼は「神を罵る者はその罰を蒙るべし、主の名を瀆す者は石をもて誅されん」(レウイ記廿四)といひ、イエレミヤは「天地を造らざりし諸神は天の下より失せん」(イエレミヤ)といへり。聖書は此等の證據に於て斯

る名をもて何人に示すや、又爰に如何なる諸神に就きて言ふか。柄權者に就きてなり。是故に聖書は又「汝神を罵るべからず、民の主長を誣ふべからず」(出埃及記廿)と附加ふ。聖書は或敬虔なる祖先より出でし人々を同様に名づく。然れば大なる善行をもて異りしエノスは、神のエノスと稱へられ、彼の子孫および彼の兄弟の子孫の互に混じたりし時、聖書はこの善人より出生したる人々を神の子と名づけたり。創世記々者曰らく「人々主の名を呼ぶことを始めたり」(創世記四)と。又イウデア民は「我曰へり爾等神なり、爾等皆至上者の子なり」(聖詠八十)てふ言に於て、此名稱をもて尊ばれたり。神は己の仁愛によりて此民を斯く名づけたり。斯くして「神を誣ふ者はその罰を蒙るべし」てふ表言も亦説明せらる、即ち有權者を罵詈する所の者なり、「主の名を瀆す者は石をもて誅されん」とは眞の神の名を偽の諸神に歸する者なり。斯くの如き罪は赦されず、故に其罰亦最も重し。異教の諸神も此名を以て稱せらる、然れども彼等は斯る名稱に適するによりて然するにあらず、又正しきによりて然するにあらず、迷信者及び斯る名稱をもて彼等を稱ふる者の盛感によりてなり。然ればバツルも夫の諸神の眞の神にあらず、又價値なくして斯く稱へらるゝことを言ひ顯しつゝ、「蓋所謂諸神の如き者あり」(コリント前)と言ふ。預言者が爰



に「諸神の神」と言へるは如何なる諸神に就きてなるか。思ふに異教の諸神に就きてなり即ち眞の諸神に就きて云ふにはあらず乃ち迷へる人々より斯る者として尊ばるゝが如き神に就きてなり。預言者はイウデヤ人の未だ頑愚にして全く偶像奉事を廢めじ意を偶像に傾け多くの不法を存したりしが故に神は此等諸神の主たることを示しつゝ之よりも彼等の思念を潔むるなり。實に神は惡鬼即ち惡魔其物にも亦主たり而して惡念と諸惡とは惡魔より生ず。思ふに此聖詠は前聖詠と關係を有するならん。爰にも罪人を譴責することゝ審定することゝを記載せり唯預言者は前聖詠に於ては全世界を招きて聞かしむるも此聖詠に於ては全世界の上に充滿せる自然物を招きて聞かしむるなり。爰には他の演劇他の集會あり彼處には地の族たる人民即ち富者と貧者とあり爰には天地及び神自らもイウデヤ民の前に審議せられ又辯疏する者として顯るゝなり。是故に吾人は最も多くの注意を有せざるべからず。他の預言者も同じく神を以て訴訟する者と顯し又諸の山と地の基とを審判に呼びて「山々よ地の易ることなき基よ爾等主の辯争を聴け主その民と辯争を爲さん」(四の二)といひ又「故に我尙爾等と争はん且爾の子孫とあらそふべし」(イエレヤ)といへり。其他聖書多くの個所に於て之と

同様なる表言を見ることを得此表言は特に驚くべく神の仁慈を受くるに堪へ且つ人々と争ふ迄に寛容なる神の得も言はれざる恩寵を示すなり。「神はシオン、即極めて美しき處より顯る」(二)。此表言の中には或預言的及び歴史的事實を含有す何となれば神の威嚴は舊約に於てもシオンより出たればなり。聖堂至聖所舊約の諸奉神禮と規定無數の祭司獻祭犧牲聖歌聖詠及び其他凡てのものは此處よりす將來の幸福の模範は預め彼處に於て圖取せられたり。眞理の來るべき時期至れるや眞理は復先づ彼處に啓示されたり。十字架は其處より輝き無數の仁慈は其處より耀きたり。視よ、イサイヤは何によりて新約の律法を記録しつゝ「そは法律はシオンより出て主の言はイエルサラムより出づべければなり、主は諸の國の間を鞠かん」(イサイヤ)と言へるかを。彼が爰にシオンと稱へたるは全國及び其中にある所の城市即ちイウデヤ人の都會なり。俊足の駒たる使徒等は此處よりす即ち或園の中より全世界に遣はされたり彼等は此處より休徴を爲し始めたり彼處には「ハリストスの復活と昇天とありき彼處には吾人の救贖の門戸と始原とありき彼處において初めて云ふべからざる定理報せられぬ以前に於て父は彼處に啓示せられ獨生子は認識せられ神の恩寵は與へられたり彼處に於て



使徒等は無形なる事物恩賜能力及び來世の幸福の約束に就きて説教し始めたり。預言者は此等のことを想像しつゝ、「神の美」と名づく何となれば壯嚴と神の美とは神の仁愛と衆人に對して善を行ふことなればなり。「我が神顯はに來る、彼は默さず」(節三)。爾は如何に預言者が常に說話を明白にし、寶藏を開き最も燦然たる光線を投ずるかを見よ、彼曰らく「我が神顯はに來る」と。神の顯然に來らざりしは何れの時なりしか。己が第一の降臨の時なり。其時彼は喧鬧がすして來り、多くの人の爲に著しからず、且つ久しく看出されざりき。我は多くの人の爲に何をか言はん、當時は之を胎内に宿し、童貞女自らも全く言はれざりし、奥密を知らず、主の兄弟も彼を信せず、其義父も亦彼に於て大なることを見んとは、毫も預想せざりしなり。

二。尙人々に就きては言ふ迄もなく、惡魔もまた彼を知らざりしなり、何となれば惡魔若し知りたらんには、數刻を経て、これを一度ならず二度三度山上に於て「爾若し神の子ならば」(マテの三、十六)と言ひて、主に問はざりしならん。然れば主は己を明かし始めたるイオアンに對ひて「今始く許せ」といへり、即ち今默せよ、何となれば尙未だ經綸の奧義を明かすべき時の來らざればなりと、我は尙惡魔より隠れんと欲す、

默せよ、蓋我等は是くの如く凡ての義を盡すべし」(マテの十五)。彼は又山を下りつゝ、彼のハリストスたることを何人にも告ぐべからざるを命じたり(マテの九)。當時彼は迷へる羊を見出し、逃走りたる獲物を捕ふる牧者として來れり、故に彼は己を隠したり。醫師が病者に對して突然己を畏るべき者と顯さるが如く、ハリストスも亦初に己を顯すを欲せずして、漸々徐々に己を顯さんと欲したり。視よ、何によりて預言者は神の穩なる降臨を畫きて後、彼は交りたる草場以降る雨の如く、土を潤す雨滴の如く降らん(聖詠七十)と言ひしかを。彼は騒亂を起さじ、地を動かさじ、電光を發せじ、天を震動せじ、多くの天使を遣はさじ、穹蒼を激動せしめじ、雲を降さじ、又騒然として來らず、即ち九ヶ月間平和にして童女の胎に宿れる者は木工の子として生れ、槽壚に置かれ、貧しき布に包まれ、寒逐を受け、母と偕にエギベトに逃走せり。次に不法者の死後還りて此處彼處に彷徨ひ、其狀態一凡夫の如く、貧しき衣服を纏ひ、乏しき食物を用ひて常に旅行し、剩へ途上に疲勞する程常に旅行せり。然るに彼が後に來るや斯くの如きにあらず、其來臨や之を報告する者を要せざる程明かなり。是故に彼自ら己が再臨の明白なることを示して「視よ、彼は密室に在りと聞くと出づる勿れ」視よ、彼は野に在りと「言ふ者ありとも出づる勿れ。蓋電の



東より發して西にまで閃くが如く、人の子の來るも亦是くの如くならん」(マテ四の廿六)と言へり。此人の子來るとは、自ら己を指し己のことを報するなり。夫れ電と同じ故に何人かありて吾人に電に就きて報するの必要を有せず、即ち電は速かに顯るゝが故に衆人の爲に見ゆるものとなり、而も同時に衆人の爲に見ゆるなり。然ればバネルも「蓋主親ら號令と、天使首の聲と神の菰に伴はれて天より降らん」(ソル十六)と言へり。然れば預言者ダニエルも、主の雲に乗るを見彼の前に流るゝ河畏るべき座位と、必ず免るべからざる審判とを見たり(ダニエル七)。主の再臨の時には審判と審定とあらん、是故に其時彼は已に醫師としてにあらず、即ち審判者として顯るゝなり。斯くの如くダニエルは主の寶座をも、その座位の前を流れ過ぐる河をも見たり、而して此等のもの即ち車も輪も火の如きものと彼に顯れたり。然るに主は其第一の降臨に際しては毫も斯くの如きものを顯さざりき、即ち火も河も、其他之に類するものをも顯さずして、槽櫃と旅宿小屋と貧しき母とありき。預言者は爰に他方より彼の不易不變光明及び神の近づくべからざることを言ひ表すなり。彼は管に火を以て限らず、即ち主の罰の力を示さんと欲して「烈しき風あり」と附加よ。彼は「烈しき風」てふ言を以て、凡そ遭遇するものを誘引して之を

衝倒す所の重き雪塊或は之に向て行く者の爲に耐えられざる風の猛烈なる進行を名づく。彼は此罰の重きを言ひ顯さんと欲しつゝ、斯くの如き比較を用ひしなり。「彼は上より天地を呼ぶ、其民を判かん爲なり」(四)。彼は管に體の生命及び組織の關係に於てのみならず、神を識る關係に於ても無數なる多くの幸福を人類の爲に生ずる自然物に就きて再び記憶するなり。實際に此等自然物の美威嚴排列及び本質此等より生ずるもの總じて凡ての時にあるもの及び風個々の現象に於てあるもの、凡そ此等のものは皆吾人の體を養ひ、之を盤へて造物主を識るに導くなり。然ればバネルも「蓋彼の見るべからざる事、即其永遠の能と神性とは創世より以來造られたる物を察するに由りて見るべし」(ロー一)と言ひ、又「蓋世は其智慧を以て、神を神の智慧に於て識らざりき」(コリ一)と言へり、即ち神の智慧とは神が其造物に於て顯さるゝ睿智にして、是れ甚だ大にして且つ極めて明かなる解釋たり。而して日々彼等によりて生ずる所のことは、事物自然の秩序によりて行はるゝが如く思はるゝも、同時に造物主のことを報す。眞に主は萬有の造者なり。

三。預言者が公審判のことを述べつゝ、談話をイウテヤ人に向くるとを驚く勿れ。



バズルも左の如く曰へり「忿懣と赫怒患難と困苦とは凡そ惡を爲す人先づイウヂヤ人次にテリソ人の靈に至らん」又曰へり「凡そ律法なくして罪を犯し、者は律法なくして滅び、律法ありて罪を犯し、者は律法に由りて審判せられん」(ロマ九十二)と

「曰ふ、我の聖者、祭を以て我と約を結びし者を我が前に集めよ」

節五。彼は爰に誣告し及び審かんと心掛くる人々を何の爲に聖者と稱ふるか。誣告を強め、彼等の價値を示して大なる罰を言ひ顯さん爲なり。然れば吾人も亦何人かを犯罪者として最も強く之を譴責せんと欲する時は、最も重き罪人として審定するが爲に彼の職位を呼びて補祭或は司祭を呼べと言ふ。イウヂヤ人は天國の聖別者及び選民と名づけられ、而して之を以て多く高慢したるが故に預言者は彼等の犯罪の重大なるを暴露す。「祭を以て我と約を結びし者」斯く彼等は無數の罪を行ひ、斯くも多種なる惡をなし、他人の有を奪ひ、貪慾に耽り、人を殺し、姦淫を行ひ、血と血とを混じて、而も多くの善をなし、律法と契約とを成し、遂げたりと思へり、彼等は羊と犢とを犠牲に献じたるに預言者は之を以て彼等を譴責嘲笑しつ、「祭を以て我と約を結びし者」といへり、即ち彼等の救の爲に無言なる動物の體を犠牲に献ずるを以て足れりと思ふ所の者の意なり。「諸天は

神の義を唱へん」(節六)爰に彼は再び神の義の光明顯然として争ふべからず、著しきことを示さんと欲して前に述べたるが如き状態を以て、無生物を神の義を告ぐる者として顯すなり。「蓋此の審判者は神」即ち各人に義務とする所を定むる者なり。彼は爰に空しく「審判者」てふ言を用ひず、即ち神自らも義なる者なれば、他人にも同様に報ふることを示さん爲なり。「審判者」てふ言を神に就きて「義なる者」てふ言の代りに用ひらるゝとは、バズルも「若し然らば神は何何にして世を審判せん」(ロマ六)と言へるが如し。爾等の知れる如く、特に審判をなすこと、又特に裁判官たるとは、實に宣告をなすのみならず、公平に宣告をなすにあり。當時生活せしイウヂヤ人の如く、後に新約に於て罪を犯し、者も審判せられん、前者の原告は萬有と律法にして、後者の原告は右の外ハリストスが彼等の爲に行はれたる凡てのとなりとす。實に彼等は何を、か言ひ、如何なる理由をか想像し得る、彼等は何故に信せざりしか。然れども我は爾等に願ふ、爾等が反對者に對して口を塞がざらん爲に、我が言に注意せられよ。己を勝利者と思ひて、彼處に去り、及び世界の公なる審判者に審定せられんよりは、寧ろ今吾人の攻撃を受けて矯正するを勝れりとす。イウヂヤ人は何をか言ひ得る、何故に彼等はハリストスを殺し、か。彼等



は小罪たりともハリストスの中に見出し得るか。彼等曰らく「彼は己を神と爲せり」(イオアン福音)と。然れども主が十字架の苦を受けられし時に彼等の言ひしは、此言に非ずして他の言なりき。當時彼等は「凡そ己を神と爲す者」と言はずして「凡そ己を主と爲す者はケサリの友に非ず」(イオアン福音)と曰へり。然れど彼等は眞々主を立て、王となさんと欲したるも主は隠れたり。然れども爾は言はん、彼等は前に主が己を神と爲したりと主を訴へたりと。何ぞや。彼若し實際神に非ずして偽りて、或は不正にして己を神と名づけたらんには、其報告や理由あることなれども、若し正しき時は彼に叩拜すべくして、而も之を十字架に釘うつべからず。吾人は觀察せん、彼は神にあらずして己を神となし、即ち己を神として示し、且つ名づけたるは正しきかを。然れども爾は何處より之を知らんと欲するか。當時の事件よりか、或は現在の事件よりか、將た彼の降生の時にありし事件よりか。何人か何時、女より生れたる。何人か斯る星を示したる。何人か力を用ひじ、又強ひずして、斯る方法即ち承服と啓示とを以て博士を導きたる。爾は萬有が如何に主宰を認めしを見るか。萬有は謙遜して神の命に従ひ、抗言せず、又我は爾の斯の如き誕生を容さず、處女の胎より子を生れしむるを得ず、我は婚配せずして母となすを得ずと

しはず、謙遜なるは却て其度を越えたり、何となれば萬有は己の主宰を知りたれば也。次に主の降生するや、諸天使降りて、天上に住居する者の地上に顯れたるを報じ、地は夫となれり、爰には王のありしによりて博士等も遠方より來りて、彼に叩拜し、嬰兒はパンスラナの槽に横はれり、而して野蠻國より來りし者等は神に顯すべき所の榮譽と尊敬とを主に與へたり。然れどイウデヤ人等は此等の休徴を受けずして、當時に行はれし諸種の休徴を要求せり。然れども吾人には斯る證據にて足り。眞理は斯くの如し、即ち眞理は證據に稀なり。彼等は爰に非難の如何なる影をも特更に想像するを得ざる也。然れば爾は、縦ひ主が處女より生れし時、あらざりしとも、視上、處女孕みて子を生まん、その名をエムマスイルと稱ふべし(イオアン福音)と言へる預言者の言を信せざるべからず。縦ひ爾は主が肉體を著、地の四方を往來したる時に在らず、又爾は主宰が奴隸と相對したる時に在らざりしとは、雖も、イエレミヤに問へ、彼亦爾に「是れ我等の神なり、他の何者も之と較ぶるを得ず、彼は凡そ睿智の途を見出して之を己の僕イヤコフと其愛し、イズライリとに賜へり。其後彼は地上に顯れて人々の間に向へり」(預言者ソルフ)と言はん。四。他の諸事件に就きては、爾が此時迄も此目的を以て空しく其書を開き、且つ一



讀したりし其預言者等は明かに凡てを報ず。而もイウデヤ人に對する非難は吾人の數々告げたる所今後も亦言はん今は自己の問題に向はん。「諸天は神の義を唱へん、蓋此の審判者は神なり」。思ふに彼は爰に神の義に就きて、神の大なる配慮に就きて、其イウデヤ人に對する仁愛に就きて、彼が造物律法恩寵、見ゆると見えざるもの、預言者天使使徒懲罰仁慈威嚇契約事物の時を得て秩序あること等を以て種々多様に全人類を照管することを言ふなり。「吾が民よ、聽け、我言はん、イズライリよ、我證を以て爾を責めん」(七)再び視よ、此言の始に如何なる仁善と溫柔とのあるかを。人は不安にして不規律なる人に對して、爾若し聞かずば我は言はん、爾若し注意せずば我は告げんと言ふが如く、主宰も亦奴僕に對して、爾等若し我に「聽かば」「我言はん」と言ふなり。實に彼等は怠り且つ不注意なる者なり、一少時たりとも律法の朗讀を謹聽せざりき。ペルシヤに住居せし一預言者は之を言ひ顯しつゝ、「彼等には爾悦ばしき歌の如し」(イエサヤ三十三)と言へり。彼等は數々預言者に對して、其預言せざるべきを言ひ、剩へ彼等を放逐して不潔を顯せり。或王も一預言者を威嚇して、人民に説教せざるべきを命じたり(イエサヤ三十三)。「我は神、爾の神なり」。爰に重複の言を用ひられしは徒然

ならず、即ち神は無感覺にして且つ殘忍盲目なる人々に言ひしが故に、最も遠き所の教誨に美しき初を置き、彼等が神より自由を受けられたれば、正しく主宰に對する奴僕として、造物主に對する造物として、至大の仁慈を受けし者及び斯る名譽を受くるに堪へしめられたる者として、神に償を返すべきことを勧めつゝ、自己の主權者を記憶せしむるなり。「我爾の祭の爲に爾を謹めんとするに非ず、爾の燔祭は常に我が前に在り」(八)。然れば他の諸預言者も彼等を譴責せり、何となれば彼等は善行の至大なる部分を蔑視して、救贖の希望を献祭の中に置き、たればなり。彼等は己を義とするが爲に曰はん、曰く、吾人は祭を獻げ、燔祭を行ふと。然れども神曰へり、我が來るは爾等が之を輕忽にしたるによりて、爾等を審かん爲にあらず、又之が爲に爾等を訴へん爲にもあらずと。イサイヤは一層強く彼等を譴責して、「爾等が獻ぐる多くの犠牲は我に何の益あらんや。我は牡羊の燔祭と肥えたる獸の膏とに飽けり、我は牡牛或は小羊或は牡山羊の血を悦ばず。このことを誰が爾等に要めしや」(イサイヤ一十二)と云へり。縦ひ(律法には)祭に就きて多く言はるゝも、神が祭に就きて律法を興へられしは、特に之を希望せられしに由るにあらず、即ちイウデヤ人の荏弱を寛假したるなり。イエレミヤもまた「サワよ



り我が許に乳香來り、遠き國より膏滯來るは何の爲ぞや(一書六の二十)と云へり。總じて諸預言者は此中に毫も重大なることなしと言へり。然れども神自らも我は神、爾の神なり」と言ひて、以て其奉事の方法の神に適はざることを表せり。實に神を尊敬するには、煙或は惡臭を以てすべからず、善行即ち肉の行にあらざる靈の行を以てせざるべからず。異教の鬼神等は然らず、彼等は自己に犠牲をすら要求す。グレチヤの一詩人は「吾人は此國を受けたり(一書四十九)と言ひて之を言ひ顯せり。然れど吾人の神は斯くの如きものならず。異教の鬼神は人々の血に渴き、漸次人々を殺人に慣れしめんと欲して常に之を要求せり。然るに吾人の神は漸次人々を無言の動物すら殺生することを避けしめんと欲しつゝ、唯彼等を寛容し、犠牲を獻することを應せんが爲に犠牲を用ふることを許容せり。我は爾の家より或は山羊を爾の牢より受けざらん。蓋林中の諸獸と千山の諸畜と皆我に屬す。我山の悉くの禽を知る、野の獸も我が前に在り(九節)」。視よ主が如何に地に傾ける者の思想を高め、味まされたる智慧を深めたるかを、又主が犠牲を定めたるは、其之を要するによりてはあらざるを律法に規定したるは、犠牲を奪ひしたるによりてはあらざることを明説するを。

言ふ意は我若し斯る奉事を受くるを欲せば我は凡そ天下にあるものを自己の内に有する万有の造者たるによりて、自己に獻せしむるが爲に最も善なる犠牲を指示し、ならんとなり。次に主は禮責を最も感動すべきものとなさんか爲に、彼等を嘲笑し、彼等を慚愧せしめつゝ、「我縱令飢うとも爾に告げざらん。蓋世界と之に満つる者と皆我に屬す(十二)と言へり。主はオウヂヤ人に犠牲を避けしめんが爲に犠牲を用ふることを許容したるも、彼等は斯く瑣細なる事に縛られ、斯る寛容より些の利益をも受けざりしを以て、幾何か感覺的及び人事的に彼等と談話しつゝ、「我縱令飢うとも爾に告げざらん」といへり。即ち我は飢えず、何となれば神には飢うることなく、疲勞することもなければなり。而して我若し斯る奉事を欲したらんには、無数の祭と燔祭とに不足を告げざりしならん。此等のものは、常に我が前に在り、然れど我は万物の主たり、主宰にて在りながら己のものを爾より受けんと欲するは、此方法を以て爾を我が愛に導き、且つ空しき事物に執着することを避けしめん爲なり。

五。次に主は彼等を高尙なるとに上ほせつゝ、「我豈に牡牛の肉を食ひ、或は山羊の血を飲まんや(十三)」といふ。言ふ意は、我は人々にも之を爲すと



を禁じて、血を飲む者に重き罰を定めたり(七十の七)おのが僕に斯る食物を禁じて、我  
 や如何で血を要せんとなり。神は斯くの如くに此等のものを排斥し、其己の爲に  
 適せざることを示し、誹責と嘲笑とに附して、昔に此事に止まらざるのみならず、無  
 益なるものより遠ざかり、彼等の傷に之を愈し得ることを附加へつゝ、最も善き治療  
 法たる献祭の他の方法を指示す。預言者は前に述べられたる説話を終りて「神に  
 献ぜよ(十四)と言ふ。如何にして献ずるか。血なくして献ずるなり、何となれば  
 斯る献祭は特に神の聖意に適すれば也。然れば預言者は「神に献ぜよ」と言  
 へば「讚美を以て」と附加ふ即ち感謝と聖歌と行爲とを以て神を讚揚するとなり。  
 言ふ意は爾の主宰の讚揚せられん様生活せよとなり。ハリストスも「是くの如く  
 爾等の光は人々の前に照るべし、彼等が爾等の善き行を見て、天に在す爾等の父を  
 讚榮せん爲なり(マテウイ福音書の五の十六)と言ひて此事を教へたり。「讚美」とは光榮稱讚頌揚に  
 外ならざるなり。爾の主宰の讚榮せられん様生活すべし、然らば爾完全なる祭を  
 献ぐることを得ん。パウロも「爾等の身を活ける聖なる祭神に悦ばるゝ者として  
 献げよ(ローマ書十二の二)と言へるは、斯る献祭を要求せるなり、又預言者は他の個所に於て「我  
 歌を以て我が神の名を讚榮し、頌を以て彼を讚揚せん、此れ主に悦ばるゝ、牛及び角

と蹄とある犠に塗らん(聖詠六十八の三)と言へり。イオフは人の性に勝れたる打撃を  
 受けし後感謝して「主興へ主取り給ふなり、主の御名は讚むべきかな(イオフ書一の廿一)と言へ  
 るは、斯る祭を献げたるなり。「爾の禱を至上者に償へ」(正教訓には「誓」とあ  
 るも、原本の解釋は祈  
 禱に關するをもつて)。こゝに預言者は祈禱のことに就きて言ふなり、是れ吾人が  
 常に祈禱し、誓ひし所を急ぎて神に償はん爲なり。彼が「償へ」と言へるや善し、何  
 となれば一旦誓を發したる事は償として存すればなり。然ればアンナは至て大  
 なる償たる子を興へたり(第一列に紀一の廿八)。爾もまた慈善もしくは貞潔なる生活を誓約  
 し、或は何事か他の之に似たる誓を發しなば急ぎて之を成遂げよ。人若し契約し  
 たることを確かに遂行せば、縦ひ彼は他の多くの契約をなさずとも、彼の爲に善行  
 を行はざるべからず。ハリストスは此を以て「行ふべき事を行ひしのみ」と言ひ、且  
 つ此事に就きて或僕に最も小なる業務を定められ、其之を成遂げて歸りたる後之  
 に席座することを許さずして、行きて事へよと命せられし譬喩を言へり(マカビ十二の  
 七の五)。他の或者も「爾若し神に誓を發する時は、之を行ふと猶豫する勿れ(傳道書  
 五の三)」と言へ  
 り。爾約束をなさんか。死到りて妨げざらん様之を成し遂げよ。然れども爾は  
 言はん、我已の生命に權利なし、是れ何ぞ我に關せんやと。否爾の終焉の知られず、



爾が己の生死に權利を有せざるによりて猶豫すべからずといふ也。斯る辯疏は己の罪を定むるなり。約束を成し遂げざる理由は死にあらすして爾の遅延と猶豫となり。「憂の日に我を呼べ、我爾を援けん、爾乃我を讚榮せん」(十五)。爾は報酬の甚だ過剰あるを見るか。神が人々の善行の爲に報賞即ち遙かに其勞に勝る大なる報賞を與へ、而も其必要なる時に之を與ふる時は、何ものか斯る仁愛に比すべけん。何の爲に主は「我を呼べ」と言ひしや。何の爲に主は吾人の彼を呼ばんとを待つか。彼は與へ、而して吾人が彼を呼びて受くることを以て、吾人に神に對する大なる執着と焰の如き愛とを生せしめん爲なり。善行は眞に神に對する執着を生じ、報賞も亦之と同一なるを生せ、所願は此執着を固む。故に神曰らく、我に與へよ、我亦爾に與へんと。爾は與ふると情に受けん、何となれば神は何物をも要せざればなり。然れば爾は温柔節制貞操なりとも、神に何ものをも加へずして爾は自ら己を潔き者となし、善き者となさんのみ、然れども神は之が爲に爾が神に利益を與へしもの、如くに至大なる賞與と榮冠とを爾に與へん。且つ其榮冠を受くるに先だちて良心の平安を得、幸福なる希望に圍まれつゝ、少からの満足も以て樂まん。預言者が愛に「憂の日」といへるは不幸の日或は不快なる事

情を指せるにあらず、乃ち罪の爾を攻撃する時、惡魔が惡望を勤めて爾を包圍する時に大なる幫助を受けんとなり。「我爾を援けん、爾乃我を讚榮せん」。而して神が復び之を言ふは、神は吾人の讚榮を要するによりてにあらす。榮光の神何ぞ讚榮を待たんや。乃ち感謝の歌頌には仁慈に就きての記念あり、神に對する最も熱切なる執着を惹き起され、且つ何事よりも先づ大なる幸福を受くるに由る。六。預言者の愛に「憂の日」といへるは將來の日をも指せるなりと言ふ者は誤らず、何となれば來世には斷えざる憂愁のあればなり。現世に在りては近づく所の死は艱難を斷ち、思ひる友、希望ある終焉、風々事情の變遷に對する希望と時の延引くことも、靈の苦を柔らげ、他人の艱難を受くることも、同じく靈の苦を減す、何となれば己と共に憂愁を受くる者あるを見、自己に似たる例を見ることは、多くの人々の爲に大なる慰と思はるゝによる。然るに彼處には恠も斯くの如きものなく、何人の慰むるなし、乃ち衆人は皆友を奪はれ、時間の長さも苦を減せず、何となれば猶若し常に作動くときは如何にしても安慰あることを得ざればなり、放免せらるゝの希望もなし、何となれば此罰は永久なればなり、死を待つこともなし、何となればこの苦は無限にして罰せらるゝ體も亦不死なればなり、多くの人々の爲に安慰と



思はるゝこともなし、他人の苦を見ることなきに由る。第一に彼處に於ては他の苦める者を見るを得ず、何となれば或園の中にあるが如く、暗黒は目を暗ませばなり、次に非常なる苦難は斯る安慰を感ずるをすら許さざるなり。然れば苦みて切齒する者の如く、富者は此處より如何なる安慰をも受けざるなり、「神罪人に謂ふ、爾何爲れぞ我が律を傳ふる」(十六)。爾は完全なる古琴調子好き、(三弦器)を見種々なる音を發する好調き歌を聞くか。之と同様なる意味は使徒等及び他の預言者等にも見出だすことを得、バズルも亦前以て自ら學ばざりし者の、他人を教ふるの毫も益なきことを注意せり。イウデヤ人等は献祭及び律法を有し、ことを高慢して己を他人の教師と稱したるが故に、バズルはイウデヤ人若し自ら無學者として止まる時は、其より僅少の益を受くることを證し、且つ強く彼等を譴責して、然らば爾は何の故に他人を誨へて己を誨へざるか。竊む勿れと勤めて自ら竊むか、偶像を悪みて自ら聖物を攘むか、律法に誇りて自ら律法を犯すを以て神を辱しむるか(「至聖三」と言へり。是故に彼は又己のことに就きて、我は畏る「他人を教へて自ら棄てらるゝ者と爲らざらん爲なり」(「九の廿七」と言ひて、能辯を誇りて自ら善行を遠ざかりし人々の傲慢を排斥せり。彼が「蓋律法を有たざる異邦

人等性に準ひて律法の事を行ふ時は、律法を有たずと雖、自ら己の律法たるなり」と言ひ、又「蓋律法を聞く者は神の前に義なるに非ず、乃律法を行ふ者は義とせられん」(「十四の十三」と言へるは他の方面より同一の言をイウデヤ人に向けたるなり。預言者も亦曰へり「律法をあつかふ者は我を知らず」(「二の八」と又曰へり「書記の偽の筆之を偽とせり」(「全八」と。何故なるか。「班鳩と燕と雁はその來たる時を守る、然れど我が民は我が律法を知らざるなり」(「全八」と。而して此預言者は他人を教へながら善行を守らざる者は、管に如何なる益をも受けざるのみならず、自らも己の特權を奪はると言へり。若し世の裁判所において有罪者が不名譽にも減獄すべきことを以て罰せらるゝ時は、一般の學校において罪に渡されたる者は如何で勢力を有するを得んや。この學校は其裁判所よりも一層重し。彼處に於ては審定されたる者罰を受くるも、爰にありては罪を犯したる者は罰せられず、乃ち凡てのことは皆改悔を以て罪を矯正せんが爲に行はるゝなり。王宮に於ても放肆なる行をなして譴責されし者は詔敕の解釋者たるを得ず。爾は自ら己の行を以て己の言を排斥しつゝ、反對の事を行ひ、又爾に聞かんと欲する者を避けながら「我が律を傳へ」て他人を教ふるは何の爲なるか。爾の知れるが如く、言にて教へしこと



を行にて無効ならしむること多きを以て、ハリストスも行と言とを以て完全なる  
 教を授くる教師を稱揚して「惟之を行ひ且教へん者は天國に於て大なる者と稱へ  
 られん」(一ヨハネの十九)といへり。然れば爾の生活は清浄なる聲を以て此事を教ふべし、  
 斯れば縱ひ爾は己の口を蔽ふとも、音に爾に近づく者の爲のみならず遠方に在る  
 者の爲にも喇叭よりも高く宣言せん。天は口を存せず、舌を動かさず、呼吸をなさ  
 ざるも、其形態の美麗は觀者をして造物主の妙工を驚嘆せしめつゝ、神の光榮を報  
 す。彼處の天上には形態の美麗あるが如く、爾の靈の中には善行あるべし。爾若  
 し自ら汚され、自己に反對する多くの誣告者と、特に己の良心とを有しながら教師  
 の講座を占めんことを切願し、而して惡辯を規責し始めなば、爾は己自らを責むる  
 程には他人を責めざらん。「我が約を爾の口に執りて」。預言者が「口」と言  
 へるや善し、何となれば心は口より出づる果を有せざるも、口は空しく動き、言ふ所  
 の其人をすら定罪するに動けばなり。而して人若し彼の靈を觀察したらんには  
 大なる戰あるを見しならん。「自ら我の訓を疾み、我の言を爾の後に棄  
 つる」(一七)。爰に「訓」とは靈を矯正し、惡辯を放逐して善行を樂む所の律法の訓  
 を言ふなり。爾自ら之を己の行爲に於て有たざれば、如何ぞ之を他人に播かんや。

爾の知れる如く、彼は「我の言を爾の後に棄つる」といへり。  
 七。斯くの如く、爾は律法を學びて如何なる益をも受けざりしのみならず、天然に  
 有する所のものをも毀損せり。爲すべきこと、爲すべからざること、は天然に  
 吾人に言合められたり、然るを爾は之を排斥して記憶の中に存せざるなり。「爾  
 盜賊を見れば、之に與し、姦淫者に遇へば、之と偕にす」(一八)。完全に  
 して無罪なる人なきを以て、或人は此事に就きて「誰か我が心を淨め、我が罪を潔め  
 られたりと、言ひ得るや」(一十九)と言ひ、パウロも「蓋我は内に省みて責むべきなしと  
 雖、言ひて」此を以て義とせられず(一四の四)と言ひ、又先に訴訟の理由「即ち己の罪」  
 をのぶるものは自ら己を義とするものなり(一七の十八)と言ひしは、衆人若し罪の中に  
 あり、而して神は罪人に神の「律を傳ふることを」禁じたらんには、誰か義とす  
 ることを告げんやと、何人も言はざらん爲なり、即ち何人の之を言はざらんが爲に、  
 預言者は個別に罪の種類を數ふ。イリイが「人若し人に對ひて罪を犯さば、神之を  
 審かん、然れど人もし主に對ひて罪を犯さば、誰か之が爲にとりなしをなさんや」  
 (二の廿五)と言へる如く、「死を致す罪あり」(一ヨハネの二)而して或罪は律法によりて愈  
 されざるが故に死と名づけられたるも、他の罪は甚だ速に愈されたり。然れば、



リストスも新約に於て「若し爾の兄弟爾に罪を得ば、往きて爾と彼と獨處る時に之を諫めよ。若し聽かずは、一人或は二人を伴ひ往け。若し彼等に聽かずば、異邦人と税吏との如くなるべし」(マタイ福音十)と言へり。他の個所に於てペートルが主に對ひ「我が兄弟我に罪を得ば、幾次之に免すべきか」と問ひし時、七十次の七倍迄(マタイ福音十八の二)との答を聞けり、而してハリストスは爰に二回の説諭を受けたる後には、罪の大なるものとなることを教へて、其以上に待つことを許さず。何故なるか、一は他のことに反對せざるか。否然らず、乃ち彼は曰へり、其人若し悔改むる時は「七十次の七倍迄」と。而して何人も、罪を犯したることを認め、又悔改めざる者に對しては如何で之を免さんや。然れば吾人は治療を受けんと欲する醫師に對して、傷を示すなり。聖書は爰に如何なる罪人に就きて言ふか。吾人は注意して聽かん。預言者は左の如くに之を録せり「爾盜賊を見れば、之に與し、姦淫者に遇へば、之と偕にす。爾の口を惡言の爲に啓き、爾の舌は譌を編む。爾は坐して兄弟を誹り、爾の母の子を譏す」(十八節)と。爾は繪畫に畫かるゝが如き惡想を見るか、又不虔者は惡癖をもつて己が天性の尊貴を破毀しつゝ、如何に猛獸に似たる者なるを見るか。然れば吾人は表面的に此繪畫を見ずし

て、注意を以て且つ精密に之を観察せん。曰らく「爾盜賊を見れば、之に與すと。」

是れ諸惡の原因なり、或人々が曾に罪人を責めざるのみならず、寧ろ之と偕に樂むは、特に善行を害し、多くの者の善に對する熱心を弱むるなり。是は其罪より小ならず。パウルの「彼等は之を行ふのみならず、之を行ふ者をも嘉す」(ロマ書二)と言ふを聞け。自ら惡を行はざるも、共に惡を樂む者の罪亦小ならず。罪を行ふ者はその切迫して行へるを示し、又犯罪を以て貧賤に歸することあり、縦ひ斯る遁辭は理由なきことなるも、何故に爾は其によりて如何なる快樂をも受けざるに、彼の爲し、ことを嘉するか。思ふに、彼は罪を悔いん、然るに爾は彼のために、此門戸をも閉ぢ、此治療をも排斥し、諸方より悔改に至る途を彼のために塞ぎつゝ、此慰をも自己より失はんとす。彼は爾が罪に與らば、責むべき義務あるにも拘らず、爾が曾に彼を責めざるのみならず、之を隠蔽し、又曾に隠蔽するのみならず、之を助くることを見る時は、自己に就きて何事かを思ひ、爲し、行爲に就きて何事かを思はんや。多くの人は數々爲すべき事に就きて、唯自己の思想によらず、即ち他人の考に誘導されつゝ、判斷す。罪を犯し、者若し衆人の己を遠ざくるを見れば、己の大惡を行ひ



しことを思はん然れど若し他の人々の之を辱めもせじ、遠ざけもせずして穩かに  
 交際し之を好遇するを見ば、多くの人々の之を納るゝことは犯罪者の不正なる考  
 を助け、それが良心の審判を破壊して大悪を決行するに至らしめん。何れの時か彼  
 將に己を審定し、恐れずして罪を犯すことを止めんや。然れば惡を行ふ者は己を  
 審定せざるべからず、是れ惡を遠ざかる途なればなり、又善を行はざる者は善を稱  
 揚せざるべからず、準備は實行に至る途なればなり。又預言者は爰に人の行へる  
 罪を嘉する人に就きて言ふが故に、全力を盡して公平に之を規責す。惡辯若し規  
 責せらるゝにも拘らず斯くの如く榮え、又善行は稱揚せられるゝにも拘らず辛う  
 じて苦行を行ふ者を招ぐ時は、若し稱揚せらるゝことなくば如何になりしならん。  
 司祭等の集會に於ても之と同様なることを見ること稀ならず。然れども若し此  
 事にして弟子等に於て重罪ならば、況して教師に於てをや。  
 八。人よ、爾は何事を行ふや。律法は破られ、貞操は輕蔑せられ、成聖されたる或人  
 々は多くの罪を行ひ、凡ては蹂躪せられたり、然るを爾は不安ならざるか。預言者  
 は哀哭するに無生物を招きて、最も強く哀哭に關與らしめて曰く「天と地よ、この事  
 を驚け、慄け、いたく怖れよ」(イニレヤ)と、又曰く「新しき酒はうれへ、葡萄の幹蔓は傷む」  
 (イニレヤ)と。

無生の造物は主宰と偕に淋泣、歎息して憤怒す、然るに爾は智なる者  
 (廿四の七)と。にてありながら、悲まじ責めじ、神聖なる律法の爲に驚くべき復讐者とならずして、  
 尙罪人と交際するか。如何にして爾は罪の赦免を受けんや。實に神は己の爲に  
 復讐者を要めじ、幫助者を待たず、乃ち神は此事に於て爾をその役者となさんことを  
 欲す、是れ爾が自ら同一のところに陥らじ、人を怒らし且つ之を以て己の愛を神に顯  
 さん爲なり。他人罪を犯し、爾其側を通過して之を責めじ、哀ますば爾は己の靈を  
 慮らじ、亡滅に傾かしめ、數々己の靈を同罪に陥らしめん、又將來に於ける彼の  
 答辭を一層困難ならしめ、現在に於ては彼を甚しき不注意に慣れしめつゝ、彼に對  
 しては其當を得ざる寛容を以て彼を害すること少しとせざるなり。此事は曾に  
 盜賊に就きて言はれしのみならず、凡ての罪に就きても亦云はれしなり。預言者  
 は罪の小なるものを示したり、是れ爾をして此小罪の爲に赦免を受けざれば、況て  
 他の罪を犯す時は、斯る安慰を受けざることを知らしめん爲なり。又次に預言者  
 が「姦淫者に遇へば之と偕にす」と言ふを聞け、彼は最も重き罪に移れるな  
 り、蓋し前者は後者より其罪輕ければなり。此等の罪を比較しつゝ、或者は「竊む者  
 もし飢ゑし時に其飢を充さん爲にぬすめるならば、人之を殺んせじ」(箴卅六)と言へ



り。竊盜にして免されずば、況て姦淫をや。彼が爰に姦淫と云へるは淫行のことなり。然れば爾若し爾と偕にある牧群中の或者が淫行を行ひて機密に近づくを見れば機密を受くるに際して役者に告げよ、斯々の人は機密を受くるに堪へず、盜聖の手を退げよと。實際に彼若し「律を傳ふるに堪へずとせば、況て聖體機密に觸るゝ時は、彼將た如何なる罰に服さるゝかを想へ、而して其罰を受くるは當に彼のみならず、彼の罪を隠蔽する者も亦然りとす。預言者は「姦淫したり」とは言はずして「姦淫したる者に遇へば之と偕にす」と言へり。預言者もし犯罪者の罪を隠蔽する者に對して、犯罪者と偕に罰を課し、及び犯罪者よりも少なからぬ罰を之に課する時は、他人の腐敗せる傷を隠蔽するは如何なる大惡ぞや。斯くの如き人は、其口實は重からざるにも拘らず、之を慾情に歸し、盜賊も亦己の犯罪を飢餓に歸するなり、然れば爾は斯ることをも言ふを得ず。何の爲に爾は快樂を受けずして、他人と罰を分かち、又其關係者となるか。然れば世の裁判官等も當に犯罪者のみならず、正しく犯罪を知りて之を告げざる彼等の僕をも罰す、而して彼等を引渡す所の主人等は姦淫したる婦にも劣らざる犯罪の罪過を彼等に歸しつゝ、好んで彼等の血を飲み盡し、彼等の肉を食ひ盡したり。彼等は事を擡げずして大に秘

密なる行爲をなすの自由を得たり、彼等は侮辱されたる夫をば不名譽に姦淫者せば、姦夫の大罪に陥らしめたり、何となれば彼等若し前以て其事を公にして顯したらんには、凡ての漁を止めしならん。又網を張りて捕獲せんとする獲物を看視り、種々なる方法を盡して自己の狡計を隠し、獸類を逐ふ所の騒がしき音又は其他のことを力めて許さざる所の者が特に多くの獲物を網羅するが如く、爰にも亦惡魔の張り廣げたる網に坐する者及び姦淫者即ち網に陥いらんとする者を見つゝ、大聲疾呼して之を警戒せざる時は、特更に其人を亡さん。

我に對して「何の爲に我は不安なるか——我は自己の爲に慮る」といふが如き無感覺極れる此等の言を言ふ勿れ。他人の利益に於て自己の利益を求むるの時、爾は始めて己の利益をも特に慮るなり。然ればバズルは「人皆己の益を求むる勿れ、乃各他人の益を求めよ」(コリント前二章十の廿四)と言へり。言ふ意は爾己の益を見出すが爲に人に益あることを求めよとなり。「爾の口を惡者の爲に啓き、爾の舌は譎を編む、爾は坐して兄弟を誹り、爾の母の子を讒す」。何人も云はざるべし。「我は仁慈によりて之を爲す」と。淵に陥らんとする者を止め、之を抑へし、犯罪の快樂に親しみ、亡滅の毒を飲まんとする者に注意を向けざるは如何なる仁愛なる



か。然れど爾は之をも言ひ得ざらん。若し此事にして實際愛より生じ、而して不注意惰眠を嗜むことよりせずんば、何故に爾は犯罪者を遣し置きて、毫も罪を犯さざりし兄弟を誹るか。何の爲に爾は毫も悪しき事を爲さじ、又何事に於ても罪を犯さざりし者を讒言するか。爾は爾の悪癖が自他の方面より如何なる極端の階級に迄達するを見るか。爾は肉慾に酔ひし者に爛醉を妨げ、又之に其爛醉を解明さるも、何も悪しきことを爲さざる者には害を加ふ。爾は坐して兄弟を誹り、爾の母の子を護す。

九。視よ、預言者が如何に此表言を以て譴責を強むるか。言ふ意は、爾は爾と同一の母に出産の艱苦を蒙らしめ、爾と同一の胎より生れ、爾と同一の出生を受け、幼少の時より爾と偕に養育されし者を讒言し、誓に讒言するのみならず、其讒言を實際に行はれしむとなり。「護す」てふ言の意味は斯くの如し。若し自然的出生を以て爾と合せられたる者を讒言すべからずとせば、況て靈的出生を以て合せられたる者をや。然れば罪に傾く者を見てその情落を許す勿れ、又何も悪事を行はざる者を罵詈譁する勿れ。一は嫉妬より生じ、他は無感覺より生ず、將に顛倒れんとする者を保持へざるは、無感覺なるに由るも立てる者を衝倒すが如きは、嫉妬に

特有のことなり。又彼は單に讒言者にあらず、乃ち狡猾と奸計とを以て之を行ふ所の人に歸することを認めよ、即ち彼曰らく「爾は坐して兄弟を誹る」。カインは兄弟を殺して唯一人の生命を奪へるも、是等の人は己の讒言を以て多くの人を、また何人よりも先づ己自らを滅すなり。眞に彼等は其讒言する人のみならず、他の人々或は之を尙善く言へば、唯彼等の讒言を受くる者をも害するなり。實際自己に就きて偽の讒言を聞く者は、誓に害を受けざるのみならず、寧ろ至大なる賞を受く。罰せらるべきは悪を忍受する者にあらずして、悪を行ふ者なり、斯くの如く讒言を聞く者にして其判決に正當なる發端を興へざれば、罰せらるゝは、讒言せらるゝ人にあらずして讒者其人なり。然れば吾人の力ひべきは、自己に就きて悪評を聞かざることにあらず、但となれば此は能はざることにて、ハリストスは「人皆爾等の事を善く言はん時は、爾等禍なる哉」(ルカ福音六の廿六)と言はれたればなり。乃ち吾人が自ら其悪評に對する發端を興へざるに在り。凡ての人々の己に就きて善く言はんことを欲する者は、人の榮譽を得るが爲に人を愛し行ふまじきことに於て人々に勤勞むることを示し、爲すまじきことに於て自己に彼等の愛敬を買はんことを喜びつゝ、屬々己の靈を亡ぼすことあり。他方面よりは、自己に關する一



般の悪評を蔑視する者も亦己自らを亡ぼすなり。凡ての人々が彼に就きて善く言はんことは善行者に取りても能はざることなるが如く、多くの關係に於て自己に關する悪評に多くの發端を與ふる者に就きて悪しく言はざらんとも亦能はざるとなり。若し爾に一點の非難すべき行なきにも拘らず爾を讒謗する者あらば、使徒等及び他の高德者にありしが如く大なる報賞は爾を待たん。然れど良心の吾人を譴責せざる行事に於て人の吾人を誹謗すとも尙吾人は誹謗者及び彼より蒙むる害を輕蔑すべからず、唯相當の注意を以て無根の風説を消滅するが爲に全力を盡さざるべからず。然ればバズルも金錢上の事に於て、即ち貧者に施濟を送らしめんとて多くの人々を遣せり(コリント前二章十六の三)而して左の『是れ我等の務に託する所の惠施の饒なるに由りて人の誘を受けざらん爲なり』(コリント後二章八の二十)てふ言は之が原因たりしなり。彼は他の人々の誘惑さるゝを知りつゝ、之を不注意に遺さじ又之を輕蔑せざりき乃ち誘惑を滅することはその權内に在りしを以て、時を得て其誘惑さるゝ者の爲にも慮れり。彼は又他の個所に於て『故に若し食物我が兄弟を誘はし我永く肉を食はざらん我が兄弟を誘はざらん爲なり』(コリント前二章八の十三)と言へり。言ふ意は誘惑を生ずるは此等の物の關係なきにも拘らず、若し誘惑を生ずる時その我

が身に害を被らしめずとも我は誘惑せらるゝ者の救贖を輕視せずとなり。他人に對して參酌することより生ずる害若し救贖より大なる時は惑はさるゝ者を顧みざれ、若し然らざる時は彼等を蔑視する勿れ。何れの時か惑はさるゝ者に注意せずして之を放任すべき又何れの時か放任すべからざるかに就きては之を以て通則となし、指導となすべし。之に反してイウヂヤ人はバズルが律法を守らざりしによりて惑ひ、且つ數千の人々は爲に背きて信仰を動かせり。彼は何を行ふか。彼は惑を止めんと希望し、數千の人々は救贖の最も重大なりしに由りて、及び彼等の動搖を矯正せんと欲しつゝ、彼が律法を守らざるが如き其考に止まることを彼等に許容さざりき、而して此事は甚だ重大なりしなり。他方より彼等はバズルが十字架に掛りし者を傳へたるによりて惑はされたり(コリント前二章一の廿三)然れども此場合に於て彼は注意を惑はされし者に向けざりき、何となれば傳道の益は一層重大なりしに由る。ハリストスも斯く行へり。ハリストスが食物に就きて宜られし時、多くの人々は彼の『口に入る者は人を汚さず、乃ち口より出づる者は斯れ人を汚すなり』てふ言にて惑へり、其時主は『彼等を捨て、凡そ我が天の父の植ゑざりし植物は其根絶されん』(マタイ福音十の十二至十三)といへり。主に租税を要めし時、彼は拂ふべからざる



を知れるも、尙未だ己の價値を顯すべき時の來らざりしに由りて、彼等を感はさ  
らん爲に、爾海に行きて釣を垂れ、初に上る魚を取りて其口を啓かば、スタアルを  
得ん之を取りて我と爾との爲に彼等に與へよ(マトスイ福音 十七の廿七)と曰へり。彼は大きな  
睿智に充たされたる律法を彼等に與へしも、其愈されざるや、正しく注意を彼等に  
向けずして、舊き律法を變へたり、然れど彼等の未だ主の價値を知るに堪へざるや、  
彼は正しく彼等を寛假し、租税を拂ひて自己の神性に就きての效を秘せり。爾は  
坐して兄弟を誹る。爾云はんか、是れ彼を矯正せん爲なりと。

十。然れども爾は之が爲に密かに彼を讒言せずして、ハリストスの誠められたる  
が如く、密かに彼を呼びて矯正すべかりしならん。衆人の前に述べられたる誹責  
は往々被誹責者をして最も廉耻なき者となすことあり、多くの罪人も其犯罪の人  
の前に知られざる間は容易に矯正の決心を生ずるも、既に其罪惡の衆人に知れ渡  
りたる時は、或者は失望に陥り、或者は破廉耻に渡さるゝなり。何の爲に尙己自  
らを後辱するか。復讐者は自ら己の上に劍を擧ぐるなり。爾若し自己に對して  
善を行ひ、彼に對して復讐をなさんと欲せば、爾の凌辱者を好評すべし、然らば爾己  
の代りに多くの者を彼の誹謗者となし、自らも亦大なる報賞を受けん、爾若し彼に

就きて惡評を發たんか、人々は爾の仇せざるかを疑ひて、何人も爾を信ぜざらん。  
斯れば爾の勞力は爾自己に反對せん。爾は彼の名譽を傷つけんと欲するも、却て  
之と反對なる結果を生せん、何となれば此目的は讚美をもて達せらるゝも、詭辭を  
以て達すること能はざればなり、然るに爾は全く反對に行ひて、自己をも最も不名  
譽ならしめ、而も爾の矢は彼に觸れざるなり。讒言は之を聞く者の心に觸るゝも  
のなるが故に、彼等をして聞く所のことを受けざらしむ、而して之と同一なること  
は裁判上にあること數々なり。何人か裁判所に於て抗議し始むる時は、凡てを破  
毀す、斯くの如く、愛にも讒言に於ける疑念は人の意見を採用することを容さざる  
なり。然れば讒言する勿れ、爾己れ自らを汚さざらん爲なり、肥料を汚泥及び粘土  
と混する勿れ、唯蓄薇、莖菜及び他の花を以て榮冠を編め、甲蟲の如く口もて莖を運  
ぶ勿れ、唯讒言者は先づ自ら惡臭を嘗みつゝ、斯くの如く爲すなり、乃ち蜜蜂の  
如く花を有ち、蜜蜂の如く蜜房を作り、且つ衆と偕に感歎なれ。衆人の讒者を避く  
るは惡臭を放つもの、他人に艱難を與ふるもの、即ち水蛙の血を吸ひ、甲蟲の糞を運  
びて人を害するが如き者より避くるが如し、然るに衆人は能辯なる人をば同族の  
如く、血肉を別けたる兄弟の如く、子の如く、父の如くに受く。然れども我は現在の



こと及び人々の考に就きては何をか言はん。畏るべき日送賄し難き審判と爾が偽を言ひつゝ己が罪に新しき罪を加ふることゝを想像すべし。主曰へり「我爾等に語ぐ凡そ人の言ふ所の虚しき言は審判の日に於て之が答を爲さん」(マトス福音書十二の三十一)と。言ふ意は爾の言ふ所正しからんも斯る場合に於ても爾は他人に不幸と凌辱とを顯しつゝ審定を免れざらんとなり。アリセイに就きて記憶せよ。彼は税吏たらざりき然れども彼は税吏に勝る罪人となれり、税吏に對して悪口を發したればなり。税吏はアリセイたらざりき然れども彼はアリセイに勝る義人となれり、己自らを審定したればなり。「爾既に此を行ひ我黙せり爾は我も亦爾の如しと思へり我爾を誣め爾の罪を爾が目の前に置かん」(節廿一)。

十一。爾は得も言はれざる仁愛を見るか。爾は至大なる仁慈を見るか。爾は恒忍の無限に裕なるを見るか。預言者は爰に恒忍を「緘黙」と名づく。彼曰らく爾は敢て斯く多くの罪を行ひたれども我は爾を罰せずして爾に痛悔することを得しめつゝ之を耐え忍べり。然るに爾は之よりして何の益をも得ざりしのみならず、益々惡辯に耽りぬ爾は改めじ耻ぢず又自己の行為の爲に己を審議せざりしのみならず却て尙我恒忍せし所の者待ちし所の者黙せし所の者及び斯く耐忍びし

所の者——は之を恒忍と仁愛とによりて耐忍ぶのみならず恰も我が之を矯正するを欲せず又斯くの如き行為を怒らざるによりて耐忍ぶと思ひ始むるに至れり。

「神を忘るゝ者よ此を悟れ」(節廿二)。是れ何の意ぞや。「悟れ」とは何の意ぞや。注意せよの意なり。爰に言はるゝ悟るべからざることと特別なる注意を要する事とは何なるか。教の形其物は新なる生活の状態を示すものなり。預言者は僅かに犠牲のことを言ひつゝ福音の律法を叙ぶ而して他方よりは彼の聴衆が甚しき不潔なる罪に蔽はれしを以て彼は泥澤より引出すが如く彼等を不度より引出し又眼の膿を洗ひ潔むるが如く彼等の惡辯に傾ける以前の途を潔めんと欲して前に在りしことを彼等に記憶せしむ是れ彼等が之を忘却して無結果に遣せざらん爲なり。實に罪の習慣は靈を盲ならしめ人々を無分別なる者となし光明なる智慧の目を暗ますに至る。「否すば我奪ひて援くる者なからん」。

嗚呼其仁愛や言ふべからず。是れ温和にして慈愛深き母の言なり或は之を善く言へば斯る愛に無量に卓越する慈悲の言なり。彼は斯くの如き訴をなし斯くの如き怒を示して自ら彼等を預戒す。「我爾を誣め爾の罪を爾が目の前に置かん」と言ひ審定する者の宣告を發して彼は彼等を以て審定されたる者とな



して懲罰に附せず、乃ち訓誨及び勸告によりて矯正し得る者として、畏怖を以て之を抑制し、之を悟らしめつゝ、再び判決を廢止す、即ち彼曰らく「否、ずば我、獅子の如く、奪ひて援くる者なからん。讚美を獻する者は我を恭ふ、己の道を慎む者は我彼に神の救を顯さん」(節三三)。神は己の仁愛を示し、安慰勸告威嚇をなし、畏懼を言ひ含め、畏るべき罰を定め、預戒をなし、且つ行ひしことを矯正し得る方法をも示して「讚美を獻する者は我を恭ふ」といへり。言ふ意は左の如し、獻祭は我が怒を鎮め、審定を廢止せしむるのみならず、又我を恭ふとは是なり。爾は神が獻祭を以て恭はるゝ時は、此事の如何に大なるかを見ん。

「己の道を慎む者は、我彼に神の救を顯さん」。爾は得も言はれざる報賞を見るか。爾は至極の仁愛を見るか。彼は斯く行ふ者に神の道を示し、且つ神の眞の救を納せり。吾人は約束する者に従ひて正しき生活をなし、讚美を獻じて神を恭はん。彼は此道斯る獻祭をもつて、吾々衆人が光榮と權能との今も何時も世々に歸する吾人の主の恩寵と仁愛とを以て受くべき所の救贖に導くなり。アミン。

### 第一百八 聖詠講話

「我が讚美の神よ、黙す勿れ、盖凶惡の口、詭譎の口は我に向ひて啓け、詐の舌を以て我と言ひ、怨の言を以て我を環り、故なくして我に向ひて武器を備ふ。彼等は我が愛に易へて我が敵となれり、我即祈る、彼等は惡を以て我が善に報い、怨を以て我が愛に報ゆ。惡者を其上に立てよ、惡魔は其右に立つべし、願くは彼を裁判せらるゝ時、其罪は定められ、又彼の祈禱は罪とならん。願くは其子は其日は短く、其職位は他人之を受けん、願くは其子は其子は孤となり、其妻は妾とならん、願くは其子は流離して乞ひ、其荒舎より出で、食を覓めん。願くは債主は其有つ所を悉く奪ひ、他人は其劬勞を掠めん」(十一節至)

一。愛に吾人は大なる注意を要す、何となれば、唯前述の表言を見たる最初の見解



よりすれば、此言は多くの不注意なる者を感はしむればなり。此全聖詠は罪をも  
 て満さる言々悉く罪をもて貫かれ、又其言ふ所の者の強くして且つ焔の如き怒を  
 表せり、而して其怒は不度者其人に止まらず、彼の子女にも父にも母にも罰を及ぼ  
 し、皆に其一の不幸を受くるを以て足りとせざるのみならず、艱難に艱難を加ふ。  
 視よ、彼は實際何事を願ふかを。「悪者を其上に立てよ、悪魔は其右に立  
 つべし」即ち好悪なる人々は其誣告者となり、悪魔は彼等に勝つべしとなり、且つ  
 此事は「彼裁判せらる、時其罪は定めらるべき」をも意味するなり。彼  
 は此罰を以て足れりとせず、斯く審定したる後尙他の何人か彼の死後に彼の名譽  
 を受けんことを願ふ、即ち曰へり「其職位は他人之を受けん」と。之にも止  
 まらず、彼が如何なる仁慈をも神より受けざらんことを願ひつゝ、彼の爲に遣れる  
 惟一の港を封鎖して曰へり「又彼の祈禱は罪とならん」と。尙彼は天死せ  
 んことを願ふて曰へり「願はくは其日は短からん」と。此れ亦充分なりし  
 と雖も、彼は之にも止まらず、乃ち一層その罪を積く。極めて熱衷したる靈は人の  
 一二の罰を受くるを以て足れりとせずして、斯く多くの罰を願ふは當然なり。次  
 に彼が願ふ所のことは一層重し、即ち彼の死後に遣れる者の孤となり、養となるを

願ふこと是なり。勿論この事たるや彼等の死後必然に来るべきことなるも、彼は  
 激怒しつゝ、之を罪の中に加へたるなり。孤たるにも止まらず、斯る艱難の後にも  
 益々其艱難を積み重荷を増し、彼の子孫の放逐者、流浪者たらんことを冀ひて「願  
 くは其子は流離して孤とならん」といへり、即ち其子の四方に彷徨ひ、日々  
 の食物をすら有たずして放逐窘迫せられ、何處に於ても避難所を見出さずして、此  
 の場所より彼の場所に移轉することを止めざるべしとなり。彼は之と偕に彼等  
 の貧究而も極端にして堪ふべからざる貧究ならんことを願ふ、即ち親戚も彼等を  
 扶助せし漂泊しつゝ、異種族他人に幫助を求めさせん爲なり。然れば預言者が如  
 かに之を言ひ表すかを聞け。彼は「願はくは其子は流離して乞ひ」と言ひ、  
 之に附加へて「其荒舎より出でん、債主は其有つ所を悉く奪ひ、他人  
 は其劬勞を掠めん」と曰へり。是れ不幸の新しき種類なり、是れ彼の財産の  
 奪掠されんが爲、彼が債主に責められ、凡ての凌辱を受けん爲なり、而して彼等が何  
 事よりも困難なりしは、斯る艱難の中にありて保護者を有せざることなり、故に彼  
 は之をも願ふて「願はくは彼を憐む者なからん」(十二)といへり。艱難の  
 堪へ難きは當然なるも、保護者のなきは彼等に取りて一層の困難なり。「其孤に



恩を施す者なからん。嗚呼時ならぬ時に孤となりしとも人の同情を得る能はず。雷に同情を得ざるのみならず、尙非常なる亡滅に審定さるゝは如何に大なる怒なるか。爾は怒に満され其怒の底止する所を知らざる言を聞くか。彼は彼等が多様な難難の生活をなし諸種の難難に渡されて寂滅せんとを願ふ。而もその諸子の難難の不足なりしかの如く尙「願はくは其列祖の不法は主の前に記憶せられ、其母の罪は銷されざらん。願はくは其罪惡は恒に主の前にあり、主は其記憶を地に滅さん」(十四節)と加へたり。總じて前に述べられたる不幸を精密に顯し、又數々同様に復習するは、其特に怒に當ればなり。「彼は其列祖の不法は記憶せられん」といひて「銷されざらん」と加ふ。是は其意義同一なるも、怒は其事をも他のをも言はしめたるなり、而して此言の意味は左の如し、彼を殺し、彼を害し、彼を滅せ是なり。爾は祖の如何に多きを見るか。爾若し欲せば、我は再び始より之を數へん。聖詠者謂らく、彼祖はるゝ者は多くの悪人に遭遇し、凌辱せられ、彼等の權威に渡され、審定せられ、天死し、名譽を奪はれ、又其名譽は彼の子孫に移らずして、或他人に移り、彼の妻は

亡び、子女は難難を受け、孤兒となり、乞食の生涯を送り、審定せられ、諸方より放逐せられ、如何なる保護者をも有せじ、自己に如何なる宿泊所をも避難所をも見出さずして、神の慈憐をも奪はるべし、彼の名は地より消失せ、彼は寂滅すべし、彼の父も母も己の罪の爲に罰せられ、彼等は不幸不運なる状態にて亡ぶべし。

二。前に陳べられたる凡てのことは聽衆を驚かさざるか。爾は斯く審定されたる此人の誰たるを知らんとは欲せざるか。吾人若し人の何人かを罵詈するを聞く時は、其傍に在る者に、此は何人に就きて言ふなるかを問はん、況て斯る詛を預言者より聞きては、斯くも強き怒に服し、彼に就きて斯程に否斯る恐るべき難難を言はるゝ程に、聖神を怒らしめたる此人の誰たるを知らざるべからず、而も畏懼と痛傷の心とを以て知らんことを要す。是故に爾若し欲せば、吾人は大なる注意をもて復び此聖詠を始より通讀せん。驚き亂るゝ勿れ。我は出來得る丈注意して之を説明せん。研究の問題は重大ならずとせず。第一罪を犯し、者の審定せらるゝと同時に、妻子又は兩親の借に罰せらるゝは何故なるか。第二、此詛はれし者は何人なるか。第三、最高の使徒は如何なる状態をもて、此聖詠否察る、此聖詠の全部にあらず、乃ち其部分がイウダに關はることを證するか。彼曰へり「蓋聖詠の書に



録せるあり云く彼の住所は虚しくなりて其中に居る者なかるべし又其職位は他人を受くべし(二使徒行傳)と。爰に彼は後び他の問を吾人に發す此等のことは皆此聖詠に録されざればなり故に彼は一聖詠を示さずして全書を示せり。即ち彼の住所は虚しくなるべし(三)てふ言は聖詠の他の章(八の廿六)に在るも其職位は他人を受くべし(四)てふ言は此聖詠の中に在り然れどもペートルは其と此とを一の證據に合せたり。パウロも數斯くなせり例令ば「救ふ者はシオンより來りて不虔をイアコフより退けん。且我が彼等の罪を除かん時我が彼等と立つる所の約は乃此なり(五)と云へるが如き是なり。人或は云はん前に陳べられたる預言或は証は何なるかと。預言は証の状態を以て顯さる。吾人は又之を他の個所にも見出すことを得、イアコフも斯くなせり。他人の遭遇せしことをもて聽衆を開悟せしむべきが故に多くの預言は其表言の状態をもて社會に畏懼を増さしむる様に組織されたり。實際或出來事に就きて斯くの如き人は斯くくの難難に遭遇し居ると言ふと又憤怒不滿の状態を以て之を言ふとは其事同一にして其感同一にあらず。而して我が言ふ所は基なしとせず我は預言者の言をもて之を爾等に説明せん。イアコフの將に死せんとするや乃ち其諸子に曰へり「汝等集れ我

後の日に汝等が遇はん所の事を爾等に告げん(六)と又預言せんとして最初より恰も憤怒せるが如く証を以て預言を始む即ちその將來の亡滅を預言しつゝ証の状態を以てルウム爾は我が冢子威光の卓越れたる者權威の卓越れたる者なり、汝は水の沸あがるが如き者なれば卓越るを得ざるべし(七)といへり。彼又仁慈に就きて言ひつゝ是れ亦預言なれども祈禱の有様に於て願はくは神天の露と地の腴を爾イオシフに賜へ(八)と言へり。然れど此等のことは人慾より出でざりしや明けし。彼の祖父はハナアンにも同一のことを行へり曰らく「ハナアン彼の僕となるべし(九)と是れ爾をして凌辱めらるゝ者を保護する所の神が凌辱むる者を罰することを知らしめん爲なり。然ればハリストスも亦預言及び勸奨の状態をもて人々を招きつゝ同一なる説話の形式を用ひたり彼曰らく「爾なる哉爾ホラジンは禍なる哉爾ウフサイダよ(十)又曰らく「イエエルサリムよ、イエエルサリムよ預言者を殺し、者よ(十一)と。聖詠に言ふ所は何人に就きてなるか。爰に神はダウダを以てイウダに就きて僅かに預言し而して其殘部に於ては他の者に就きて預言せるなり。預言は斯る状態なることあり。吾人は聖詠の初の數句が或人に關し而して殘部は他の人に關するが如き組立を見ること一回ならざ



るなり。前に述べられたることは、他の個所に於ても見ることを得即ちイウデヤ人の約地に入るや、ナウソンの子は十二支派を十二部族に分ちて、一分をば祝福し、而して一分をば詛ふべき命を神より受けたり。此等の祝福と詛とは未來のことの預言なりき、彼曰へり「爾は邑の内にも詛はれ、田野にても詛はれん」(律法令書廿八の十六)と、而して支派に關する斯る無数の詛は長き物語を成す。

又爰に言ふ所のことも詛の狀態の下にイウダの遭遇すべき事件を示し、及び預告する所の預言を成すも、此事は後に他のことにも關するなり、即ち預言者は神の司祭に反抗し、及び彼等に對して奸計と不義とを用ふることの如何に大惡なるかを吾人に知らしめん爲に、聖職に反抗する或人々に對して云ふなり。爰に述べられたることは、隣人を凌辱め、何の惡事をもなさざりし人々に對して奸計を企て、之を惡む人々に及ばんと、訓誨に外ならざるなり。爰すべき者よ、聖詠者若し彼の子女の罰せられんことを願ふとも、之をもて心を亂す勿れ、彼が爰に子女と名づくるは自ら斯る人々の惡辯に關與かる者を云ふなり。聖書は數正當の出生による子をも、不虔の出生による者、縱ひ其正當の子にあらざりし者をも子と名づく、例へば「爾等は爾等の父惡魔に屬す」(イオン福音一八の四十四)とあるが如き是なり。縱ひイウデヤ人は出

生によりて惡魔の子たらずと雖も、肉を衣たる者如何で形なき者の子たるを得んや、然れども彼等は不虔に關りて惡魔の親屬となれり。故に聖書は彼等をアウラムに係らざる者と名づく、曰く「爾等若しアウラムの子たらばアウラムの事を行ふならん」(全上八の三十九)と。而して父の爲に子の罰せられざる如く、父も亦子の爲に罰せられざることは、諸人の知れる所なり、律法にも此事に就きて云はれたる、父が其子に惡しき教育を施す時も、彼は子の爲に罰せられず、乃ちイリイの如く己が不注意の爲に罰せらるゝのみ(第一列王組三の十三)。

三。爾若し欲せば吾人は初より此聖詠を重複せん。「我が讚美の神よ、黙す勿れ」。他の譯者は曰く「神よ、我が讚美に不注意なる勿れ」(ラキ)と。是れ爾は光榮偉大にして彼等を矯正する能力ある者なれば、斯る行爲を罰せずして止むことなく、之を罰せよとの意なり。「蓋凶惡の口、詭譎の口は我に向ひて啓け、詐の舌を以て我と言ひ、怨の言を以て我を環り、故なくして我に向ひて武器を備ふ。彼等は我が愛に易へて我が敵となれり、我即祈る」。

爾は強き憎惡を見るか。爾は奸惡なる謀計を見るか。爾は惡意ある者を見るか。



特に神を怒らしむるは、罪人が故意を以て、陰謀を以て、及び力を極めて悪を行ふ時なり。或は何人が誘惑によりて罪に陥りたる時、或は何人が悪を行ひつゝ、恰も用事にもなすが如く行ふ時、或は悪意なき者に對して悪意を懐く時は、是れ亦至て大なる罪惡なり。聖詠者は「我が愛に易へて」と言ひて、彼等は愛すべく又善を以て報ゆべかりし恩者に對して、之と反對なることをもて酬いしに外ならざるを言ひ顯すなり。「我即祈る」。爰に爾は明智を見るか。謙遜を見るか。溫柔を見るか。心の虔敬を見るか。言ふ意は、我は武器を備へず、戦はず、爾に趨り就きて爾の扶助と協力を呼べり、是れ最も強力なる武器、勝たれぬ保護なりとなり。次に彼はイウダに就きて、其自ら己を審定に服し、自ら己に對して死の宣告を發したること、其繼死したること、其使徒職の他に移りたるが如きことを言ひ、然る後復び以前の問題に向ふ。預言によりては、往々其中に言語中絶して他の事件の挿入せられ、其事件を叙べ了りたる後復び以前の事件に向ひて述ぶるが如きものあり。而して此預言はイウダヤ人の忘恩をもて充たされたり。此預言は我が前に述べたるが如く、イウダヤ人がワビロンの囚虜より歸りたる後、司祭に對して惡意を懐ける、或人に對ひて示せるなり。此事たる最も知識を得んことを好む者には歴史

によりて著しきことなり。聖詠者は大なる艱難と保護者を奪はるゝことゝをイウダヤ人に預告せり、即ち彼の爲に凡ての避難所の鎖され、如何なる恒忍同情、容赦も亦顯されざらんことを願ふなり。是は我が前に言ひしが如く、又屢言ふを止めざるが如く、外見上詛なるも、實際に於ては司祭に對して惡意を懐く時、神の如何に怒り給ふかを示す所の預言なり。次に預言者は精密に艱難を陳べて曰へり、「蓋彼は憐を施すを憶はず、即ち貧しき者と乏しき者と心の傷める者とを窘迫せり、之を殺さん爲なり」(節十六)と、何人が卑惡意を懐くのみならず、乃ち慈恵を興ふるに傾き及び同情を起す者に對して惡意を懐くは、是れ非常なる殘忍なり、大なる酷薄なり。斯くの如き人は野獸の如く、猛惡になれる者なり、否、それよりも惡しくなりたるなり。野獸の猛惡は天性の然らしむる所なれども、彼や智慧を賜はられて、自己の尊族を惡癖に渡せり。野獸すら其同族同類に對しては或友誼と溫柔とを表すなり、然るを此等の人々は天性の同一をさへ耻ぢずして、憐むべく保護すべく嘉すべき所の者を放逐し且つ排斥したり。「彼は詛を好めり、故に詛は彼に臨まん、祝福を欲せざりき、故に祝福は彼に遠ざからん」(節十七)。聖詠者は彼に對して多くの艱難を願ふが故に、其發端と原



因とは他の何人にあるにあらず乃ち己が行爲をもて神の佑助を排斥し及び自己に神の怒を引付くる所の其者に在ることを表せり。『彼は詛を衣の如く衣たり詛は水の如く其腹に入り油の如く其骨に入れり』(節十八)。爰には罰の勢力と苦の永續することとを表し又艱難は諸人が己の行爲品行もて自ら善を排斥し自ら己を罰に服する時に彼等自らより彼等自身の罪過より生ずることを借に示すなり。『願はくは詛は彼の爲に其衣る所の衣の如くなり其恒に束る所の帶の如くならん』(節十九)。彼が斯く言へるは斯る人々に及ぶべき神の得も云はれざる怒を顯さん爲なり。此等の言の意味は左の如し艱難は毫も變らず乃ち彼等に粘着し常に彼等に纏綿ひて止まる程彼等を懷抱す。次に神は不虔を罰し惡癖を矯正すること又斯る宣告は管に此一罪人の上のみならず同様に罪過ある諸人の上にも落下ることを注意しつゝ附加へて曰へり『我が敵には主の報此くの如し』(節廿)と即ち我に反抗し惡意を懷きて敵する者の罰は斯くの如く審判は斯くの如しとなり。『惡言を以て我が靈を攻むる者』にも罰而も殘酷なる罰は置かるゝなり。

四。彼は此事に就きて説話を終り神の保護を願ひつゝ復び神に趨り就かんとす。

彼は惡意を懷く者を罰するに止まらず苦む者が受くる所の凌辱の爲に復讐者を有し及び大なる保護を受くることを顯さんと欲して『主よ主よ我には爾の名に因りて行ひ給へ』(節廿一)と附加ふ。彼の謝恩を見又其智謙遜と伴ふの智なるを見よ。縱ひ彼は己の苦に於て保護を求むるに充分なる理由を有すとも己不正ならずして人々より苦を受くる者は自己に神の佑助を願ふに大なる勇敢を有することは聖書の多くの個所に見ゆる所なり。然れども彼は之を示さずして唯神の仁愛に趨りて曰ふ『我には爾の名に因りて行ひ給へ』と即ち我が其に堪ふるに由るにあらず乃ち己自らに神に因りて爾が仁愛慈憐なるに因りてと言ふが如し。彼は是によりて『爾の憐は善なればなり』と附加ふ。彼の斯く曰へるや善し。人々の憐は數斯くの如くならず時としては有害にして亡滅に務むることあるも神にありては常に利益に移む。『我を救ひ給へ蓋我貧しくして乏し我が心は我の中に傷つけり』(節廿二)。爾は彼が堪ふる者としてにあらす義人としてにあらす全く疲勞したる者として苦められたる者として無數の艱難を受けし者として復び救はれんことを願ふを見るか。『我が心は我の中に傷つけり』。艱難の力は斯くの如きものなり即ち彼等は管に體を傷



ふのみならず靈をも亂すなり。「我消ゆること傾ける晷の如く、逐はるゝこと蝗の如し」(節廿三)。爰に預言者は悪意を懐く者の奸計の力と彼等の言ふべからざる讎怨及び彼自ら斯る事情に於て示し、所の其勤勉をも像るなり。

「我が膝は齋に依りて弱り、我が軀は肥えたるを失へり」(節廿四)。爾は彼が敵の奸計と讎怨とに對して如何なる武器を用ひたりしを見るか。「我彼等の嘲となり、彼等我を見て其首を搖かす」(節廿五)。悪人の判断は斯くの如し、何となれば彼等は義人が彼等に敬虔を對表するに際して、曾に退かざるのみならず却て之を誹謗し、之を罵詈訶笑す。彼は如何にするや。彼は冒し難き幫助及び勝たれぬ保護に趨り就きて曰へり「主我が神よ、我を助け、爾の憐に依りて我を救ひ給へ、彼等が此れ爾の手、爾主の行ひし所なるを識らん爲なり」(節廿六)。「此れ爾の手」とは何の意なるか。爾の助爾の保護の意なり。我が欲する所は曾に救はるゝのみならず、我の何人に救はれしかを彼等に知らしめ、二倍の戦利品、二倍の榮冠、至高なる光榮を有せん爲なり。「彼等は詛ふ、惟爾祝福せよ、彼等は興る、願はくは彼等辱しめられ、唯爾の僕は喜ばん」(節廿八)。爰に彼は聽者に謙遜なる智を教へ、假令ひ人々は義人を

無數の詛に附さんも、義人には如何なる害も亦あらざらん、何となれば神義人を祝福し、而して耻辱と不名譽とは彼等自身に向けらるればなり。「爾の僕は爾に依りて喜ばん」(一本には「爾に」)。彼が此喜の其處より來り、福の何處より與へらるゝかを表言しつゝ、「爾に依りて」と言へるや善し、言ふ意は爾より生ずる喜の我にあらん時は如何なる悲哀も既に我を擾亂すを得ずとなり。「願はくは我が敵は侮を衣、愧を以て衣の如く蔽はれん」(節廿九)。視よ、如何に彼は尙彼等が曾に罰に服せしめらるゝのみならず、愧にも不名譽にも服せしめられ、是が彼等の爲に矯正の課程となり、及び最善なる事に變遷する發端とならんことを願ふと。「我我が口を以て高く主を讚榮し、衆の中にて彼を讚美せん、蓋彼は貧しき者の右に立てり、之を其靈を判く者より救はん爲なり」(節三十)。彼は此等のことの報酬に讚榮感謝讚美を神に献じ、衆の前に神の行爲を報じ、衆の中に彼に賜はられたる善の宣傳者となる。是れ献祭なり、是れ供物にして、常に神の恩徳を記憶の中に保存し、之を知慧の中に印し、口にて宣傳し、多くの人々を神の恩徳の聽者と爲さん爲なり。斯くして恩徳を受けし者も己が感謝の爲に報酬を受け、且つ神より一層大なる憐を得、聽く者も亦他の者と偕に



ありしことによりて一層熱心なる者となり、他人の願し、慈恵も彼等の爲に善行に進歩する至大なる動機となるなり。

### 第百九 聖詠講話

『主我が主に謂へり爾我が右に坐せ』(節一)。

一。爾等に願ふ吾人は起ちて注意を強めん。此聖詠は吾人に甚だ大なる真理を報じ且つ諸種の異端を排斥す。此聖詠はイウヂヤ教をもサモサトのパナルをもアリイ教徒をもマルキオニト派をもマニヘイ教徒をも其他復活を信せざる凡ての者をも排除す。此聖詠若し斯く多くの異端に對して向けられしならば此交戦の方法を正確に識らんが爲に吾人も亦多くの識見を有せざるべからず。世の戦争劇に於ては其劇を見終らすとも観客の爲に毫も害なし何となれば彼處に於ける觀は教訓の爲にするにはあらで快樂の爲に設けらるればなり。然れど此處にありては敵は如何様にして攻撃し又吾人は如何様にして彼を打撃し得るかを正確に認めざれば少からざる害を受けん。然れば之を書めざらん爲に爾の智慧を奮ひ爾の耳を開け。吾人は何事よりも先づイウヂヤ教徒を打撃し預言者を自己

の同盟者となして前に陳べたる言をもつてイウヂヤ教徒に對進せん。吾人はこの事の明かにハリストスに就きて謂はれしことなるを確證するにイウヂヤ人等は之を受けずして或る他のことなりとなす。吾人は先づ彼等の教を排斥し然る後吾人の教を述べん。彼等に問はん。義人の此主は誰たるか。彼曰へり『主我が主に謂へり』。爰に記憶せらるゝは一人に就きてにあらず乃ち相互の談話なるを見る。彼等の言によれば爰に言ふ者は何人なるか。神なり。而して聞く者は何人なるか。アウラムなり。或人々は之を以てゾロウヰリを指すと云ふ而して或人々は宛然酒に酔ひし者の如く或は之を尙善く言へば暗黒の中に彷徨ひて互に衝突する者の如く毫も一致せる事を云はざるなり。我に語げよゾロウヰリは如何にしてダウドの主なるか。彼は自らダウドと名づけらるゝことを大なる名譽となしたるを以て其ダウドの主たらざるや明けし。又左の事實は爰にゾロウヰリに就きてもダウドに就きても豈も言はれざることを示せり何となれば彼等は偕に神品職たらざりしに由る然るに爰には非常にして奇異なる神品職を有する或者に就きて云はる曰く『爾メルヒセデクの班に循ひて司祭と爲り世々に迄らん』(節四)と。然れど前に述べられたることを説明さん。



彼等は或尙空しきことをも述ぶ即ち恰も是がイウデヤの民に就きて謂はれたるが如く確定すれども民は司祭にあらずまた爰に言はるゝ他のことも到底イウデヤ民に關せしむべからざるなり。然れば之を空しきこと反駁を要せざることをして打ち棄て彼等が尙云ふ所のことを示さん。そは如何なることなるか。彼等の或者は爰に恰もアウラアムの子は己の主君(アウラア)に就きて曰ふが如く確定す。何事か之に勝る不正確なることあらん。實際アウラアムの子は爰に何事を話さんと欲するか。自ら祭司メルヒセデクに向ひて之に祝福を求めし所の其人は何時祭司となりしか。『我黎明の前に腹より爾を生めり』(三)てふ言をアウラアムに關せしむるは正しきか。如何で之をダウド或はゾロウリ或はイウデヤ民に關せしむることを得べき。爰に述べられたることは人事以外自然以上のことなり。而して若し爰に此等の人々を指して言ふとすれば『爾我が右に坐せ』てふ言は如何なる意味を有するか。如何なる意味も亦なきなり。自ら天使の前に立つことを大なる名譽となし、所のアウラアムに就きて如何にして『爾我が右に坐せ』と言ふを得んや。然れと彼等の説に如何なる根據あるか。聖書が『我等の神主は唯一の主なり爾之に事へ、その外に神あることなし』(復傳律令卷六の四)『十三、四の三十九』

と明言するに際して如何にして是は他の主を言ふなりと許すを得んや。然れど我に語げよ、此は何人の爲に話されしかを。イウデヤ人よ、特に爾の無智なるが爲に言へるなり。何故に斯くの如きことは毫もアウラアムにも、イサアクにも、イアコフにも、モイセイにも話されずして、爾がエギベトより出で、轎を鑄造りたる時に、唯單イウデヤ人にのみ言はれしか。これ何故なるか、我に語げよ。爾若し知らずは、我によりて其原因を知れ。爾はエギベトより出て、轎を鑄造り、エーリスゴルに事へ、無数の諸神を崇拜したるが故に、神は爾の疾病を愈さんと欲し己を諸神と區別するが爲、又獨生子を排斥せざらしめん爲に『唯一』なりと言へり。然らずんば何故に始に『我等の像と肖とに由りて我等人を造らん』(創世記一)と云はれ、『我等降り、彼處に彼等の言語を消さん』(全上十)と云ひ、又ダウドは『神よ、爾の神は爾に歡の膏を傅けしこと、爾の侶に勝れり』(聖詠四十)と言ふか。モイセイが爾の『主神は唯一の神なり』と言ひしは、爾等の荏弱かりしに由る。然れば神若し作爲に於て爾等の荏弱を寛容しつゝ、最も完全なることより、稍完全なることに説話を下さば、況て定理に於て斯くすることは驚くべきことにはあらざるなり。然れば神初に律法として、は興へざりしも、妻を離縁して他の婦を娶ふことを容せり。彼は食物に關



しても初には却て『榮華の如く我之を皆爾等に與ふ』(創世記)と言ひしも大なる區別をなせり彼は(奉神禮の場所)に關しても初には斯る律法を與へず乃ちヘルシヤの地に於ても、パレスチナに於ても到處に於てアウラムに顯れ又後にモイセイには曠野に於て現れしも到處に祈禱を行ふことを許さずして多くの律法を規定めたりき。

二。爾は言はん聖書は如何にして互に齟齬するかと。否らず然れど聖書は各種族の荏弱を矯正しつゝ時に應じて萬事を有益に配賦す。然れば聖書は爾に對しては『爾の主神は唯一の主なり』とも云はれたり。而して神が子を有することに就きては預言者等は既に其書中に言へり然れど之を甚だ明瞭に言はざりしは爾の荏弱によりて爾を害せざらん爲又之を隠さざりしは後に爾の理會し彼等の書によりて真理を認むることを得しめん爲なり。吾人が異教人と談話し及び舊約の確實なることを示す時は特に之を以て預言者等の眞の預言者なることを證することを得。爾もし之を排斥せば如何様にして異教人の口を蔽はんとするか。爾は何事を示さんとするか。エギベトを通れ出でしことか或は爾に關する預言をか。然れども異教人は之を受けざらん。爾若しハリストスに就きて舊約に預

言されたることを示し及び預言の成就したることを證する眞の事件を示さば異教人は之に反對することを得ざらん。然れどイウヂヤ人よ爾若し吾人の聖書を排斥せば如何にして舊約を保護せんや。人あり爾に對ひて何によりてモイセイの書の眞理なるを知るかと問はる爾は何事を以て之に答ふるか。爾は言はざるか吾人はモイセイの書を信用したりと。吾人の聖書は尙其よりも確實なり何となれば吾人も亦之を信用し而も爾の信用は唯一民族に限るも吾人は全世界舉りて之を信用すればなり又モイセイの爾等を承服せしめたるはハリストスの吾人を承服せしめたるに如かず爾等の凡てのことは既に過去に屬すれども吾人のことは現在に在り。爾は預言を示さんか。然れども吾人には之よりも大なるものあり。斯くして爾若し吾人の聖書を排斥せば自己の聖書の上にも墨を生せん。或は奇蹟を示さんか。然れども今爾等はモイセイの一休徵をも示すを得ず此等のことは既に行はれ既に通過したればなり然れども吾人は尙今も行はるゝ所のハリストスの多くの種々なる休徵と太陽よりも明かに輝く所の預言とを有す。或は律法を示さんか。然れども吾人の律法は其中に一層の智を含有す。或はエギベト人の妨害したるに拘らず爾等がエギベトより脱出でしことを示さんか。



然れども反抗する所の全世界を征服すると「エギベト人に勝つとは同一のことにあらず。而して我の之を云ふは舊約を新約の反對に立てん爲にあらず否唯イウデヤ人の忘恩を抑制へん爲なり。舊約も新約も等しく神の與へ賜ひしものなり神より出でしものなり然れども我が證せんと欲する所は、イウデヤ人がハリストスに關する預言を排斥しつゝ、預言の大部分を黜くること及びイウデヤ人若し新約を受けざれば舊約の重大なるを證し得ざることなり。而して前に述べたる言の人に就きて述べられしことにあらざるは、智慧ある者の爲には「我が右に坐せ」てふ言と神が主に向ひて「主」と名づけたること、彼が「黎明の前に腹より」生れたること、彼が「メルヒセデク」の班に循ひて「司祭」たること及び「爾の民は備へられたり」(三)てふ言によりて甚だ明瞭なり。

今吾人の前に「ハリストステアニン」の状態を裝ふ所の他のイウデヤ人即ちサモサトの「パウ」顯れたり彼に對しても新約より言ふことを得。然れども吾人が一を棄て、反對者の他の部分に移るが如く顯れざらん爲に、新約を以て彼をも排斥せん。彼は何を言ふや。曰く、ハリストスは普通の人間にして、其存在は唯マリヤより生れし時に始まると。然れど我に語げよ「我黎明の前に腹より爾を生めり」

てふ此言に對して爾は何事を云はんとするか。凡そイウデヤ人に對して言はれたることは、之を其従者に對しても言ふことを得。吾人は此事に於ては誤らず認る者は大にイウデヤ人に似たる教を有する彼等自身なり故に吾人は彼等に對して同一の武器を用ふることを得、一樣に攻撃する者には同一の矢をもて駁撃せんことを要す。然れば共に寶座に與かることは何を意味するか。之をもて同等父と子とに尊貴なることを示すなり。此事はアライの説を保持する者にも口を蔽はしむることを得。然ればハリストスは「彼はダウドの子なり」と言へるイウデヤ人に對ひて「如何ぞダウドは聖神に由りて彼を主と稱ふる云く、主我が主に謂へり、爾我が右に坐せ」(マタイ福音二)と云へり。而して後に使徒パウロは救贖の經綸に關する教を述べ、又一層明瞭に此個所を説明しつゝ、マルキオン派にも「マニヘイ教徒」にも、凡そ疾病にて苦む者にも致命の打撃を被らしむ(エウレイ)。然れども吾人は自己の問題に還らん。「主我が主に謂へり、爾我が右に坐せ」。爾は同等に尊貴なるを見るか。寶座は統治の表號なり、一寶座のある處には同一なる統治の同等の尊貴あり。然ればパウロも「爾は其使者を以て風と爲し、其役者を以て火燄と爲すと、子には曰く、神よ爾の寶座は世々に在り」(エウレイ八)と云ふ。ダニイルも亦



凡ての造物、天使及び天使長等は前立し而して、人の子の雲に乗りて、日の老いたる者(ダニエル七の九)に迄すら達するを見たり。此等の言もし或人々を惑はしむる時は、宜しく彼が「右に坐す」ることを認むべし、然らば惑迷を止めん。彼は最も尊貴なる彼は、より小さく、より卑しと云ふ勿れ、乃ち彼は父と同等同等なり、何となれば是れ寶座の共與を指示せばなり。「我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れ」。敵とは如何なる敵なるか。「初實は即ハリストス、次はハリストスに屬する者、彼の來らん時に在り、其後は終なり。蓋彼必ず悉くの敵を其足下に置くに至るまで王たるべし」(コリント前書十の五、三三、三十五)と云ふ所のパウルに聴け。

三。爾は預言者の言の使徒の言と一致するを見るか。預言者は「我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れ」と言ひ、而して使徒は「悉くの敵を其足下に置くに至るまで」と言へり。然れども「至るまで」と言ふは、彼我共に時刻の界限を示さず。若し然らずして、彼只或時迄王たらば、その權は永遠の權にして、その國も亡びざる「所の國及び其國終なからん」(ダニエル七の十四、三十三)と云ふ預言の表言は如何にして立たんや。爾は表言の上に注意すべきのみならず、之が了解に注意するの必要なるを

見るか。爾父が諸敵を其足下に置くとの預言者の言を聴きて、心を亂す勿れ、斯く言はれしは、子が恰も能力を有せざるに由りてにはあらず。パウルは子が自ら諸敵を其足下に置くことを述べて「蓋彼必ず悉くの敵を其足下に置くに至るまで王たるべし」(コリント前書十の五)と言ひ、又凡てを彼に歸して「彼が國を神父に付さん時、即凡の首領凡の權柄と能力とを廢せんとする時なり」(同上)といへり、即ち國を建設する時凡の權柄を廢せんとなり。「廢せん」と云ふ言の意味は斯くの如し。パウルは凡てを子に歸して、子より父を分たす、子をも父より別たす、何となれば凡そ子に屬するものは父にも屬し、父に屬するものは子にも屬すればなり。然ればハリストス自らも「凡そ我に屬する者は爾に屬し、爾に屬する者は我に屬す」(イオアン一の十二)と云はれたり。是故に父征服したりと聴きて、子之に與からずと思ふ勿れ、又子征服したりと聴きて、父之に關せずと云ふ勿れ、何となれば此等のことは彼等に於て共同にして、凡ての事も亦彼等に於て同様なればなり。「主はシオンより、爾が能力の杖を遣さん」(二)。

預言者は其力を能力の杖と名づく、而してシオンに就きては、此等の事が其シオンより本原を受けたるによりて記憶するなり、即ちシオンは律法を與へし所なり、奇



蹟を行ひし所なり、説教を始めたる所にして、之より全世界に弘布りぬ。爾若し此  
 表言を寓意的の意味に受けんと欲せば、爾等の就きし所は乃シオンの山及び活け  
 る神の城天のイエルサリム及び冢子の教會（エウリヤ書十二）と言へるバウルに聴け。  
 『主はシオンより爾が能力の杖を遣さん』。『杖』は時として罰を示し、  
 時としては仁慈を示し、時としては安慰を示すも、時としては天國の表號たり。而  
 して此等のことの實に斯くの如きことは、爾の杖爾の槌は是れ我を安んず（聖詠廿四）  
 と言ひ、又爾鐵の杖を以て彼等を撃ち、陶器の如く彼等を碎かん（同上三）と言へる預  
 言者に聴け、又バウルは『爾等何をか欲する、我杖を以て爾等に臨まんか抑愛と溫柔  
 の神とを以てせんか』（エウリヤ書前）と云へり。視よ、彼が如何に屢々罰の杖たりしを、又  
 視よ、彼は如何に天國の杖ともなりしかを。イサイヤは『イエセイの株より一つの  
 芽いで、その根より一つの枝はえん』（イサイヤ書）といひ、ダウドも亦神よ、爾の寶座は世  
 々に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり（聖詠四十一）といへり。爰に彼は『爾等往き  
 て萬民に教を傳へよ』（マテウイ福音）てふハリストスの命によりて、風習を矯正し、人々  
 を無智なる罪より智なる人類に上せつゝ、世界を遍歴したる門徒等の能力を杖と  
 名づけたり。モイセイも亦杖を有し、神の能力を受け、其杖をもて萬事を行へり。

モイセイの杖は水を分ち、バウルの杖は全世界の不虔を打破せり。十字架をも能  
 力の杖と名づけし者は誤らざりしならん、何となればこの杖は地と海とを變化し  
 て之に大能を充滿したればなり。使徒等はこの杖を携へて全世界を遍歴して凡  
 てを行へり、彼等は之を携へてイエルサリムより始めて萬事に進歩せり。『其敵  
 の中に主たる可し』。視よ、太陽よりも輝く所の預言を。『其敵の中に主たる  
 可し』とは何の意なるか。之を換言すれば、即ち異教人の中、イウヂヤ人の中とな  
 る。教會は實に諸市諸邑の中に植てられ、使徒等は實に征服しまた勝ちたり。祭  
 壇と諸敵の中に建設し、綿羊の猛獸の中にあるが如く、また羔の狼の由に於けるが  
 如く在るは、是れ光榮ある勝利の表徴なり。然ればハリストスは使徒等を遣しつ  
 ゝ、『視よ、我が爾等を遣すは羊を狼の中に入るゝが如し』（マテウイ福音）といへり。是は其  
 奇蹟よりも小ならず、四方より圍繞める者に勝つは、羊の狼に勝つよりも小ならず、  
 剩へ一層大なるを意味す、何となれば彼等は十二人にて全世界を引寄せたればな  
 り。『其敵の中に主たる可し』。彼は爾の敵の中に『勝て』と言はすして、『主  
 たる可し』といへり、是れ戦ひて獲たる戦利品にあらず、命令をもて得たる主權  
 なるを示さん爲なり。使徒等は自己にハリストスを有し、其命令に従ひて萬事を



行ひつゝ、實に斯くの如く勝利を得たり。然れば凡ての家は彼等の爲に開かれ、信者は己の所有を賣りて其價を彼等の足下に置き、自己の必要の爲には敢て一物をも取らじ、且つ使徒等に近づくことをすら敢て爲さざりしが如き尊敬を之に顯しつゝ、奴隸よりも彼等に順服せり(使徒行實の五の十三)。

四。而も彼等は信者の上のみにならず、不信者の上にも斯る能力を有したりき。我に語げよ、實際奴僕の特徴は如何なるものなるかを。其主人の命令を行はざる事か。主人の特徴は如何なるものなるか。奴僕を役して其欲する所を爲さざることか。當時の王又は柄權者にして、何人能くその欲する所を行ひ得たる。其欲する所を行し得たるは使徒等にあらすや。確かに然りしなり。諸王と柄權者とは不虔を以て全世界を統御せんと欲し、又惡鬼に事ふるとを命じたり、然れど使徒等は之と反對なることを希望し、而も彼等の希望は成就せり。爾若し彼等の挫指鞭撻苦痛を我に示さば、爾は一層多く彼等の主權を證するなり。如何に又如何様にして證するか。此等のことによりても彼等の希望の成就されしに由る。彼等が如何なる外部の幫助にも必要を有せず、一般の奸計の中に在りて凱旋する所の此主權を得たるは、多くの主人に本色なる律法によらずして善行を以てせり。

奴僕は己の奸計をもて凡庸なる主君を亡滅に至らしめたること稀ならず、何となれば彼等の主權は不完全にして極めて薄弱なりしに由る、然れど使徒等の主權は何人も蔑視することを得ず、却て其奸計は益々之をして光輝燦然たらしめたり。最も光榮あるは如何なる主人なるか、奴僕を順服するが爲に無數の幫助を待つ所の者なるか、或は此等を待たずして權力を振ひて服従せしむる者なるか。其後者たるや云はずして明かなり。多くの人々に對して相應の權力を有する主君等も、法律の援助を藉らじ、又城邑に住居せざりしならんには、數々權力と偕に生命をも奪はれたりしならん。然れどパウロは曠野に在り、又何處に在りても主權を有したりき。爾は彼の如何に諸王よりも光榮なりしを見んと欲するか。パウロは全世界に律法を入れたり、故に人々は王法を遣て、彼の命令に服従せり。而も王は只體の上のみに權力を有するも、使徒等は靈の上に權力を有したりき。信者がパウロより單書札を送られて之に従ひしが如き希望を以て主人若くは王に従ひし臣僕何處にかある。信者等がパウロの爲には己の眼をすら抉出んとするに際して、何人かパウロに對する彼等の愛と熱心とを引き抜くを得ん。何時何人が斯くの如き奴僕を有しや。視よ、何によりて預言者は、使徒等が如何に信者を己に服



從せしめたるか、使徒等が己の權力を以て逃走せしめたる不信者の爲に彼等は如何に畏ろしかりしか、又ハリストスは使徒等の上に如何に主權を有したりしかを顯しつゝ、單に其敵の中に「主人としてあれ」と言はずして、特に強力なる權柄をも有つゝ、「主たるべし」と言へるを。敵は律法を有し、削手を有し、凡ての權柄をも有したりしも、之を見て何事をも彼等に爲し得ざりき。然れど彼等の斯る勢力を有し、は、彼等の中に住せし者の能力に由りてなり。ハリストスは彼等の上に主權を取れり、實に主人たりしのみならず、主權を取れり、即ち大なる權力を有したりしなり、彼等は其中に住せし者の能力をもて、火の中にも、鐵に對しても、猛獸の中にも入り、其他何者をも畏れずして往けり。實にハリストスは常に使徒等と偕に在りき、而して彼等は之によりて生計の凡ての憂慮を離れ、ハリストスに順服し、財産身體現世の生命をも惜まずして、恰も他人の身體に於けるが如く、苦行しつゝ、斯くの如く喜び、而も大悦せり。嘗て敵たり反對者たりし者も、斯く行へり、是れハリストスの勝たれぬ能力は、實に彼等を仇より免れしめたるのみならず、斯る順従と服従とに導けるなり。觀よ、是によりて父はハリストスの足下に敵を置くと言はるゝも、恰も子が毫も作動せざるが如き意味に於て曰はるゝに、あらず、此等のことは

獨生子の行爲なりき、乃ち我が前に言ひしが如く、爾をして父及び子を各自固有の特點を有する一の神となして生れざる二性を想像せざらしめん爲なり。而して此等のことが子によりて行はれしことなるは、其行はれし事によりて觀察すべし、單に之を人事的の意味に話されし事として受くべからず、然らずんば之より多くの虚妄なる結果を生ずべければなり。然れども爾が此事を承服せんが爲に我が言はんと欲する所を聞け。或人々は以前敵たりしも、朋友となれり、然れど或者は今日迄も敵として存す。ハリストスが諸敵を朋友となし、ことは、パウロが彼が國を神父に付さん時『(コリント前書)』と言ひて之を説明せり、救世主親らも己が父に對ひて『我已に爾を世々に榮し、爾が我に與へて行はしむる事を成せり』(イオアン福音)と言ひて之を説明せり。而して敵を服従せしむるは父の行爲なり。然も前者は後者より重し、何となれば頑固なる敵を罰すると、敵を友となすこと、は共に同一にあらざればなり。然れども子も之によりて父より小ならず、父も子より小ならず。而して爾をして前者の父に固有なるが如く、後者の子に固有なることを知らしめんが爲に聞け。子曰らく『詛はれし者よ、惡魔及び其使等の爲に備へられたる永遠の火に往け』(マテウイ福音)と。又群を集むるに諸天使を遣はす者は同じく獨生子な



り(全上十三)吾人は何處に於ても彼が惡魔を罰するを見る。惡鬼自らも「時未だ至らざる先に爾我等を苦めん爲に此に來りしか」(全上八)と言ひて、ハリストスが彼等を苦めんとすることを認む。爾は此等のことの、縦し父に歸するも、亦子の行爲たることを見るか。而して子の行爲の父にも屬することはハリストス親ら「父之を引かざれば人我に來らず」(イオアン福音の四十四)と言ひ、又「人若し我に由らずば父に來るを得ず」(全上十)と言ふを聞け。然れば此等の事は之を人事的に理解すべからず。是故に「爾の敵」てふ表言は、其敵が只子の敵なるが如く、理會すべからず、何となれば「子を敬はざる者は彼を遣し、父を敬はざればなり」(全上五)。

五。斯くの如くイウデヤ人は常に子の敵たるのみならず、また父の敵なり。是故に神は彼等を至大なる艱難に服し、彼等の城邑を破壊して之を敗墟に變じたり、然れどもハリストスの十字架に釘うたれし後直に行はれたるにあらす、乃ち彼等を痛悔せしめんと欲して、痛悔のために多くの時を彼等に與へ、またイウデヤ人等が使徒等によりて神の能力を知り、縦し晚くとも彼等の何時か歸正せんが爲に、使徒等を遣せり。然れども彼等は愈すべからざる病を有したるが故に、神は之を以て彼等を痛悔に招がんと欲しつゝ、非常なる艱難を彼等に遣せり、是れ彼等の嘗て凌

辱めたる者が叩拜すべき者となり、而して彼等に屬するものと、悉く破壊されしを見て、己が以前の生活を失ひ、必然的に眞理に導かれん爲なり。斯くて彼等の尙善良なる者とならざれば、如何なる機にも堪へざる者として永遠の罰に服さるゝなり。「竟」てふ言を聞きて、何等感情的のことにはあらで、乃ち順從を理會すべし。而して諸敵が父にも征服さるゝことは、次の言によりて知るべし、何となれば實座の一なるが如く、竟も亦一なればなり。

「爾が能力の日に於て權は爾と偕にす」(三)「正教會譯の聖詠には、預言者は前に「我が爾の敵を爾の足の竟と爲すに迄れ」と言ひしが故に、或使徒の言ひし如く、何人か子は無能にして助を要するが如く、想はざらん爲に、彼が如何に斯る疑を解くを聞け、曰く「爾が能力の日に於て權は爾と偕にす」と。「權は爾と偕にす」とは何の意なるか。言ふ意は、後に附隨せるものにあらず、常に爾の中に存する所の權は爾に在り。イサイヤも「政事はその肩にあり」(イサイヤの九)と言ひて同じく言ひ顯せり、即ち「通常の王」にあるが如きにはあらず、彼自らの中、彼の本體の中、彼の本性の中に在りとの意なり。王の權柄は數多の軍隊を有するに存すれども、使徒等にありては然らず。然りながら使徒等の權柄も亦彼等を助け



たる外部の力より生ぜしなり、唯ハリストスに至りては己の天性によりて本體の中に之を有す生れて而して後に之を受けしにあらす又外物よりも受けしにあらす乃ち生得にして之を有し、なり。視よ、之によりて彼は其國を問はれし時「我此が爲に生れ、此が爲に來れり」(イオアン福音)と云ひしを。「爾が能力の日に於て權は爾と偕にす」。「權は爾と偕にす」てふ言は、實に彼の政事は他の者に關せざるのみならず、其恒常にして且つ永遠なることをも示すなり。人々は尙生時に於て往々權力を奪はるゝことあり、然れど生時ならずとも必ず死後に或は之を一層善く言ひ顯せば、生時に於てもその權力は彼等にあるにあらすして、我が前に言ひし如く、身體の護衛者なる軍隊にあり、財貨にあり、堅固なる牆壁及び其他のもの、中にあり、然れど神には毫も斯くの如きものなし、乃ち彼の權柄は彼の中にありて、而も堅固なり、彼の本體の在らざらんことの能はざるが如く、斯の國も亦あらざらんことを得ざるなり。「爾が能力の日に於て」。「能力の日」てふ言の下に、既に過ぎ去りし日をも、未來の日をも意味することを得。過去及び未來の日はハリストスの至大なる能力を證す。彼の死にて死は亡ばされ、銅の門は破壊され、罪は滅され、罪は破らるゝ、時以前の諸惡は無にせられ、而して其代りに新しき幸

福の與へらるゝ時は、彼の能力の至大なる證據にあらずや。何ものか此能力と比較するを得ん——爾は彼の奇蹟或は他の行爲を観るか。死者は起き、癩者は淨まり、鬼は逐はれ、海は鎮められ、罪は免され、癩癩者は愈され、天國は開かれ、石は顛び、天幔は裂け、太陽は光を隠くして暗は世界を蔽ひ、寝ねたる聖人の體は起き、盜賊は古郷に還り、天の蒼穹は開かれ、卑下されたる人の天性は諸天の上に高うせられたり、之よりも一層重大なることは、王の寶座の上に植てられたることなり、天使と天軍とは彼の前に立ち、凡ての惡癖は放逐され、善行は還り、神の恩寵は與へられ、漁夫稅吏、製幕者は哲學者の口を閉ぢさせ、辯論者の口を抑へ、惡鬼の主權を破壊し、異教の祭壇、聖堂、祭日及び祝典は變更せられ、惡臭と煙及び不虔なる凡ての献祭とは斷然停止せられ、凡ての占者、盜聖者、卜者及び惡魔の凡ての武器は逃走し、教會は全世界中に生長し、處女の集合及び修道者の集合を組織し、曠野も市邑と偕に敬虔に充たされ、義人及び聖人の集會は整然として謳歌し、致命者及び表信者の集會は至高なる天使の軍と偕に起ちて多く全世界に顯はれ、善行は至て容易に行はれ、野蠻民は教化せられ、野獸よりも猛惡なりし者は天使の生活をなすに熱衷し、十字架の苦と復活との後にハリストス教は太陽の照らす所何處にも弘布せらる。預言者は此等



のこを想像しつゝ、爾の能力の日に於て權は爾と偕にすと云へるなり。

六。爾若し將來の日を見、又此日が彼の能力の日たるを知らんと欲せば、諸天が如何に纏綿し、傷害されたる萬有の如何に復興し、萬物が如何に一の手號によりて顯れ、惡魔は辱められ、惡鬼は失望し、義人は榮冠を受け、各人は己が罪に於ける咎を與へ、而して善行の爲に褒賞を受け、如何に既に死疾病老衰艱難、謫言奸計、衣食住、市邑、美術、航海、屋根、寢食、卓燭、臺惡謀、戰闘、裁判、所婚、配出產の苦勞、出產も亦なき所の他の生命、始り、而も此等のことは掃き淨めらるゝ塵埃の如くに消滅して他の最善なる生活の状態始り、身體には不朽不死及び大なる能力の始まるかを想像すべし。

パウロも之を説明しつゝ、「蓋此の世の形狀は逝ぐるなり」(コリント前書)といへり。爾若し現世に於て之を見ざるによりて話されたる所を信せざる時は、現在のことより未來のことに關する證據を取れ。爾思想をもて全世界と海と、グレンヂヤ及び鹽地、殖民地及び非殖民地、陸上の市邑及び海上の島嶼、山岳及び森林を遍歴せよ、然らば如何に到處にハリストスの能力の輝くか、又如何に凡てが彼の尊敬すべき名を讃揚するを見て、此等のことをなし得るハリストスが、未來のことも吾人に約し

たるを想像すべし。

爾若し最も特別なる證據を見んと欲せば、何に由りて全世界が既にハリストスの屍のなき所の墳墓を見るに、集り、彼の生れがし所葬られし所十字架に釘うたれし所を見んとて地の四極より人々の集合するは如何なる能力によるかを想像し、非常なる能力の休徵たる其十字架をも想像すべし。此十字架は以前には詛はれたる死耻辱なる死、最も耻べき死の徵表たりき、然れども視よ、今や此十字架は生命よりも高價きものとなり、冕冠よりも光榮あるものとなれり、故に吾人は皆之を耻ざるのみならず、裝飾として之を額の上に着く。番に普通の人々のみならず、冠冕を戴く所の人々も亦冠冕の上に十字架を着く、而も是れ甚だ正當のとなり、何となれば十字架は無数の冠冕に勝ればなり。冠冕は首を裝飾するも、十字架は靈を守護す。十字架は惡鬼の威嚇なり、靈病の醫藥なり、勝つべからざる武器なり、近くべからざる城壁なり、勝つべからざる盾なり、十字架は番に蠻人の侵襲のみならず、管に敵の攻撃のみならず、最も猛烈なる惡鬼の軍勢をも防禦す。「聖なる美麗を以て」(ネオドチオン及)。他の譯者は「諸聖人の光明を以て」となし、第三の譯者は「諸聖人の光榮を以て」(不明)となす。是亦現在の日及び未來の日に就きて



述べられたる也。爰に預言者の「光明」と言へるは、諸聖人の偉大なるを言ふなり。何人か太陽よりも光明に輝やき、敬虔の種子を蒔きつゝ、全世界を遍歴したるパウロよりも光榮に、ペートルよりも著名なる者あらん。彼等は天より降りし天使として其敬虔は衆人の近接るべからざる者たりき。使徒行實の記者は此を言ひ顯しつゝ、「餘の者は敢て彼等に附かざりき」(使徒行實の五の十三)と言へり。彼等の衣服は大なる恩寵に充たされ、其體の蔭は大能を顯せり。彼等若し此世に於て斯りしならんには、其無形不死にして凡その見ゆる光よりも輝く所の體を受くる日に於ては、彼等と彼等に似たる預言者使徒義人致命者表信者及び凡そハリストスに於ける信仰によりて善行の生活をもて殊なる者とは如何あらんかを想へ。此集會此等の燈明此等の光線此光榮美麗光明莊嚴を想へ。何人か此等のものを像り得る。如何なる言も能はず唯其經驗は斯る觀物に堪ふる者に此「光明」を説明することを得。思ふに、多くの太陽或は斷えざる電光の天上に輝く時は、其に似たる或者あらん、而して之を尙善く言へば、我は言を以て如何に此美を像らんとを力むとも、之を適當に言ひ顯すこと能はざらん。凡そ斯くの如き比較は感覺的なり、然れど彼處に輝く所の光明と光榮とは此くの如き凡ての美よりも光明なり。其體は管に無形に

して不死の者たるのみならず、言ふべからざる光榮をも着ん。「聖なる光明を以て」。預言者は神を以て唯畏るべき者とのみ思はしめざるが爲に、神を溫柔にして仁慈なる者と像りて「聖なる光明を以て」と言ふ。此亦彼等を斯く光明なる者となさん爲の神の能力の徵表なり、然れば「バズルも我等の卑しき體を化して、其彼の光榮の體に象れる者と爲るを致さん」(コリントの二の十三)と云ふ。

七。使徒は斯く大なる且つ言ひ顯すべからざる問題に就きて「彼は萬物を己に服せしむるを得る能に因りて」と附言へぬ。言ふ意は、此は如何にして、又如何様にしと問ふ勿れ、凡そ神の欲し給ふ所のことは能ふとなり。而して預言者は何故に「諸聖人の光明を以て」と言ふ言の中、光明と言ふ言は單數を用ひずして複數を用ふ。是れ何故なるか。彼等の褒賞の無數にして多様なるに由る。「日には其榮あり、月には其榮あり、星には其榮あり、又星と星と其榮を異にす。死者の復活も亦斯くの如し」(コリントの四の十一)。ハリストスも亦曰へり「我が父の家」に第宅多し(イオアン福音の二)と。而もこの光明は終なし。此光明は夜の交代する所とならず、又暗に場所を與へず、乃ち凡そ見ゆる光よりも言ひ顯すべからざる大さと比較されぬ程の卓越を有し、終を有せざる程至大なる秀絶を以て異なるものなり、死すべく朽つべき體に斯



る勢力と権能とを傳ふる事も亦王の言ひ顯すべからざる行爲たるなり。預言者は斯く高尚なる問題に就きて述べ、聽衆の希望を高尚に向け、次に其述べられたることの根據あるを示し、而して之を行ふ所の者も斯くの如き者たるを示せり。行ひしは何人なるか。父と一體なる者なり。彼は之を言ひ顯しつゝ、續けて曰へり

『我黎明の前に腹より爾を生めり』と。

此等の言を己の希望によりて解釋する者は、爰に云ふ所は、ハリストスの肉體の降誕に就きて言はるゝなりと固めん。然れども我に語つて、如何にして「黎明の前に」なるか。彼等は言ふ、ハリストスは天明前に生れたるに由りて預言者は斯く名づけたりと、然れども爰に曰はるゝは此事に就きてにあらす、又預言者の言ふ所は歴史的事實にもあらざるなり。而して他方よりは、多くの事を蔽ひ包みて言ふ所の預言者等は、只福音者等の報道したる事に就きてのみ述べたりと證するを得ざるなり。爰に「黎明の前に」と言はるゝは、明星の昇る前にの意にあらす、乃ち元始以前、明星の出生する以前の意なり。聖書は時に就きて言ふ時は、何ものかの存在の前と、作動の前とを區別するを通例とす。然れば、睿智者が「太陽に先ちて爾を感謝し、又光の東に對ひて爾に叩拜せざるべからす」(イサヤ六の廿八)と言ふ時は、爰に天

明を言ふなり。睿智者は「光の前に」と言はずして「東光の」前にといへり、即ち光の存在の前にあらす。太陽の存在する以前には何物も存せざりき。乃ち太陽の昇る前にの意にして、天明を示すなり。他の個所に於て太陽の存在に就きて言ふ時は「東の前に」と言はずして、太陽の前にと言ふ。例令は「日月の在る間は、彼の名は世々に傳はらん」(聖詠七十一)とあるが如き是なり。斯くの如く「日の在る間」と「日の出の間に」傳はらん。其存在に關す。爰にも亦斯くの如し、預言者若し夜を示さんと欲せば「黎明の前に」と言はずして「明星の昇る前に」と言ひしならん。他方よりハリストス自らも此聖詠を己が肉體の出生に關せしめずして、靈的出生に關せしむ。彼は何時イウデヤ人に「爾等ハリストスの事を如何に意ふか、彼は誰の子なるか」と問ひしや、又彼等が「ダウドの」と答へし時、彼は此聖詠を引用して「然らば如何ぞダウドは主我が主に謂へり、爾我が右に坐せよと言ふか」と云へり。彼若し「ダウドの主なる時は、爾等は如何にして」彼は誰の子たるか(マテ二の四十二)と云ふや。此等の言は何事を示すか。爰に彼の眞の出生、神父よりの(を)像るなり。然らば彼は唯黎明の前にのみ存在するにあらずや。否、他の個所に於て「月の在る間は、彼の寶座あり」(聖詠七十一)と云は、



る然れども此は唯恰も月の在る間を言ふにあらず。父に就きて「山未だ生せず爾未だ地と全世界とを造らざる先且世より世までも爾は神なり」(聖詠八十)と云ふも然れども彼は雷に世より存在するのみならず尙世の前に存在し又雷に世の前のみならず無限の前に存在す。表言に拘泥する勿れ只適當に之を會得すべし。又預言者の智なるを見よ彼は聖詠の初に於て「我黎明の前に腹より爾を生めり」と云はずして前以て彼の行爲を示し既に彼の行爲を像りたる後直に彼の神聖なる功徳を言ひ顯せり。然ればハリストスも親しく「若し我我が父の事を行はずば我を信する勿れ若し之を行はば我を信せずとも我が事を信せよ」(イオアン福音十の)と言へり。是れ爾の彼が父の右に坐し父と同じく主と稱へられ始元を己の中に有し光明を發揮して人々の間に主權を取ることを知りて彼は神の子なり萬物の前に存在すと聞くと驚かざらん爲なり。預言者が或事をば神に代りて言ひ他のことをば己自らより言ふが如きことも驚くべきなり。預言者は自己の言に勝る所の「我が右に坐せよ」及び「我黎明の前に腹より爾を生めり」てふ言を以て神自らの言として顯し而して他の言は自ら言へるなり。尙認めよ彼は如何に正確なる表言を用ふるかを。爾を生めり」と言へもにて充分なりしも、

彼は地を匍匐する人々の爲に「ハリストスの眞の出生を彼等に示さんと欲して」腹より」と加へたり。又彼が神の手のことを述べつゝ斯くの如く言へるは吾人をして神に手ありと思はしめん爲にあらず乃ち彼の創造の能力を言ひ顯すが如く、爰にもハリストスの眞の出生を言ひ顯さん爲に「腹に就きて」云へるなり。A。次に預言者は裁判の宣告の體裁に預言を組立てんと欲しつゝ最も強き愛及び全く神の神に抱かれたる靈の非常なる喜の徴表として談話をハリストス自らに向けて曰へり「主は誓ひて悔いせず爾メルヒセデクの班に循ひて司祭となり世々に迄らん」(四)と。爾は彼が或はハリストスの神性或は其人性に就きて述べつゝ如何に其說話を復び卑き問題に下すを見るか。福音記者等も斯くなせり此定理をも他の定理をも正確に守らしめん爲なり。何に由りて預言者は「メルヒセデクの班に循ひて」と云ひしや。メルヒセデクがアラウラムの前に餅と葡萄酒とを置きて預象したる所の機密によりてなり又此神職は律法に關せずバウルの曰へるが如く終もなく始もなきに由りて斯く云へるなり。メルヒセデクに於て陸の如くありし所の事は、イイヌスハリストスに於ては眞理として成遂げられたり。「イイヌス」及び「ハリストス」てふ名の以前にもありし



が如く、此メルヒセデクてふ名も己が日の始をも生命の終をも有せざる者として  
 顯る、彼が實に之を有せざりしに由りてにあらす、其出生の著しからざるに由  
 なり。然れどイエスハリストスが日の始をも有せじ、生命の終をも有せざるは、  
 メルヒセデクに於けるが如き意味にあらず、乃ち彼が全く時に於ける始をも終を  
 も有せざるに在り。彼處には蔭而して此處には眞理あり。爾はイエス(舊約の)  
 てふ名を聞きて、眞のイエスに非ずと思ひ、此名を唯預象として受け、而して至も  
 他を求めざるが如く、無始無終なるメルヒセデクのことを聞きても亦眞理を其  
 中に尋ぬる勿れ、乃ち一の名稱をもて足れりとし、眞理をばハリストスに於て見出す  
 べし。爰に「詛のこと」を聞くも實際の詛なりと思ふ勿れ。神の怒は怒即ち激動に  
 あらずして、罰する所の動作たるが如く、詛も亦同様なりとす。神は詛はずして必  
 ず應すべきことを語ぐるなり。斯くの如く預言者は諸聖人の光明神の足下に諸  
 敵の服従すること、能力の日のことを述べて、今や現在の事に就きて言ふなり。觀  
 よ、彼が頑固なる聴衆を感動せしめんと欲して如何なる話法を用ふるかを。彼は  
 始に審判のことを語つて畏懼心を惹起さしめ、又之をもて聴衆の頑固を柔らげ、然  
 る後現在の事に言ひ及ぼせり。彼は之が爲に又説話の混合體を用ふ。觀よ、「我

が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れ」此は未來の事に就きて言ふな  
 り、次に現在の事に就きて「主はシオンより爾が能力の杖を遣さん、爾  
 は其敵の中に主たる可し」と言ひ、次に未來の事に就きて「爾が能力の日  
 に於て爾の民は聖なる美麗を以て備へられたり」と言ふ、次に再び現  
 在の事を言へるも、既に罰にはあらで、仁慈を含める現在の事に就きて「爾メルヒ  
 セデクの班に循ひて司祭と爲り、世々に迄らん」と言へり。爰には諸  
 罪の赦さるゝこと及び神と構和することに就きて言はる。彼は欲する程此問題  
 に止り、話頭を轉じて卑近なる問題に向けつゝ、復びハリストスの(經綸に關與り、縱  
 ひ前に主は父の右に坐すと云ひしとは、雖も「主は爾の右にあり」(五)と言ふ。  
 爾は唯同一の表言を有つことの必要ならざるを見るか。「主は爾の右にあり」  
 とは何の意なるか。彼は經綸に關與りて固められし所の(ハリストスの)肉に就き  
 て述ぶ。即ち吾人はハリストスが「痛く哀みて汗は血の滴の如く地に下る」(廿二の四  
 十)が如き状態にありて固められしを見ん。肉體の天性は斯くの如きものなり。  
 「彼は其怒の日に諸王を撃つ」。此言を以て教會の現在の敵に歸し、又己が  
 罪と不虔の爲に審判を受くべき未來の敵にも歸するは誤らざるなり。「審判を



諸民に行ひ屍を地に満つ(六)。「審判を諸民に行ふ」とは何の意なりや。彼は悪鬼を審判し、宣告し、審定せん。而して彼が實に悪鬼を審判することは、ハリストス親ら「今斯の世は審判せらる、今斯の世の君は外に逐はれん」と言ひ、又「我が地より擧げられん時は、衆を引ききて我に就かしめん」(イサヤ三十一、三十二)と言ふを聞け。若し彼幾何かの感覺的表言を用ふとも、之に惑ふ勿れ、斯る表言は數、聖書の中に用ひらるゝに由る。「廣き地に於て首を毀らん」。若し之を寓意的の意味に解する時は、彼は傲慢を蹂躪すと言ふことを得れども、之を文字通に解する時は、ハリストスが大能もて攻撃せし所のイウヂヤ人の艱難なる運命を理會することを得べし。

「彼は道旁の流に飲まん」(七)。爰に預言者はハリストスの生活の溫柔なる状態、其謙遜なる舉動、彼が凡て此等の行為を行ふに毫も飾らず、自己の爲に鎗持を有せず、感覺的華麗を以て自己を圍ます、乃ち最も質素なる生活、剩へ流に飲みし程質素なる生活を送りしことを示すなり。彼の食物の斯くありしが如く、飲料も亦斯くの如し、彼の食物は大麥の餅、又其飲料は溪流の水なりき。彼が斯る謙遜なる生活を爲し、は、他人にも口腹の快樂を節し、華美を輕んじ、高慢を避くることを教

へん爲なり。次に預言者は斯る生活の結果を示さんと欲して「故に首を翹げん」と言ふ。謙遜にして嚴重なる生活の結果は斯くの如し。

九。此はハリストスの神性に就きてにあらす流に飲みし所の肉稱讚へられし所の内に就きて言はれしなり。生活の質素は如何なる害をも彼の生活に蒙らしめざりしのみならず、之を言ふべからざる高さに上らしめたり。然れば爾愛すべき者よ、爾若し光榮にして大なる者たらんと欲せば、斯る模範を有しつゝ、虚誇と浮華とに充たされたる生活を輕蔑し、質素にして假偽ならざる生活を爲せ。爾の主は爾に此道を歩むことを教へん爲に來れり。是に由りて預言者もハリストスの行為を述べて之をも附加ふ、而して彼は恰も斯く言ふが如し、爾勝利及び戦利品に就きて聞くと、武器、軍士、戰車、軍馬、騎士、盾持を見、騷擾、混雜を聞くことを待つ、勿れ、斯る事を行ふ所の者は、流に水を飲むが如く、謙遜、溫柔なりしも、彼は斯くの如くにして此等のことを行へり。華奢なる食卓を設け、種々なる食物と藥味とを發明し、四方より多くの割烹師を集め、珍奇しき酒類、香料及び滋味を運搬せしむるに、水夫、舵手、漕手を遣し、而して自らも亦之と偕に淵に陥り、凡ての人々にも輕蔑さるゝ者は聽くべし。彼が多くのことに於て要むる所の其ものは、人を高尙なる者となさ



す又彼が小事に満足する所の其事は彼を賤しき者と為さるなり。爾等若し欲せば吾人は多くの例を示さん。或人々には之に萬事を調達する所の多くの人々、即ち水夫・舵手・技術家・家内の役者・織女・染匠・牧者及び家畜を逐ふ者・馬丁・馬匹の監理者ありて彼の爲に凡ての役務を取るあり、他の人には毫も斯くの如き人々なきも、彼は一の餅と水及び質素なる衣服をもつて満足す。彼等の中孰か高尚にして孰か賤しき。只一衣を有する者の高尚なるや明なり。彼は王者にすら従属することを毫も感ぜざるを得れども、他の人は彼に必要なものを調達する諸人の奴隸なり、彼は其役者の何人か彼を棄てざるか、又其を以て眞に損害を彼に蒙らしめざるかを危ぶみつゝ、衆人に對して卑屈に陥り、之に媚び陥ひ、之に務むればなり。實に何ものも要求の多き程斯くは人を奴隸となすものなし、又何ものも唯必要なことのみにて満足すること程に斯くは人を自由なる者と爲さず。不言の動物に於ても亦之と同一なることを見るを得。縦ひ驢馬は數へられぬ程多回重荷によりて利を得るとも、重荷に惱まされれば何の益あらんや。又他の驢馬若し必要なる食物を有せば、凡ての重荷を全く取除かれしとて何の失ふ所あらん。是故にハリストスは全世界に傳道するに準備したる己が門徒等を高尚なる者となさん

と欲して、彼等に凡ての弊累を斷ち斯くして彼等に羽翼を生せしめ、又金剛石よりも堅固なる者となせり。實に何ものも心配を免るゝが如くに、斯くは靈に能力を増加せず、又何ものも心配の重荷の如くに、斯くは靈を弱き者と爲さるなり。彼等に於て速に悲哀を迎へざるが如く、爰には速に満足を見出すことを得ざるなり。彼等の中の或者は多くの残忍無情なる主人又は主婦を有す、然るに他の者は何人にも務めず、乃ち大なる自由を以て太陽の光にて樂み、空氣を利用し、彼を煩はす者をも有せずして、自ら衆人の上に主權を有す。憤怒嫉妬憎惡も彼を苦めず、心痛熱心虚譽傲慢其他之に類することも亦彼を攪亂せず。乃ち濤起たぬ程なる港の如く、彼の靈も亦平安なる状態に在り、且つ現世の何事にも制せられずして容易に天に向ひ進むなり。然れば吾人も斯る自由をもて、現世の平安をもて、及び現世の生活を離脱するの時平穩をもて樂まんが爲に、吾人の主ハリストスイイスに於て凡ての言語、凡ての智慧及び凡ての理解に優る永福を受くるに堪ふるが如き生活を爲さん、願はくは光榮と權能とは世々に主に歸せん。アミン。



聖金口イオアン 第五卷 聖詠講話 上編 終り

六五 五九 五五 四九 四七 四三 二七 二二 一六 一四 一三 九 頁

七 一 五 四 〇 一 五 三 三 九 〇 七 一 五 八 行

祈願ハ祈願  
 所ナリハ祈願  
 其ハ其  
 律法ハ法則  
 示さるハ示さん為なり  
 相續ハ遺産  
 中ハ中  
 願ハ願  
 我が我が  
 モイモイハモイセイ  
 (創世紀)ハ(創世紀)  
 名つくハ名つく  
 槍ハ矢

正 誤

三三九 三〇六 二七八 二五九 二五七 二二三 二二二 二二〇 一七七 一二三 一一三 一〇九 一〇二 頁

八 九 七 五 五 一 一 二 三 九 四 六 行

己に己に  
 高きハ高き  
 愧かしハ辱かし  
 効ハ成功  
 言ハ意ハ言ハ意  
 讒を復せよハ讒を復せよ  
 (ストラクン)ハ(ストラクン)  
 遇ハ遭遇  
 爲なりノ下トヲ脱ス  
 (五)トハ是なり  
 奪ねハ奪ぬ  
 權利ハ權威



三四三  
三五七  
三五八  
三六八  
三七七

二 只ただ其のみ  
二 預言者予言者ハ預言者  
一五 諸王しよおうの女をんなハ諸王しよおうの女をんな  
一 者ものとれなりハ者ものとなれり  
五 遭あ遇いハ遭あ遇い

四〇八  
四六一  
四六二  
五一五

二 快復かいふくハ快復かいふく  
八 時ときノ下したニヲ脱ス  
七 我證わがしやうハ我證わがしやう  
四 始はじめめてハ始はじめめて

明治三十八年三月十五日印刷  
明治三十八年三月十八日發行

發行者兼  
翻譯者

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

木村英吉

印刷者

東京市神田區三河町壹丁目十四番地

石井要藏

印刷所

東京市神田區三河町壹丁目十四番地

丸利印刷合資會社

發行所

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

正教會編輯局

電話本局二五六九番











